

史 跡

上之国勝山館跡 X

—昭和63年度発掘調査整備事業概報—



1989・3

上ノ国町教育委員会

史 跡

上之国勝山館跡 X

—昭和63年度発掘調査整備事業概報—

1989・3

上ノ国町教育委員会

序

国指定史跡上之国勝山館跡の環境整備事業は昭和54年に着手し本年をもって10カ年を経ました。

百数十年の長期に亘る館の存続、膨大な量、豊富な内容の出土遺物等はいづれも当初の予想を遥かに超えるものであり、様々の遺構も検出され、勝山館跡の重要性が次第に明らかとなって参りました。

この間、勝山館の内容が諸出版物等でも紹介されその存在がようやく知られるようになって参りましたが、尚解明されるべき問題が山積しております。

此度文化庁記念物課の格別の御理解を賜わり、京都大学教授朝尾直弘先生、神奈川大学教授網野善彦先生、東京大学教授石井進先生、函館大学教授榎森進先生、山形大学教授仲野浩先生を当町の文化財保護審議会特別委員、勝山館跡調査研究専門員としてお迎え申し上げることができ、現地調査、御指導を賜わりましたことはこの上ない喜びとするものであります。御多忙中にもかかわらず私共のお願いをご快諾下さった諸先生に心から御礼申し上げますとともに、このことの実現について碎心、ご尽力を賜わりました仲野浩先生に深く感謝申し上げるものであります。

諸先生の御力により勝山館や、中世の上ノ国世界が一日も早く明らかにされることを願っております。

上ノ国町が構想中の「北海道中世の丘」建設にも勝山館は重要な位置をなすものと思われます。

町づくりの事業との連携もさせながら、更に本事業の前進を期すものであります。

文化庁はじめ関係諸機関、諸先生方の一層の御指導、御鞭撻を賜わりますようお願い申し上げます。

平成元年3月

上ノ国町教育委員会

教育長 和 泉 定 夫

本文目次

序

本文目次／表目次

例言／引用参考文献

I 調査概要.....	1
II 遺構確認調査.....	3
1 調査目的.....	3
2 検出遺構と遺物.....	3
1 櫛列跡の調査.....	3
(1)位置概要.....	3
(2)層序.....	3
(3)櫛列跡.....	3
(4)出土遺物.....	9
a 陶磁器	
b 金属製品	
c その他	
2 空塙跡の調査.....	12
(1)位置概要.....	12
(2)層序.....	12
(3)空塙跡.....	12
(4)柱列.....	12
(5)出土遺物.....	17
a 陶磁器	
b 金属製品	
c 木製品	
d 石製品他	
(6)土塙墓.....	24
3 空塙東平坦面の遺構と遺物.....	35
(1)位置概要.....	35
(2)層序.....	35
(3)検出遺構.....	39
a 獨立柱建物跡	
b 壓穴遺構	
c 焼土	
(4)出土遺物.....	51
a 陶磁器	
b 金属製品	
c その他	
4 15 LM区試掘調査.....	56
(1)位置概要.....	56
(2)層序.....	56
(3)遺物.....	56

III 小括.....	59
IV 保存処理.....	62
V 植物遺存体の同定.....	63
VI 環境整備工事.....	64
VII まとめ.....	65

挿図目次

第1図 調査位置図.....	2
第2図 調査区位図・櫛列跡土層堆積図.....	4
第3図 櫛列跡平面図.....	5
第4図 櫛列跡周辺出土遺物①.....	7
第5図 櫛列跡周辺出土遺物②.....	8
第6図 空塙跡・同東平坦面土層図.....	13
第7図 空塙跡柱列.....	9
第8図 空塙跡覆土出土遺物①.....	21
第9図 空塙跡覆土出土遺物②.....	22
第10図 空塙跡覆土出土遺物③.....	23
第11図 土塙墓（平面図・セクション図）.....	25
第12図 土塙墓遺物分布状況（釘・その他）.....	26
第13図 土塙墓出土遺物（釘）.....	27
第14図 土塙墓出土遺物（釘）.....	28
第15図 土塙墓出土遺物（釘）.....	29
第16図 土塙墓出土遺物（釘）.....	30
第17図 土塙墓出土遺物（釘）.....	31
第18図 土塙墓出土遺物（釘・銅製品）.....	33
第19図 土塙.....	34
第20図 第1号建物跡想定図.....	35
第21図 第2号建物跡想定図.....	36
第22図 第3号建物跡想定図.....	37
第23図 第4号建物跡想定図.....	40
第24図 第5号建物跡想定図.....	41
第25図 第6・7号建物跡想定図.....	42
第26図 第35号竪穴平面図.....	43
第27図 第36号竪穴平面図・出土遺物.....	44
第28図 第37号竪穴出土遺物.....	45
第29図 焼土①.....	47
第30図 焼土②.....	48
第31図 焼土③.....	49
第32図 空塙跡東平坦面出土遺物①.....	53
第33図 空塙跡東平坦面出土遺物②.....	54

第34図 空塹跡東平坦面出土遺物③	55
第35図 15Lトレンチ・セクション図	57
第36図 木製品重量変化グラフ	62
第37図 説明板詳細図	64

表目次

表1 16J18・23区北壁土層観察表	7
表2 17I9・14区北壁土層観察表	8
表3 16J13・8・15J23北壁土層観察表	15
表4 16I14～15I19北壁土層観察表	17
表5 15J5・10・15南壁土層観察表	18
表6 第35号竪穴覆土土層観察表	43
表7 第36号竪穴覆土土層観察表	44
表8 燃土成分表	50
表9 空塹跡東平坦面出土遺物集計表	52
表10 15Lトレンチ空塹A空塹B土層観察表	58
表11 遺物集計表	61

写真図版目次

P L. 1	勝山館跡遠景
P L. 2	調査区全景
P L. 3	調査状況
P L. 4	遺構検出状況

P L. 5	検出遺構
P L. 6	土層堆積状況
P L. 7	出土遺物
P L. 8	出土遺物
P L. 9	調査・遺構検出状況（櫛列・空塹跡）
P L. 10	遺構検出状況（空塹・柱列・土坑墓）
P L. 11	建物跡全景
P L. 12	環境整備工事・遺物出土状況
P L. 13	出土陶磁器（櫛列跡周辺）
P L. 14	出土陶磁器（青磁・白磁・染付・空塹覆土）
P L. 15	出土陶磁器（美濃・唐津・越前・空塹覆土）
P L. 16	出土鉄・木・石製品
P L. 17	出土陶磁器
P L. 18	出土陶磁器他
P L. 19	出土陶磁器他
P L. 20	骨角器他
P L. 21	保存処理完了遺物
P L. 22	植物遺存体同定写真①
P L. 23	植物遺存体同定写真②
P L. 24	植物遺存体同定写真③

附図 調査区地形遺構配置図

例　　言

1. 本書は史跡上之国勝山館跡の昭和63年度環境整備事業に伴う遺構確認発掘調査と環境整備工事について概要をまとめたものである。
2. 環境整備工事については文化財保護審議会特別委員をお願いしている北海道大学 足達富士夫先生、建築遺構の調査検討には同じく、文化学院 鈴木亘先生、歴史的考察等については同じく、函館大学 櫻森進先生、山形大学 仲野浩先生、東京大学 石井進先生、神奈川大学 網野善彦先生、京都大学 朝尾直弘先生から御指導を賜わった。
3. 本年度の発掘調査は次の体制でのぞんだ。

調査主体者	上ノ国町教育委員会 教育長 和泉定夫
	上ノ国町文化財保護審議会特別委員 北海道大学教授 足達富士夫、文化学院講師 鈴木亘、函館大学教授 櫻森進、山形大学教授 仲野浩、東京大学教授 石井進、神奈川大学教授 網野善彦、京都大学教授 朝尾直弘
主管	上ノ国町教育委員会文化課 課長 岡登志夫
修景技術専門員	山崎重任（上ノ国町建設課長）
発掘担当者	学芸員 松崎水穂
調査員	学芸員 齋藤邦典 藤田登（森町教育委員会）
4. 本書は、松崎・齊藤が協議の上分担作成した。

執筆文担当	文末に示した。尚、Vについて 東京大学総合資料館松谷曉子氏から玉稿 を頂戴した。
-------	--
5. 掃図の作成は執筆者の指示に従い作業員が行った。掃図中の北方位は真北を示す。

6. 調査にあたっては次の関係機関と各位に多大な御指導と御援助を賜わった。（順不同）
　　文化庁記念物課 狩野久、安原啓示、加藤允彦、服部英雄、須田勉、松村恵司、北海道教育庁文化課 裴田敏夫、増田信幸、調査班 森田知忠、木村尚俊、工藤研治、北海道教育庁絵山教育局 村山誠己、東洋文庫 渡辺兼庸、国立歴史民俗博物館 福田豊彦、佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二、愛知県陶磁資料館 仲野泰裕、平泉町郷土館 荒木伸介、建造物保存技術協会 高原孝、北海道埋蔵文化財センター 大沼忠春、前田正憲、八王子市教育委員会 新藤康夫、松村富男、八戸市教育委員会 佐々木浩一、大朝町教育委員会 上原隆弘、豊平町教育委員会 圓山龍溪、浪岡町教育委員会 工藤清泰、松前町教育委員会 久保泰、乙部町教育委員会 森広樹、森町教育委員会 藤田登、七飯町教育委員会 石本省三、八雲町教育委員会 三浦孝一、江差町教育委員会 藤島一己、木古内町教育委員会 鈴木正詔、余市町水産博物館

作業員

糸畠勝恵、秦ミキ子、笠谷智子、岸田慶子、鈴木栄一、高橋江里香、高橋裕子、竹内江美子、中里栄子、中里剛子、西村よね子、沼沢国枝、八田揚子、平野キヌ子、山崎洋子、贅田フミ子
小澤光明、草間栄、小林喜幸、佐藤孝、澤田齊久、武田連人、野坂浩二、長谷川貴俊、石田健滋、森義裕、高橋秀次、竹内力、長谷川義憲、松谷隆利、若狭明、小松伸吾、品田英生、田畠内匠、出口雄二、八田千寿、円子智志、佐藤勝久、加賀厚、大原博之

引用参考文献

- 鏡と劍と玉 1931年 高橋健白
- 刀剣 日本の美術 6 1966年 佐藤寒山
- 仏具 日本の美術16 1967年 蔵田藏
- 茶道具 日本の美術22 1968年 藤岡了一
- 甲冑 日本の美術24 1968年 尾崎元春
- 民具入門 考古民俗叢書 1969年 宮本馨太郎
- 刀装具 日本の美術64 1971年 加島進
- 世界陶磁全集14 明 1976年
- 釣針 ものと人間の文化史17 1977年 直良信夫
- 臼 ものと人間の文化史25 1978年 三輪茂雄
- 珠洲古陶 1978年 石川県立郷土資料館
- 珠洲古陶 越中における展開 1980年 高岡市立
美術館「陸」会
- はきもの ものと人間の文化史 8 1981年 潮田
鉄雄
- 貿易陶磁研究 №.1 1981年
- 貿易陶磁研究 №.2 1982年
- 貿易陶磁研究 №.3 1983年
- 貿易陶磁研究 №.4 1984年
- 北海道の鉄鍋について 物質文化42 1984年 越
田賢一郎
- 近世城館跡の陶磁ノート 研究紀要4 1985年
井上喜久男 愛知県郷土資料館
- 日本常民生活緯引 1987年 滝澤敬三
- 内耳鍋の研究 1987年 足立順司 静岡県埋蔵文
化財調査研究所
- 美濃陶磁器研究の現状 孝古学ジャーナル297
1988年 井上喜久男
- 瀬戸・美濃における大窯生産 岐阜市歴史博物館
研究紀要第2号 1988年 伊藤嘉章
- 美濃窯の研究 東洋陶磁第15、16号抜刷 1988年
井上喜久男
- 北海道における中、近世考古学の現状と課題 物
質文化50 1988年 越田賢一郎
- アイヌの伝統的漁具（マレク）の成立背景に関する一試論 物質文化51 1989年 出利葉浩司
- よみがえる中世2 本願寺から天下へ大阪 1989
年
- よみがえる中世3 武士の都 鎌倉 1989年

I 調査概要

1. 調査

本年度調査対象地区は館主要平坦部北側部分及び段下の大手空塙地区である。尚同地区は中央部を東西に御代参道路が走り南北に二分されている。今年度は昭和62年度トレンチ調査を行なった南側部分を主体に行なった。調査は6月1日より12月3日まで行ない1,500m²実施した。調査方法は從来通り20m×20mの大グリッドを分割した4m×4mの小グリッド方式、また大手空塙地区西側部分は3.5m×14mのトレンチ方式とした。さらに大手空塙地区東側部分の平坦面の調査に際しては、從来通り柱穴配置図を作成し柱穴間の重複、覆土の状態を観察しながら柱穴を掘り下げる。尚焼土等は半截しき作成後掘り下げ土壌のサンプリングを行なった。遺物取り上げはI、II層は4m×4mのグリッドを4分割した2m×2m毎の一括取り上げ、遺構面であるIII層は実測図作成後レベルを附して取り上げた。

6月 大手空塙地区東側平坦部伐開、表土剥ぎ。
4m×4mグリッド設定。遺構確認作業。焼土、柱穴、37号竪穴確認。

7月 大手空塙地区東側平坦面柱穴確認作業。同柱穴配置図作成、36号竪穴確認、焼土平面図、セクション図作成。段急傾斜面表土除去。

8月 段急傾斜面表土除去。空塙A・B表土除去、同確認調査、遺物分布図作成。土葬墓検出。

9月 空塙A・B調査、同東西セクション図作成。土葬墓調査、同セクション図作成。

10月 大手空塙地区東側平坦面調査、35号竪穴確認、37・36号竪穴セクション図作成。土葬墓遺物分布図作成、同実測、写真撮影。

11月 大手空塙地区北側部分トレンチ設定、表土剥ぎ、同調査。同地区で空塙A・B確認、同実

測、写真撮影、段上層部分表土剥ぎ、調査。同地区で柵列確認、同実測。空塙A・B実測、写真撮影。大手空塙地区東側平坦面実測、写真撮影。調査区埋め戻し。

12月 調査区埋め戻し、終了。

2. 基本層序

I層 表土層。10Y R 3%暗褐～10Y R 5%褐シルト。草根多量。やや密。

II層 館廃絶後の自然堆積層。10Y R 5%暗褐～10Y R 3%褐シルト。やや密。炭化物、OS-a混入。細分される。OS-a純層も含まれる。

III層 館機能時の整地盛土層。10Y R 5%褐～10Y R 3%黄褐。密。ソフトローム粒、炭化物等多量に含有する。細分される。

IVa層 繩文期以後より館が機能する直前までの自然堆積層。黒、シルト～7.5Y R 5%暗褐、シルト。從来までのIVb層はIVa-1としIVa層の中に含めた。

IVb層 10Y R 5%明黄褐火山灰。やや密。

IVc層 繩文期包含層。10Y R 5%褐、シルト、やや密。

V層 10Y R 5%にぼい黄褐～10Y R 5%黄褐、ソフトローム。

3. 環境整備

今年度は調査区内の段急傾斜面、空塙A・Bの芝張1,100m²を行なった。

4. 保存処理

昭和58年度より國の補助を得て勝山館跡出土の鉄製品、木製品、漆器の処理を行なっている。今年度は鍋、火箸、小柄、小札等の鉄製品を600点、箸、折敷、木桶等の木製品1,016点の処理を行なった。

(齊藤)



第1図 調査位置図

II. 遺構確認調査

1. 調査目的

昭和61年度に仮整備を行い30年代以降の人工林を除き茅等を刈り取った。その結果正面に大きな段が出現しその前（東）方にも小さな段がつくられている事が判った。更に旧土地所有者から段直下はかつて凹みを持っていた事などの話を聞き、空塹等の存在が推測され63年度トレント調査を実施した。この結果段上で巾25~30cm、深さ40~50cmの溝と柱列が2~3条検出され柵列跡とした。この内側直近にも柱穴があり、柵の付属施設等の存在も推測された。段直下には巾7.8m余、深さ2.4mと巾2m深さ1.5mの2条の空塹を検出した。又塹の外側は整地された平坦地となり柱穴が検出され、豎穴遺構の存在も推測された。

これらの経緯から63年度は段上の柵列の規模、新旧等の確認、柵列内側の付属施設等の検出、段下部空塹跡の規模、新旧の確認、空塹外側平坦面の性格解明等を調査の目的とした。又館中央を通る遊歩道北半平坦部での遺構確認調査を実施した。

2. 検出遺構と遺物

1. 柵列跡の調査

(1) 位置・概要

勝山館の主体部は南東・北西を宮ノ沢川と寺ノ沢川に挟まれた台地上に占地している。この台地は前後三段の大規模な平坦面につくられ、それぞれが更に地割されている。この一段目と二段目の平坦面は5m余と最も大きな段差を有している。この二段目の平坦面端部で柵列が検出され、その直下、第一平坦面の付根に空塹が検出された。塹は付根から前方15m程の間に2条走り、塹の外側約10mまで小平坦面が続き1.7mの段差を持って前方の次の段となる。

(2) 層序（第2図）

調査区南北での土層観察によれば平坦面端部付近は45~60cmの盛り土整形された田層が堆積している。この上面から溝を掘り柱を埋設して柵列としている。溝の巾は15~30cm深さは42~63cm程度である。断面で見る限り柱の下端は水平をなすようである。又埋設される深さはほぼ溝底までの50cm前後である。2、3条の溝跡があり北16J区の断面での新旧は明らかでないが、南17I区では内側が新しい。²¹⁾

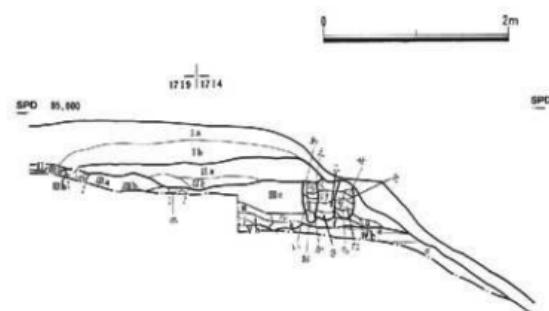
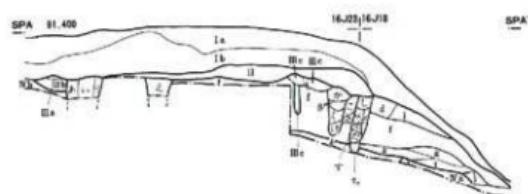
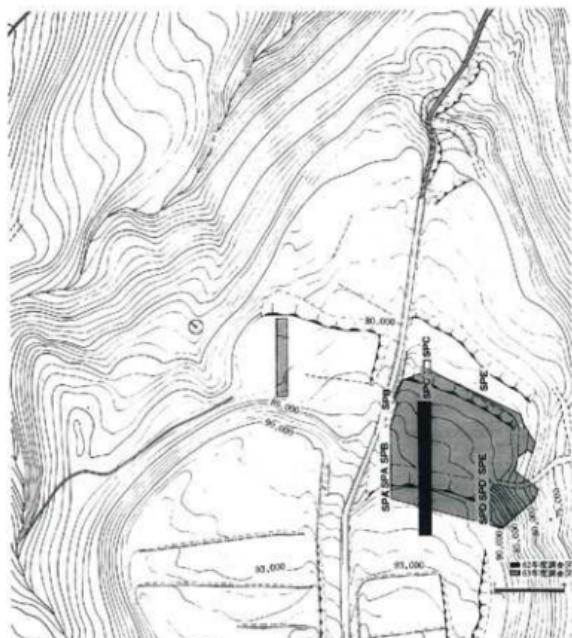
（松崎）

(3) 柵列跡

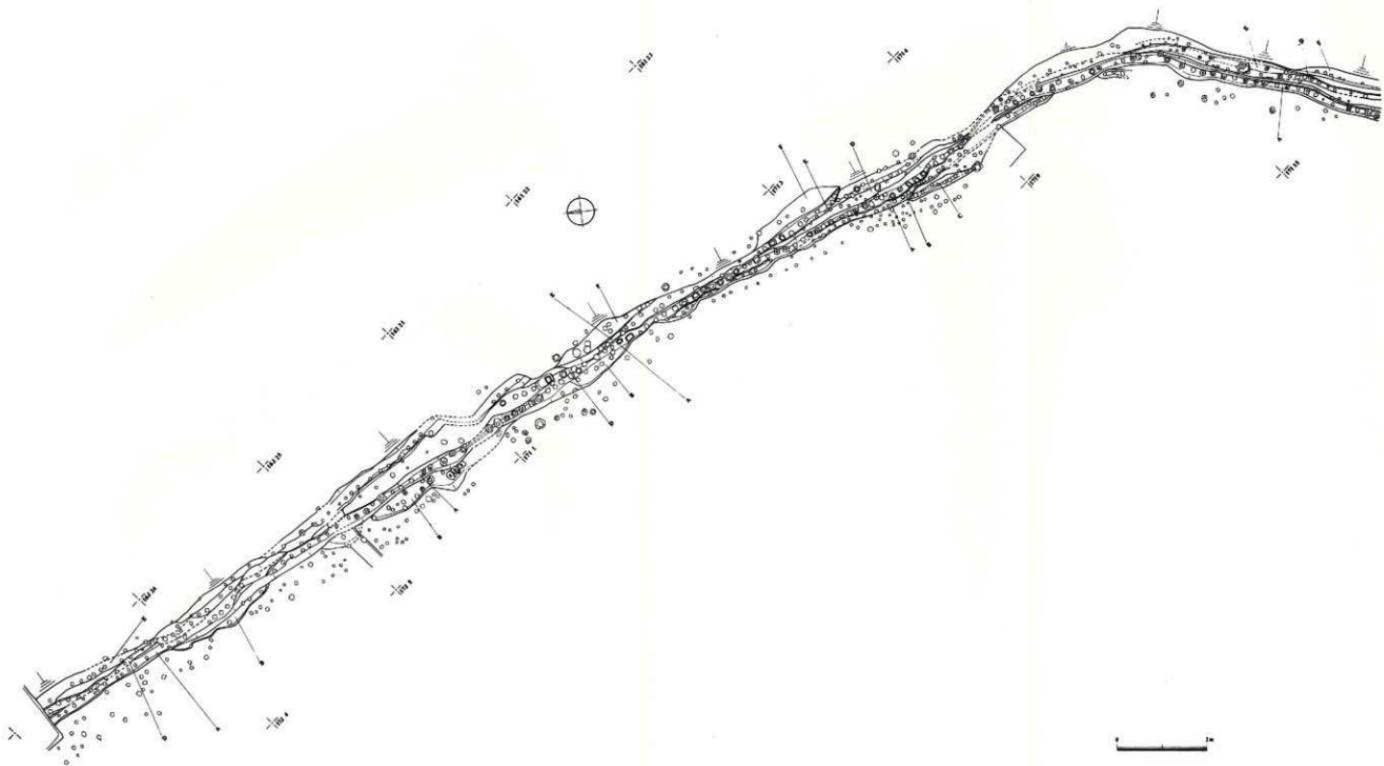
昭和62年度のトレント調査により検出された。館主要平坦面東側肩部分に位置する。柵列の広がりをつかむ事を目的とした。今年度は館中央部を東西に走っている御代参道路より南側の16J23区～17I5区、幅3m×長さ32m程の調査を行なった。その結果田層を掘りこみ面とした柵列群が確認された。

a. 規模・形態

柵列群は16J23区より17I4区までN28°Wを基軸として走り17I5区よりN17°E方向に屈曲する。さて柵列は並走あるいは重複しながら6条確認された。図上ではA～Fと仮称した。その規模は柵列Aは溝の幅25~30cm、深さ17~25cm程で中に直径7~16cm、深さ8~30cm程の柱穴が5~15cm間隔で入る。17I1区～2区付近が柱穴も大きく、深い。また柱穴の間隔が最も狭いようである。柵列Bは柵列Aの西側にある。溝の幅は7~25cm、深さは6~20cm程で中に直径8~12cm、深さ10~26cmの柱穴が7~17cm間隔で入る。17I1区～17I4区附近が比較的規則性をもち柱穴が配置される。また柱穴も太い。柵列Cは柵列Bの内側にある。溝の幅は15~20cm、深さは4~6cm程で中に直径4~9cm、深さ6~12cmの柱穴が4~8cm間隔で入る。17I3区附近に若干残存するのみである。柵列Dは柵列Aの東側にある。溝の幅は16~20cm、深さは10cm程で内側に直径6~10cm、深さ8~20cmの柱穴が10~15cm間隔で入る。16J25区～17I3区までは溝が確認されず柱穴のみである。柵列Eは柵列Dの東側にある。溝の幅は17~20cm、深さは10cm程で内部に直径5~16cm、深さ5~15cmの柱穴が6~15cm間隔で入る。17I2~3区附近が柱穴も大きく、深く、その間隔が最も狭いようである。柵列Fは柵列Eの東側にある。溝の両端が確認できず柱穴のみであった。柱穴は直径6~15cm、深さは10~23cm、その間隔は18~33cm程度である。17I1区附近が柱穴も大きく深い。さてこれら柵列A～Fは北西～南東方向へ走っており、その新旧関係は柵列Aは他の柵列B～Fに切られず調査区間に一本になって伸びている事より最も新しい時期のものである。他の柵列については柵列Aを基準として見ると、柵列Aより西側では



第2図 調査区位置図・桿列跡土層堆積図



第3図 梱列平面図

17 I 1 ~ 4 区では柵列 B は柵列 A に切られている。17 I 3 区では柵列 C は柵列 B に切られている。築造順としては古い方より柵列 C → 柵列 B → 柵列 A となる。柵列 A より東側では 17 I 1 区附近で柵列 D は柵列 A・E に切られている。築造順は古い方より柵列 D → 柵列 E → 柵列 A となる。柵列 F は最も東側にあたり柵列 E と隣接しているが、柵列 E との新旧関係は不明である。これらよりみると柵

列 A が柵列 A ~ F の中央部を走っているため柵列 A と柵列 A の東側柵列 B、柵列 C および柵列 A と柵列 D、柵列 E の新旧関係は判明したが柵列 B、柵列 C と柵列 D、柵列 E の新旧関係が不明である。1989年度の調査では御代参道路より北側の台地肩の調査を行なう予定であり、柵列群の新旧関係等を1989年度の調査の課題としておきたい。(齊藤)

表 1 16 J 18・23 区北壁土層観察表①

地名場所	小区分	標 領	色		土 命 名	層 底	場 所
			J 15 n a t u r a l	調			
I	a	10 Y R 5/	暗	暗	シルト	やや粗	
	b	10 Y R 5/	+	+	シルト	中中密	
II	c	10 Y R 5/	+	+	シルト	やや粗	
	d	10 Y R 5/	黄	黄	ロームブロック混入シルト	やや粗	
	e	10 Y R 5/-5%	黄	黄	ロームブロック10%混入シルト	やや粗	
	f	10 Y R 5/ 10 Y R 5/	黄	黄	ローム10%炭化物5%混入シルト	やや粗	
	g	7.5 Y R 5/	+	+	シルト	やや粗	
	h	7.5 Y R 5/	+	+	炭化物10%炭化物5%混入シルト	やや粗	
	i	10 Y R 5/ 5%	黄褐	黄褐	炭化物5%混入	やや粗	
	j	10 Y R 5/ 5% 黄	黄褐	黄褐	炭化物5%混入	やや粗	
	k	10 Y R 5/ 5% 黄	黄	黄	ロームブロック混入、炭化物5%混入	粗	
	l	10 Y R 5/ 5% 黄	黄	黄	ロームブロック70%, 炭化物5%混入、シルト	やや密	
III	m	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック70%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗 (柱状跡?)	
	n	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック70%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	o	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック70%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	p	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック70%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	q	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック70%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	r	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック70%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	s	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック70%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	t	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック70%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	u	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック70%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	v	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック70%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
IV	w	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	シルト	粗	
	x	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	炭化物5%混入	やや密	
	y	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック20%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗 (柱状跡?)	
	z	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック20%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	aa	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	炭化物5%混入	やや密	
	bb	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック20%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
V	cc	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック20%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	dd	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	炭化物5%混入	やや密	
	ee	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック20%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	ff	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	炭化物5%混入	やや密	
	gg	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック20%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	hh	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	炭化物5%混入	やや密	
VI	ii	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	シルト	粗	
	jj	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	炭化物5%混入	やや密	
	kk	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック20%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	ll	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック20%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	mm	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	炭化物5%混入	やや密	
	nn	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック20%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
VII	oo	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	シルト	粗	
	pp	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	炭化物5%混入	やや密	
	qq	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック20%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	rr	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック20%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
	ss	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	炭化物5%混入	やや密	
	tt	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	ロームブロック20%, 炭化物5%混入、シルト	やや粗	
VIII	uu	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	シルト	粗	
	vv	10 Y R 5/ 5% 黑	黑	黑	炭化物5%混入	やや密	

表2 1719. 14区北盤土層観察表

層序	小区分	細別	色調		組成	備考
			JIS notation	土色名		
I		a 10YR%	暗褐色		2cm基盤埋クーム粒混入 火山灰含有3.0%	耕作生 やや潤くしまる
		b 10YR%	褐色			
II		a 7.5YR%	褐色		炭化物混入	ソフト
		b 7.5YR%	にじいろ		火山灰含有3.0%	ソフト
III		c 7.5YR%	褐色		ローム粒、炭化物混入	ソフト
		a 7.5YR%	褐色		1cm以下毛管帶、粒、炭化物、火山灰混入	ソフト
		b 7.5YR%	褐色		2cm埋混入、粘土層	
		c 7.5YR% N	褐色		2~4cm基盤埋炭化物含有粘板土	かたい構造、軽く白色化する 粗ソフト
		d 7.5YR%	褐色		ロームブロック含有	ソフト
		e 7.5YR%	褐色		火山灰、ロームブロック混入	
		f 7.5YR%	褐色		火山灰混入	かたい
		g 7.5YR%	褐色		火山灰、炭化物混入	
		h 7.5YR%	褐色		炭化物混入	
		i 10YR%	褐色		炭化物混入	シルト
		j 10YR%	褐色		ローム粒、炭化物混入	
		k 10YR%	褐色		火山灰、炭化物混入	重、かたい
		あ 7.5YR%	褐色		基盤炭化物含有	ソフト
		い 7.5YR%	褐色		3cm基盤埋炭化物含有	
		う 7.5YR%	褐色		基盤埋有	固くしまる
		え 7.5YR% N	暗褐色、褐色		2~3cm基盤埋炭化物含有	
		お 10YR%	褐色		炭化物含有	およりやや弱く、薄い 重い 硬、もろい ソフト
		か 10YR%	褐色			
		さ 10YR%	褐色		2cm基盤埋含有	重く、 重い 硬、もろい ソフト
		こ 10YR% N	褐色			
		け 7.5YR%	褐色		2cm基盤埋含有	重く、 重い 硬、もろい ソフト
		こ 7.5YR%	褐色			
		き 7.5YR%	褐色		2cm基盤埋含有	重く、 重い 硬、もろい ソフト
		し 7.5YR%	褐色		2cm基盤埋含有、塊状、粘質土	
		す 7.5YR%	褐色		炭化物微量含有	
		せ 7.5YR%	褐色		下位1cm大粒土塊、炭化物微量含有	
		そ 7.5YR%	褐色			ソフト
		た 7.5YR%~N	褐色		基盤埋含有	粗
		ち 7.5YR%	褐色			ソフト
		つ 7.5YR%~N	明褐色、褐色		2cm基盤埋含有	
		て 7.5YR%	褐色		炭化物含有	ソフト
		と 7.5YR%	褐色		粘質土	ソフト
		な 7.5YR%	褐色		基盤埋含有	粗、かたい
		に 7.5YR%	褐色		炭化物微量含有	
IV		a 7.5YR%~N	黒褐色		湿性	重、ソフト
		b 7.5YR%	暗褐色			重、ソフト
		c 7.5YR%~N, 10YR%	褐色			重、ソフト

(4) 出土遺物

柵列の南、平坦部で陶磁器、鉄製品等が出土した。

a. 陶磁器

青磁、白磁、染付、赤絵、瀬戸・美濃灰釉・鉄釉、唐津の碗皿類、珠洲系、瀬戸・美濃、越前の壺鉢、甕等が出土している。(P L13-1~19, 21~69, 73, 75~79, 14~36, 37, 15~14, 23~32, 58, 17~34, 41, 19~1~5, 第4・5図)。

青磁：底部削り連弁文の浅い皿、線描き蓮弁・無文碗、後花皿がある。

白磁：腰部以下露胎で高台が削り出しの輪高台又は抉りのつく硬質の丸皿、端反りの丸皿、腰部をもたず一気に外反する皿、筒型の碗と推されるものなどがある。8は陶質の底部破片で削り出しの高台が着く。

染付：蓮子と体部の直立する角形の碗、糸底端反りと甚筋底の丸皿がある。19は見込み部分が平らで蛇の目に作られる。口縁には省略された波頭文？が描かれ、高台ウラには放射状にカンナ目が残る。蓮子碗の一と推する。²² P L17-34も同類である。37は外面と見込み全体に唐草文を描く皿である。見込みの花は牡丹か。24、25の口縁内側は圓線のみである。

瀬戸・美濃：灰釉は碗、皿、袋物である。38、39は端反りの碗で線描きで側先型の蓮弁文が施されている。又43、45は柳状具で線描きされたものである。皿は端反り皿で菊、酢漿草等の印花が押される。49、50は小型のもの、51は裝皿である。15~14は見込みが盛り上る内はがしのものである。高台ウラにトチ痕が残る。53は内面横縫整形筋の残る袋物下部である。透明度の高い釉調である。

鉄釉は碗と皿である。60、65~67は小片であるが輪高台で高台脇の削り巾が狭いもの、56は頭部がくびれ内反りの高台がつくものと推される。68は輪高台で高台脇が広く高台径もやや大きい例である。69は大ぶりの碗又は袋物と思われる。一部火を被っているが墨黒の釉が内側とともにかけられている。64は掻底の皿で、茶褐色の釉が肩下部まで施され、一部3mm巾程の巻付きまで下っている。73は唐津の直口の碗である。

壺鉢は越前、美濃、珠洲系のものがみられる。78は頭が大きくくびれ、口端は丸味をもってつくられ、口唇内側のゆるく傾いたところに横曲波状

文が施されている。胎土は軟らかみで器面は赤褐色を帯びる。15~58も同様である。P L19-1は叩き目の顯著な甕又是甕である。内面が丹念に整えられ滑らかになっている。灰青色を呈し珠洲系と推される。5は越前の甕かと推する。内面に成形時に内側からおさえた跡が残る。

b. 金属製品

鉄、銅製品がある。

鉄製品：巾広の鉢状のもの(P L16-51)口唇が肥厚し直下が幾分くびれる容器の破片等がある。

銅製品：(P L19-35)は鍛の銅を地金とする破片である。推定7.5cm程の円形で五カ所にハート型の抉りをいれ変化をつけると思われる。周りは銀鍍輪とし両面共縁に沿って三個の菊花が見られる。象嵌の有無は不明。耳に1カ所親い切れ込みがある。欠損した中央部分にも刺みがある。(10図26)。小柄は破損品が2点出土したが出土地点が近く、小口部分と底であり同一個体かも知れない。小口の方は残存する刀身が鋸化膨張し包んだ銅が破れている。棟方、地板等に装飾はみられない。

c. その他

陶錘(P L19-45)、繩文・擦文土器等がある。²³

陶磁器の示す年代は、15世紀後半から16世紀末葉の間、殆ど勝山館の存続した全期間に亘っている。

青磁削り連弁文碗、白磁丸皿、瀬戸・美濃灰釉蓮弁文碗、端反り印花皿、鉄釉輪高台、高台脇削り巾の狭いもの、壺鉢等で珠洲系としたものなどは勝山館出土品中、古期のものである。瀬戸・美濃の物は大窓I期に属するものであり、珠洲系の壺鉢は珠洲のVI期頃に比定されるものであろう。又灰釉の内はがし装皿や唐津は後半~末期のものである。内はがし皿は大窓II~III期に属するようである。

なお器種・製品は殆んどのものがある。陶磁器の中に後述する空塗覆土出土のものと接合するものが數例あり、13~37などは二条の空塗を越えた東の平端部にまで広がっている。従って基本的に空塗覆土の遺物の殆んどはこの柵列周辺平坦面に帰属する遺物と考えられる。ここでは遺物の概略のみを記した。

(松崎)

註1 63年度概報で外側程新しいとしたがこれは

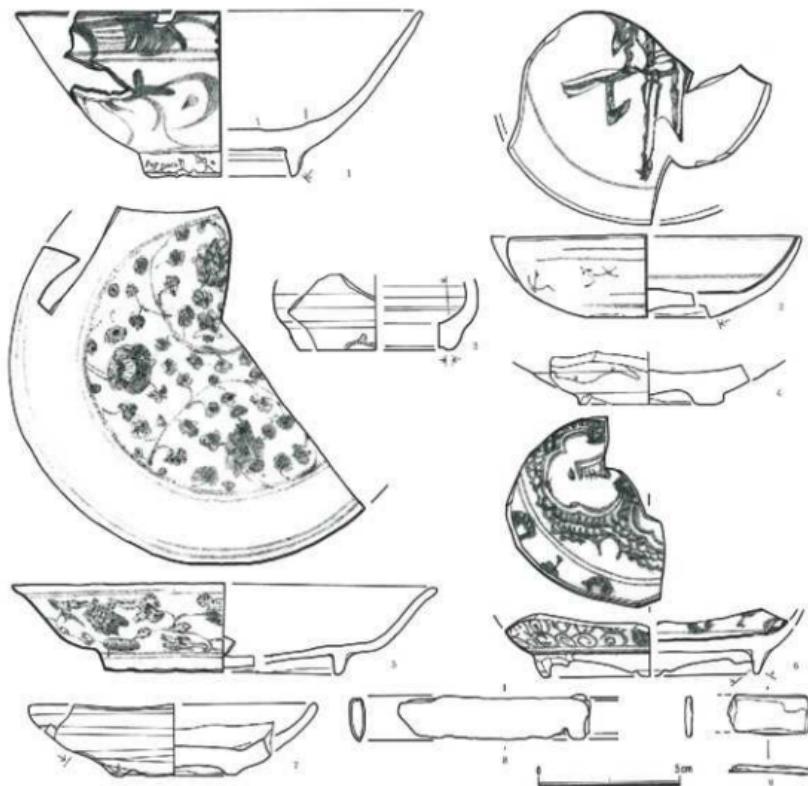
更に検討を加えなければならないようである。

2 これに類するものをかつて勝山館染付碗第

I群としたが訂正したい(本概報IV)。

3 擦文土器は土器類が未整理であるのでそれらを併せ明らかにしたい。10年間で10片前後

を数えているが、未洗浄の土器片中に含まれているものもあるかも知れない。



第4図 横列跡周辺出土遺物①



第5図 梯列跡周辺出土遺物②

2. 空塙跡の調査

(1) 位置・概要

第一平坦面と第二平坦面は約5mの比高差を持っている。この第一平坦面の一番奥、第二平坦面の直下に空塙が二重に切られている。この地区的旧地形は約30°の斜面であったがそれを70°余の急傾斜につくりかえ防御を堅くしている。内側の塙はその角度のまま更に掘り下げられており、第二平坦面端部と塙底の比高差は8.3mになる。

二条の塙はほぼ平行して走り宮ノ沢に切り落される。塙と塙の間は小平坦面となるがその南東半で土塙群が検出された。その一基には木棺が納められ、人骨も認められた。他に、鉄製品の出土したものもある。

又、内側の塙の北東端では4対の大形柱穴が塙をはさんで検出されている。

(2) 層序（第6図、表3・4）

耕作土、再堆積層を主とする第I層、O S-aを鍵層とする第II層、館形成時の整地盛土の第III層、遺構覆土のIII'層に区分される。第I層の再堆積層は基盤砾や、その細かく粒状化した小砾・粒と粘質土を多く含む層である。空塙Aの上位から崩落があったとの聞き取り内容をみて、空塙BのそれについてはO S-a降灰以降明治頃の整地を想定したところである（本概報IX）。空塙覆土がAとBで堆積量の異なる事についてはAが段直下にあるため上位からの土の流入による埋没量が多かった為と推している。又III'A①とした塙北端面に凹みを持って堆積する層は、上位からの雨水等の流路を示すと思われる。

空塙Bに堆積するO S-aと解している火山灰がそれ以前で館形成期はその直後に降灰した別のものである場合空塙BとAの関係は全く異なるものになる。後述の塙東の遺構が塙Bに平行して、その平坦部内でまとまりを持っていること、空塙B覆土の遺物は大変少くしかも、I層中からの出土であること、P.L. 13-37のように第二平坦面から空塙A、BのI、II層、塙東にまで分布する遺物があることなどの知見と今後の塙中央部の調査結果を併せその結論を得る所存である。

(3) 空塙

検出された空塙は2条である。

内側のAは巾5.3m~10.2m、深さ1.7m~3m。検出した延長44.4m。その南東34mからは宮の沢

に切り落とされるが途中から二手に分れ一方は第二平坦面の下位を取り巻いて南東斜面中腹を回り込む。今一方は第一平坦面の側方に延びている。この分岐点と第二平坦面上部との比高差は11.9m。又この一段低い位置での塙巾は、4m、深さは2m。塙の両側面は中央~西半では青灰色、赤褐色の軟質の岩盤層からなり、直線に近く仕上げられているが南東部から切り落とされる部位は劈開性の岩盤である為、階段状に近い。塙底に近い部分の両側は上半に比べ急角度をなす。塙底の巾は約30cm。中央付近がやや低く若干の水がたまる（但し塙全体を通して掘り上げた時北半がそのまま寺ノ沢側に傾斜して排水されることを考えられる）。塙掘り上げの明瞭な単位工程等は把握できなかった。南東半の堅い岩盤部の階段状の段差がそれを示すかもと思われる。

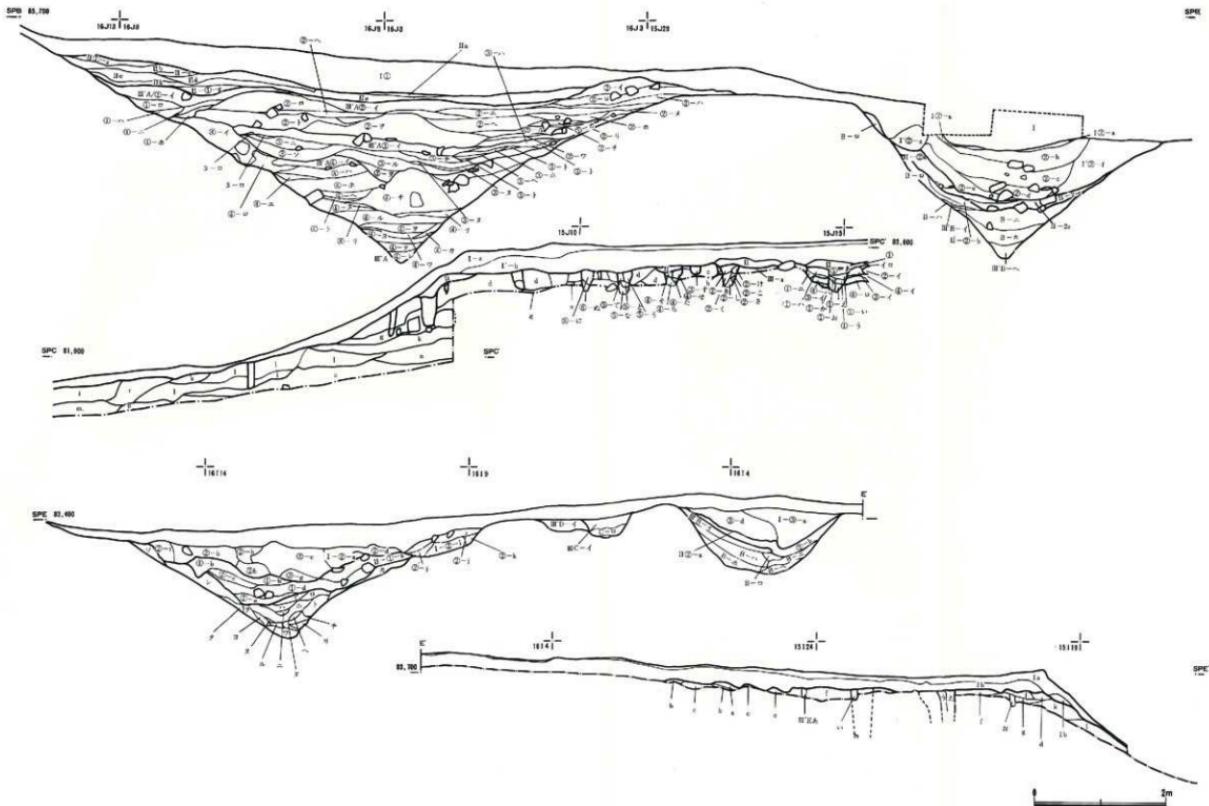
外側のBは巾2.5~4.7m、深さ1.1~2.2m。南東端は水松が生えている為掘り切っていないがほぼAと併走し、宮ノ沢に切り落されると思われる。両側は疊混りの粘土層である。中央附近がAと同様やや低い。又中央より半分は底巾10cmと断面が逆三角形であるが、東半は90cmと広くなり角の丸いU字状となる。

AとBの前後関係については層序の項でも述べたが確実に断定し得るものはない。

(4) 柱列（第7図）

空塙Aの調査区北東端、塙の最も深い部分の両側方に對をなし8個の柱穴が検出された。東側北端の柱間がやや短いが西側の柱間からは194cm、6尺4寸等間が求められ、又東西に塙をわたす距離は424cm、14尺である。柱穴の深さは70~100cm。柱穴掘り方の上場は50×60cm前後、柱痕跡の上場は15×20cm前後で、ほぼ垂直である。尚中央の調査で確認しなければならないが、西斜面北端の状況からはこの8個一組で完結するものようである。又、この柱穴列の東西が若干平坦に削られており、特にその東側は溝状の浅い凹みになっている。

やや軟質の岩盤とはいえ、こうした大きく深い掘り方を持ち太い柱を立てる遺構は何であろうか。西は5m余の高さの急斜面が迫り、第二平坦面と連続させるにはそれだけの高さを必要とする。又垂直にたてた時の第二平坦面端部との水平距離は8m余であり、そこに柱列の断続はない（只、塙



第6図 空塙跡・同北平坦部土層図

表3 16J13、8、3、15J23北壁土層観察表①

層序	小区分	面別	色調		組成	備考
			JTS notation	土色名		
I	②	s	10YR 8/6, N, N	明黄褐	砂礫が多量に含まれる	
		b	7.5Y 8/6, N, N	浅黃褐	砂礫が少なくて粒性強い	
		c	10YR 8/6, N, N	明黄褐	1.5mに砂礫が非常に多くあらわす	
		d	10YR 8/6, N, N	明黄褐	多少砂礫が含まれる	sに類似する
		e	10YR 8/6, N, N, N	にじみ黄褐	砂礫が少なく、粘土性が主体	sに類似する
		f	10YR 8/6, N, N	明黄褐		
II	③	s	10YR 8/6, N, N	にじみ黄褐	黄色砂粒を含むホッポリ	
		b	*	*	1.5mより粒性つぶく砂礫も少ない	
		c	*	*	1.5mより粒性がなくしまっていいる	
		d	*	*	砂粒の混入がほとんどなく、粒性強い	
		e	*	*		sに類似する
		f	*	*		bに類似する
		g	*	*		dに類似する
		h	10YR 8/6, N	灰黄褐	氧化物を若干含む	
		i	*	*	よりさらに粘性を帯びやすくなる	
III	④	イ	*	*	より黄化物が多い	ソフト
		ロ	*	*		
		ハ	*	*		日干しに類似する
		ニ	*	*		イに類似する
		ホ	*	*		
		ヘ	*	*	砂粒が主体でザラつく	
		ト	*	*	暗褐色土が多く含まれる	ソフト
		チ	*	*		
		リ	*	*		
		タ	*	*		
IV-A	⑤	イ	10YR 8/6, N, N	明黄褐	粘性を帯びてしまっている	
		ロ	*	*	黄色砂粒、礫等が多く含まれる	
		ハ	*	*	砂粒が含まれて粒性強い	ソフト
		ニ	*	*	砂粒が多い	ロに類似する
		ホ	*	*		イに類似する
		ヘ	*	*		
		ト	*	*	より粒性が少なく、粘性強い	ロに類似する
		チ	*	*	約1.5mより砂粒土が多い	ハに類似する
		リ	*	*	黄色砂粒が多い	ソフト
		タ	*	*	より粒性が多い	ロに類似する
IV-B	⑥	イ	*	*	砂粒、砂粒が主体になるかしまっている	
		ロ	10YR 8/6, N, N	灰黄褐	暗褐色土が若干混入し、やや粒性あり	
		ハ	*	*	よりさらに粘性あり	ロ
		ニ	*	*	小粒が多量に含まれる	明るい
		ホ	*	*	小粒より砂粒が多しくしまっている	暗い
		ヘ	*	*	砂粒が多量に含まれる	
		ト	*	*	より砂粒が多い	
		チ	*	*	細い砂粒が混入	ロに類似する
		リ	*	*		イに類似する
		タ	*	*		ヘに類似する
V	⑦	イ	*	*	砂粒、砂粒が主体になるかしまっている	
		ロ	10YR 8/6, N, N	にじみ黄褐	暗褐色土が若干混入し、やや粒性あり	
		ハ	*	*	よりさらに粘性あり	
		ニ	*	*	小粒が多量に含まれる	
		ホ	*	*	小粒より砂粒が多しくしまっている	
		ヘ	*	*	砂粒が多量に含まれる	
		ト	*	*	砂粒が多量に含まれる	
		チ	*	*	砂粒が多い	ロに類似する
		リ	*	*		ハに類似する
		タ	*	*		トに類似する
VI	⑧	イ	*	*	砂粒のみでしまっている	
		ロ	*	*		
		ハ	*	*		
		ニ	*	*		
		ホ	*	*		
VII	⑨	イ	*	*	砂粒のみでしまっている	
		ロ	*	*		
		ハ	*	*		
		ニ	*	*		
		ホ	*	*		
VIII	⑩	イ	*	*	砂粒のみでしまっている	
		ロ	10YR 8/6, N, N, N	黑褐色土	砂粒のみでしまっている	ヘに類似する

表3 16J13、8、3、15J23北壁土層観察表②

番号		色調		組成	備考
基本番号	小区分	細別	JIS notation	土色名	
Ⅲ	イ	オ	10YR 5/6, N, %	明黄色土	砂糖多く有り且特徴的でしまっている
		ロ	10YR 5/6, N	黄褐色土	砂糖が少く有り且特徴的
		ハ	10YR 5/6, N, %	にふい黄褐色土	細い砂糖と粘土粒の混合でしまっている
		ニ	10YR 5/6, N	褐色土	砂糖粘土性が多い
		ホ	*	*	より粘性強度でしまっている。若干灰化色混入
		ヘ	10YR 5/6, N, %	にふい黄褐色土	より粘性強度でしまっている。若干灰化色混入
		ト	*	*	へより粘性強度でしまっている。

表4 16I14~15I19北壁土層観察表①

番号		色調		組成	備考	
基本番号	小区分	細別	JIS notation	土色名		
Ⅰ	①	a	10YR 5/6	場	黑色地帯(暗)ルーム着脱、灰化物混入なし	堅密
		b	10YR 5/6, 10YR 5/6, T, 7.5YR 5/6,	場、暗赤場、暗場	赤色帶90%	
		c	10YR 5/6, N	暗赤	3cm以下の基盤帶 灰化物	堅密
		d	10YR 5/6	場	2cm以下の基盤帶 4%	
		e	10YR 5/6	*	3cmの基盤帶10%	
		f	10YR 5/6, 7.5YR 5/6	*	基盤帶混入 *	堅密
		g	10YR 5/6, N, %	*	* ルート	
		h	10YR 5/6	場	2cm以下基盤帶混入	堅密
		i	7.5YR 5/6	*	1cm以下 *	
		j	7.5YR 5/6	*	基盤帶混入 シルト	
Ⅱ	②	k	7.5YR 5/6	場	2cm以下基盤帶、灰化物混入	
		l	10YR 5/6	*	シルト 2cm、下基盤帶混入、シルト	
		m	10YR 5/6	*	5cm以下基盤帶	
		n	7.5YR 5/6, N	場	7cm 基盤帶 40%	
		o	7.5YR 5/6, N	場、暗場	粘土質	堅密
Ⅲ	①	p	10YR 5/6	場	シルト	
		q	10YR 5/6, N	場、暗場	ローム基盤粒 混入	
		r	10YR 5/6, N, %	場、暗	ローム基盤粒	堅密
		s	10YR 5/6	場	大山灰質灰化物混入 シルト	
		t	10YR 5/6	場	大山灰、灰化物混入	ソフト
	②	u	10YR 5/6	場	灰化物含有、粘性強、シルト	
		v	7.5YR 5/6, 10YR 5/6	場、暗場	灰化物基盤含有、粘性強、シルト	
		w	7.5YR 5/6, N	場	灰化物含有、粘性強、シルト	
		x	7.5YR 5/6, 10YR 5/6	場	0.5 ~ 2cm基盤含有 5%	
		y	7.5YR 5/6	暗場	2cm以下基盤帶 20%灰化物含有	
Ⅳ	③	z	7.5YR 5/6	場	40%弱以上基盤帶灰化物、大山灰含有シルト	
		a	7.5YR 5/6	場	基盤帶混入	やや堅
		b	7.5YR 5/6	場	黄緑色地帯(暗)80%	相
		c	7.5YR 5/6	場	黄緑色地帯(暗)80% ロームブロック混入	堅密
		d	7.5YR 5/6	場	基盤帶灰化物混入	
		e	7.5YR 5/6	場	基盤帶灰化物混入	かたい
		f	7.5YR 5/6	場	基盤帶灰化物混入	やや相
		g	7.5YR 5/6	場	基盤帶灰化物混入	
		h	7.5YR 5/6	場	基盤帶灰化物混入	
		i	5 YR 5/6	全場	基盤帶灰化物混入	
Ⅴ-A	④	j	10YR 5/6	場	基盤帶、灰化物含有	相
		k	7.5YR 5/6	*	*	
		l	7.5YR 5/6~N	にふい黄場、場	沙層	
		m	*	*	砂層	
		n	7.5YR 5/6	明場	砂層 1~1.5m	
		o	7.5YR 5/6, N	場	1cm以下基盤帶灰化物混入	相
		p	7.5YR 5/6, N	場	*	
		q	7.5YR 5/6, 10YR 5/6	*	1~1.5cm以下基盤帶灰化物混入	相
		r	7.5YR 5/6	明場	2cm以下基盤帶灰化物混入	相
		s	7.5YR 5/6, N	*	1~1.5cm基盤帶灰化物混入	相
Ⅴ-B	⑤	t	10YR 5/6	場	基盤帶灰化物混入	相
		u	7.5YR 5/6, N	場	3~4cm以下基盤帶混入	相
		v	7.5YR 5/6, N	*	5~6cm	かたい
		w	10YR 5/6	*	8~10cm以下基盤帶混入 基盤灰	相
		x	10YR 5/6	*	*	
Ⅴ-C	⑥	y	7.5YR 5/6	場	8~10cm以下基盤帶灰化物混入	相
		z	7.5YR 5/6	*	*	
		ア	7.5YR 5/6	場	基盤帶灰化物混入	相
		イ	7.5YR 5/6, N	*	10~12cm以下基盤帶灰化物混入	相
		ウ	7.5YR 5/6	*	*	

表4 16114~15119北壁土層観察表(2)

基本層序	小区分	層別	色		測定	備考
			J L S notation	土色名		
III-B	イ	7.5YR 8/8	明緑	明緑	シルト	より明るい 緑
	ロ	7.5YR 8/8~8/6	緑、暗緑	シルト	より明るい 緑	より明るい 緑
	ハ	7.5YR 8/6	明緑	田舎灰シルト	田舎灰シルト	より明るい 緑
	ニ	7.5YR 8/6	*	炭化物 基盤層 2cm以下混入	炭化物混入シルト	より明るい 緑
	ホ	7.5YR 8/6	*	炭化物混入シルト	炭化物混入シルト	より明るい 緑
	ヘ	7.5YR 8/6	*	炭化物混入シルト	炭化物混入シルト	より明るい 緑
III-C	イ	*	*	基盤部灰入層付近	基盤	より明るい 緑
	ロ	7.5YR 8/6~8/4	緑、暗緑	シルト	よりややソフ	基盤
IV-A	イ	8YR 8/8	緑	3cm以上基盤層出入	基盤	より明るい 緑
	ア	7.5YR 8/8	緑	シルト	よりやや暗い	よりやや暗い
	リ	7.5YR 8/6	*	シルト	よりやや暗い	よりやや暗い
	ウ	7.5YR 8/6	*	基盤層、炭化物混入	ソフ	よりやや暗い
	エ	7.5YR 8/6	に近い場所	炭化物混入	ソフ	よりやや暗い
	オ	7.5YR 8/6	緑	炭化物混入	ソフ	よりやや暗い

列の内側の追求を行っていないことは先述した。第二平坦面と連続させると第一平坦面とは連続出来ず、又その逆でもあると思われる。前後の平坦面から独立した施設の可能性が高いようである。現時点ではこれ以上の推測は困難であり、壇北半及び中央部分の調査結果を併せて検討することとした。

空塙Bの西側で塙に沿って小柱穴列が検出された。中央付近をはじめ所々間隔がある。中央南の土塙(墓)群付近は重複のため検出できなかったのかも知れない。又北端にいくに従い空塙Bから離れるようである。土塙との接近(重複?)は形成時期差を示すとも推される。空塙Bとの位置関係にも同様の事が言えよう。これらについても又、塙の中央及び北半の調査の結果を併せ検討することとした。

尚、土塙(墓)群西のピット群は必ずしも柱穴とは確認できなかったものである。

(5) 出土遺物 (P.L. 14~19)

陶磁器、鉄・銅製品、木製品、石製品他が出土した。

前項で述べたがこの空塙跡出土遺物の殆んどは第二平坦面からの流入であり本来第二平坦面の遺構を検討する資料となるものと思われる。

a 陶磁器

青磁、白磁、染付、赤絵、瀬戸・美濃灰、鉄釉、唐津、越前、珠洲系等の碗、皿、壺、盤、擂鉢、壺、壺類が出土する。他に擦文土器類6片と縄文時代の遺物がある。

青磁：無文端反り碗、盤、線描き進弁碗、稜花皿等がある。

白磁：丸碗、端反り皿、輪花皿、小壺等がある。

端反り陶質の皿に漆で接いだものがある。又P.L. 14~65は器体が厚く高台以下無釉となるものである。

染付：口縁端反りの碗、蓮子型碗、端反り皿、甚簡底丸皿、小壺がある。碗には28、32等の高台の大きなものも見られる。又端反り皿に梵字文を描く例がある。

瀬戸・美濃：灰釉は無文と劍先進弁の碗、端反り、丸皿、盤等がある。端反り皿は中型のものも出土する。又胴部以下無釉となる皿がある。皿の内外面が火熱を受け、見込に溶融物の付着するものがある。他への転用であろうか。^{註1}

鉄釉は碗と皿である。碗は口縁部が僅かに括れる輪高台で高台脇の削り口の狭い類が多い。他に一段括れ内反りの高台を持つと推されるもの(15~47)、全体に低平な碗などがある。50の高台脇の削りは殆んど巾を持たない。皿は輪高台で腰部以下露胎の腰折皿の同一個体4片である。

擂鉢：越前、瀬戸・美濃(15~54)がある。甕・壺類は越前系、珠洲系(19~24)である。19~18は内面櫛歯整形波の残る偏前系の袋物かと推される。

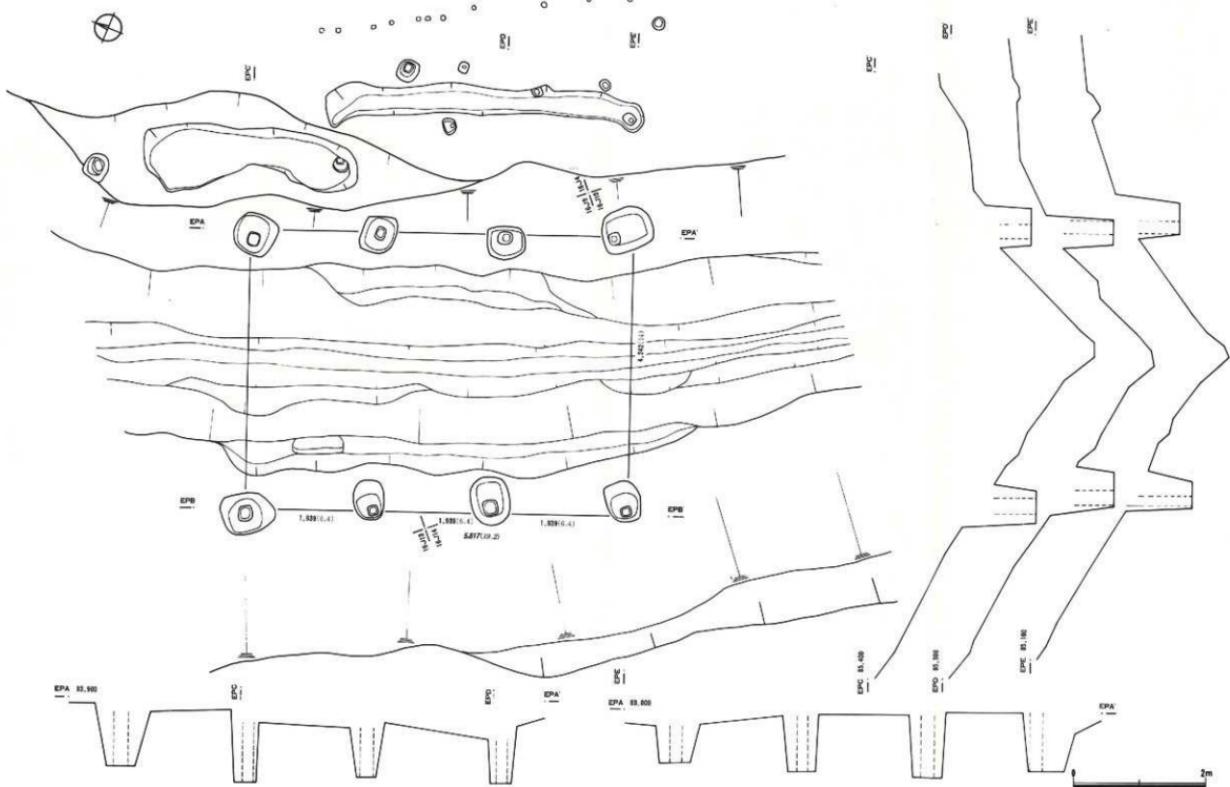
b 金属製品

鉄・銅製品がある。(P.L. 16, 19)

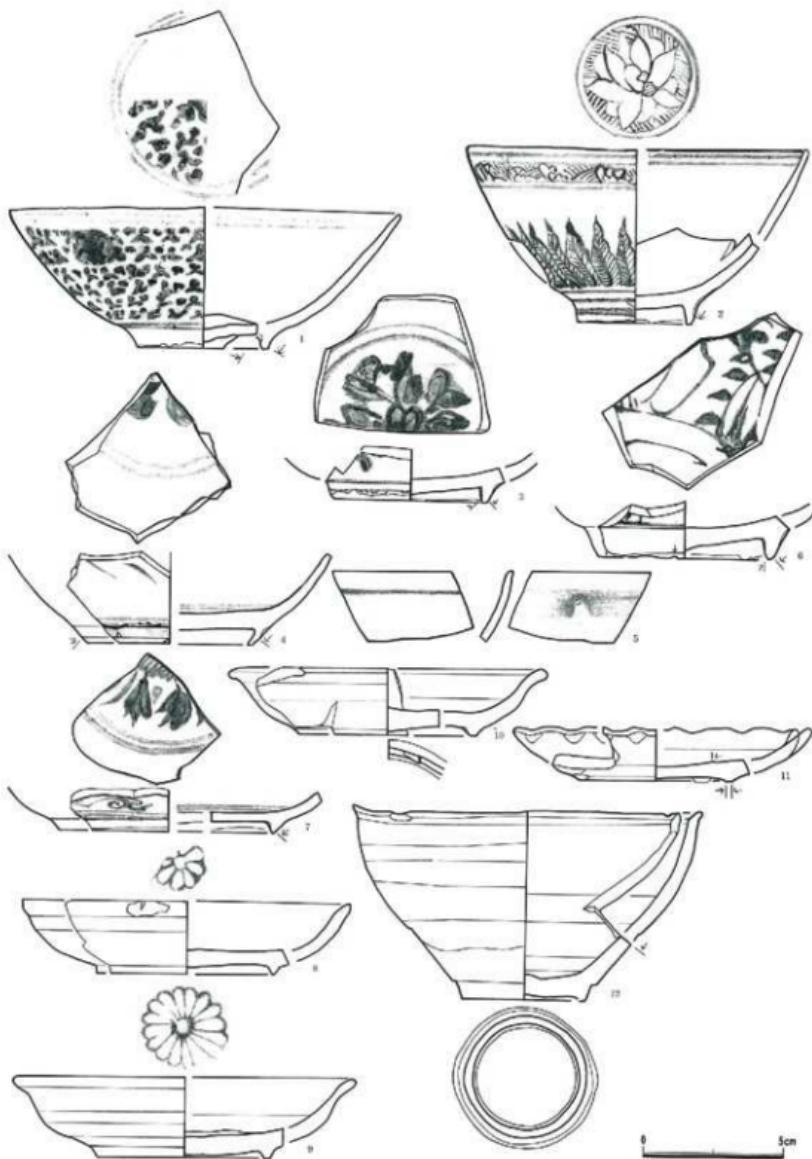
鉄製品：鉄鍋、釘、小札、茶釜等である。鉄鍋は2及び3穴の吊耳のものがある。内耳については不明である。52は柱穴列東溝状の凹みから出土した。一端が角で敲いた形跡があり他端は偏平に尖るようである。タガネのようなものか。49は扇形、断面三角形で形状は矛に似る。刃部にあたる部分は、衝撃により凹凸を呈す。他端に欠失の形跡はなく若干の凹みと肥厚を呈するが、柄を装着するようにはなっていない。56は底面が直角に近

表5 15J5、10、15南壁土層観察表

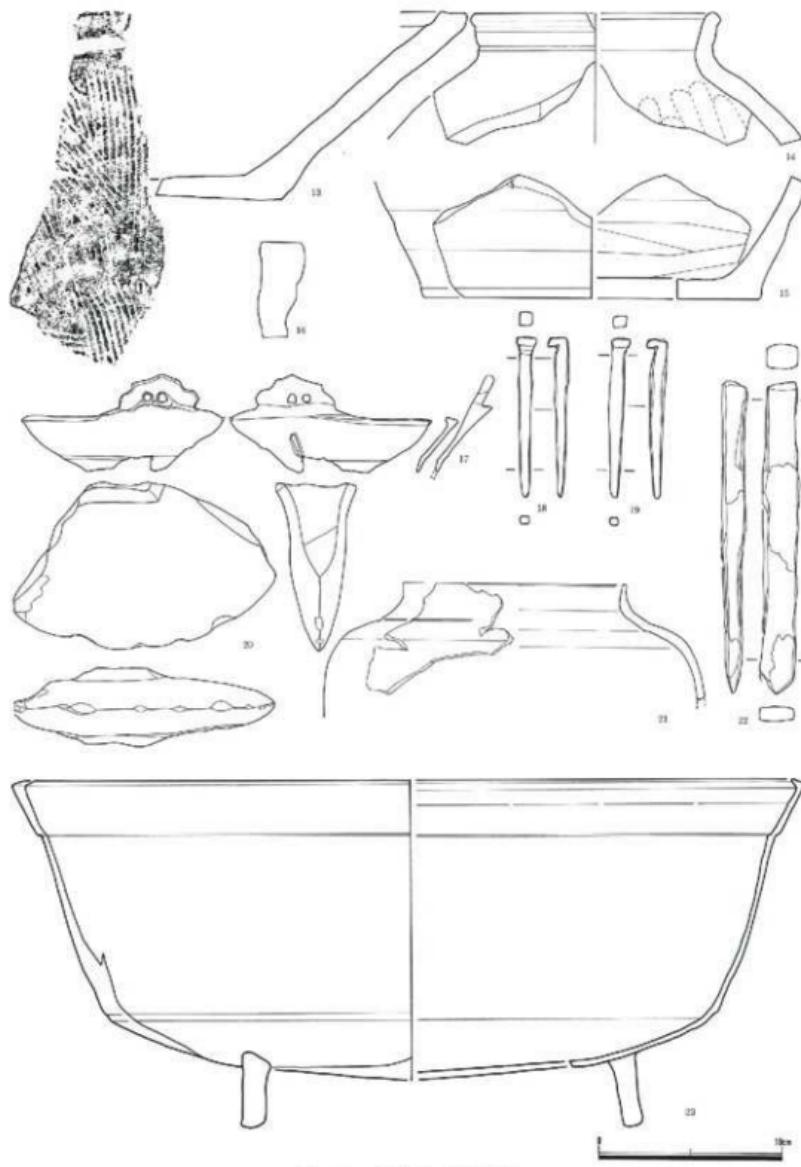
番 序	色 調	調 色 名	組 成	備 考		
基本番号	小区分	細 別	JIS notation			
I		a	7.5Y R 5% ~ N	褐	シルト 基盤粘土質有	腐殖質土、ソフト かたくじまる
		b	7.5Y R 5%	*	大山砂質混入	
II		a	7.5Y R 5%, 10Y R 5%, N	褐、に赤い黄褐	基盤地・粒、炭化物混入	重かたくじまる
		b	10Y R 5%	赤	基盤地・泥、粘土質混入、シルト	
		c	7.5Y R 5%, 10Y R 5%	褐、暗褐	基盤地・粒、炭化物混入シルト	重かたくじまる
		d	7.5Y R 5%, N, 10Y R 5%, N	褐	基盤地・粒、炭化物混入	かたくじまる
		e	7.5Y R 5%	*	基盤地・泥、粘土	かたくじまる
		f	10Y R 5%	*	基盤地・泥、粘土	粗粒
		g	10Y R 5%, N	褐色	基盤地大小多量混入粘土含有	
		h	10Y R 5%, N, %	明黄色	基盤地混入 粘土質多少含有	
		i	10Y R 5%, M, %	明褐色	小量少量混入 粘性	よりややソフト
		j	10Y R 5%, M, %	明褐色	小量少量混入 粘性	よりやや暗く(ソフト)
		k	10Y R 5%, M, %	明褐色	小量少量混入 粘性強	
		l	10Y R 5%, M, %	明褐色	粘性	しまる
		m	10Y R 5%, N, %	明黄色	基盤地多量混入	
		n	10Y R 5%, N, %	に赤い黄褐色	粘土 ブロック多量含有	より若干明るい
		o	10Y R 5%, M, %	*	基盤地表面	しまる
		p	10Y R 5%, N	黄褐色土		
III A	①	イ	10Y R 5%	褐	5mm以下基盤地土含有	柔、かない第3号砂充満土
		ロ	7.5Y R 5% ~ 10Y R 5%	暗褐、黒褐	シルト	
		ハ	10Y R 5%	暗褐	基盤地・泥、粘土質混入 シルト	
		ニ	7.5Y R 5%	*	地盤粒多量混入 シルト	より軽い
III B	②	イ	7.5Y R 5%, 10Y R 5%	黒褐	2~3mm黄色基盤地2mm以下粘土含有	より暗い
	③	ロ	10Y R 5% ~ N	黑、黒褐	炭化鉄混集、シルト	
	④	イ	7.5Y R 5%	黒褐	3mm以下基盤地、地盤鉄質化物含有	
	ロ	7.5Y R 5%	*	*	より重い	
	ハ	2.5 Y R 5%	暗褐色	地盤粒多量混入		
III C	①	ア	7.5Y R 5%	暗褐	砂粒、粘土粒、炭化物含有	重
		イ	7.5Y R 5%	黑褐	炭化物、粘土粒含有	やや重
		ウ	7.5Y R 5%	暗褐色	砂粒、炭化物含有	かたい
		エ	7.5Y R 5% ~ N	暗褐	地盤粒、炭化物含有	
		フ	7.5Y R 5% ~ N	褐	砂粒、炭化物含有	
		カ	7.5Y R 5%	褐	砂粒、地盤粒、炭化物含有	
	②	ア	7.5Y R 5%	*	基盤地・紅色有、砂粒、シルト	かたい
		イ	7.5Y R 5%	*	基盤地・粒、粘土質混入、粘性シルト	重
		ロ	7.5Y R 5% ~ N	*	2~3mm暗褐混入、粘性 シルト	重
		ニ	7.5Y R 5%	*	4mm暗褐地盤地質混入 シルト	
		キ	10Y R 5%	*	基盤地質、砂粒炭化物混入シルト	
		シ	10Y R 5% ~ M	*, 明褐	1~2mm暗褐、粘泥混入シルト	
	③	オ	7.5Y R 5%	褐	基盤地少量混入ソフティシルト	
	セ	セ	7.5Y R 5% ~ N	に赤い黄褐、褐	基盤地の侵入シルト	かない
	④	オ	7.5Y R 5%	*	シルト	
	タ	タ	10Y R 5% ~ N	暗褐	基盤地、炭化物混入 シルト	かたい
	チ	チ	7.5Y R 5%	褐	*	
	ツ	ツ	10Y R 5%	*	基盤地混入	かたくじまる
	テ	テ	10Y R 5%	*	シルト	
	ト	ト	7.5Y R 5%	*	シルト	
	ナ	ナ	7.5Y R 5%	*	暗、シルト	
	リ	リ	7.5Y R 5%	*	基盤地混入	かたい重
	ヌ	ヌ	7.5Y R 5%	*	基盤地少量混入、粘性シルト	
	リ	リ	7.5Y R 5% ~ N	*	基盤地少量混入、シルト	
	ヌ	ヌ	10Y R 5%	*	基盤地少量侵入、シルト	軽い重
	オ	オ	7.5Y R 5% ~ N	*		



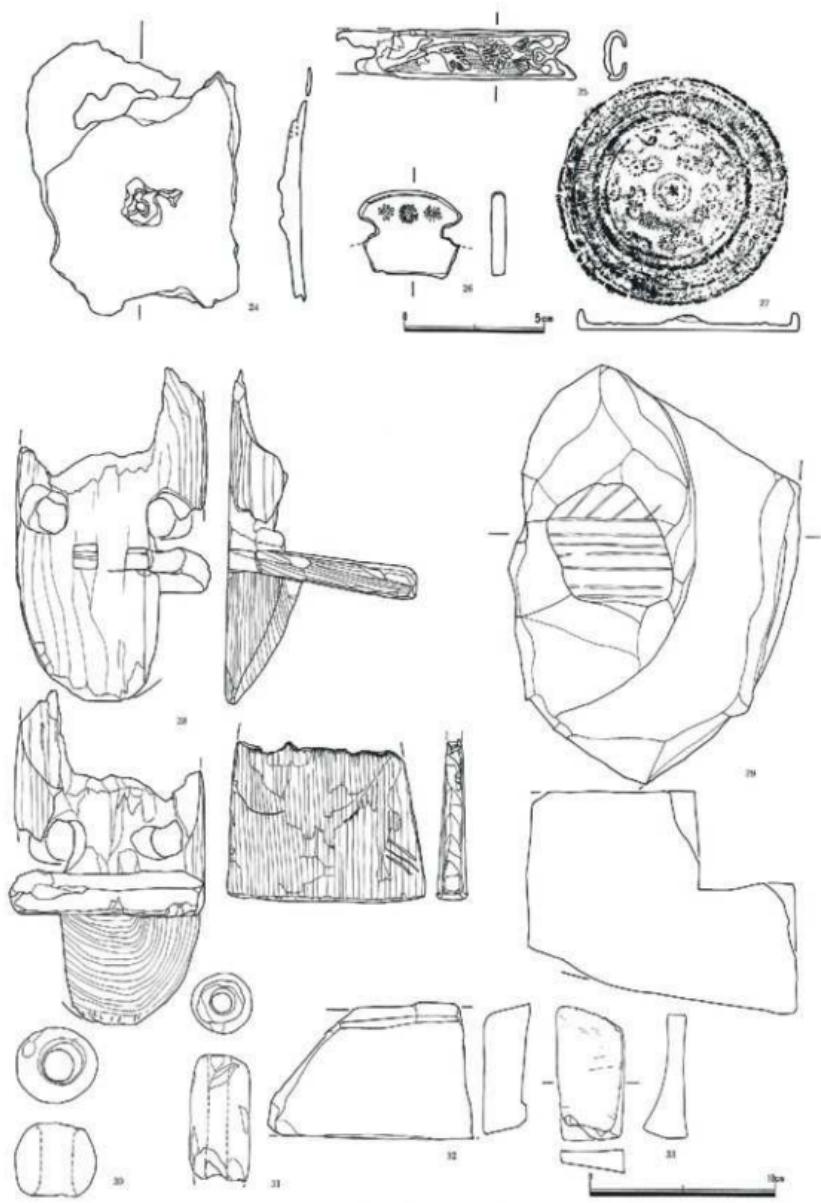
第7図 空塙跡柱列



第8図 空塙覆土出土遺物①



第9図 空塙覆土出土遺物②



第10図 空塚覆土出土遺物③

くつくられる大型の容器である。55、56は同一寸法の釘で未使用品かと思われる。一つの規格を示すものであろう。48は頭部が括れ、丸味を持って肩から下半にいたる。頸部に1条の微隆線がめぐる。茶釜かと推するが銹化の故か器体が薄く、下半の丸味も不足するようでもある。壺形の容器かも知れない。

鋼製品：鏡、甲冑金物等である（P.L. 19）。

36は径7.7cmの鏡で「菊花双雀鏡」と稱し得ようか。内区は钮座に珠紋帯を繞らせ、その上方に雀の「向鳥文」を配し、菊花を散らす。内区と外区は2mm弱の界線で隔られ、外帯には二重にやや斜行気味の梅瓣紋が廻り界線の内側には右下りの5個一単位の珠紋が8単位配される。18は八双金物で菊花が配され地は七子につくられる。29は厚さ5mm弱の儀に湾曲するもので一角に青い把手状のものが作られる。中央が盛り上がる。仏具の一種であろうか。

c 木製品 下駄、折敷、箸、柾状のもの、木の皮、柱楕などが出土した。（P.L. 16）

2~7は箸の欠損品である。全体に面取りをし両端を更に細く削り出す。8~14は偏平な板（柾）状の木片である。厚さ2~3mm。11は特に薄く1mm程である。15は折敷の底板。四隅を切り落し四辺中央に2個の穴があけられる厚さ1mm弱。20は木の表皮を切断したものである。杉の植樹されていない勝山館の時期ではヒバの皮と推される。17は長円形の台に銀杏齒二枚を差し入れた露卯下駄で（高）足駄ともされる。欠損品の為、全長、前壺等は不明である。鼻緒の孔は内傾する。18はそれに詰めた木製のクサビである。太い方の木口は平坦になる。19は空塙に跨がる柱列の南西隅から出土した柱底の残欠である。13cm程の巾を残しておらずこれがこれを上回る角柱であったと推されよう。

d 石製品他（P.L. 16）

66は石臼（下臼）の半欠品である。凝灰岩質の軟らかみの石でつくられ受皿がつく。台底面は荒いノミ跡が残り削り上げられている。目は不明。欠損品ではあるが、白の径は220mm前後と推される。P.L. 20-1は鰐又海獸骨を素材にした骨角器である。基部を失する。基部は横長の多面体、中央偏円形、先端部偏平の断面形で中軸線上に刺突部が作られる。縦線は明らかでない。ヤス等の刺突

具であろう。

58、59は鉄津である。碗形鐵治岸であろう。他に砂粒等を多く含む陶製羽口、陶錐等が出土している。

陶磁器は、茶入以外の殆どどの器種があり製品も同様であることは概略周辺と変りがない。又その年代も15世紀末~16世紀末の間のものが大部分である。

鉄製品のうち鍋類は破片が多く全体を推することが困難であるが、保存処理後に接合作業を進め再検討する予定である。

鏡は室町期前半に位置付けられるものであろう。かつて館内から八棱鏡の破片が表揚されているが本品は既出土の7面の中では幾分古いものであろう。

今迄数点の下駄が出土しているが露卯の（高）足駄ともされる本例ははじめての出土である。

受皿の付く石臼は茶臼とされるが、既出土の八分角安山岩のものが径180mm前後でつくりも丁寧であるのに比べると粗雑の感が強い。（松崎）

註）「るつば」としての使用も想定される。

(6) 土葬墓（第11図）

16 I 9区空塙Aと空塙Bの中間の平坦部にある。調査はN60°Eを基準として4分法によることにした。その結果和釘、及び木棺の一部である木片・骨等が出土され、骨は加熱されていないので土葬墓である事が判明した。セクションS P A-A'によると南西及び北東の両側の柱穴が当土葬墓を切っており、柱穴の方が新しい事が判明した。また覆土12は木棺を納める際の微小基盤壁を主体とした整地塗層である。10はシルト層。それより上部の層は10Y R %~%のシルト+基盤壁+ロームブロックの混層であり再堆積の状況を呈していた。尚覆土をサンプリングしフローテーションも行なった。

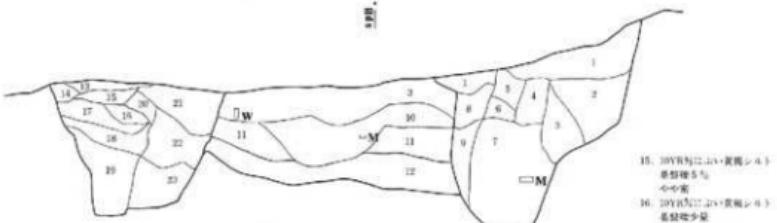
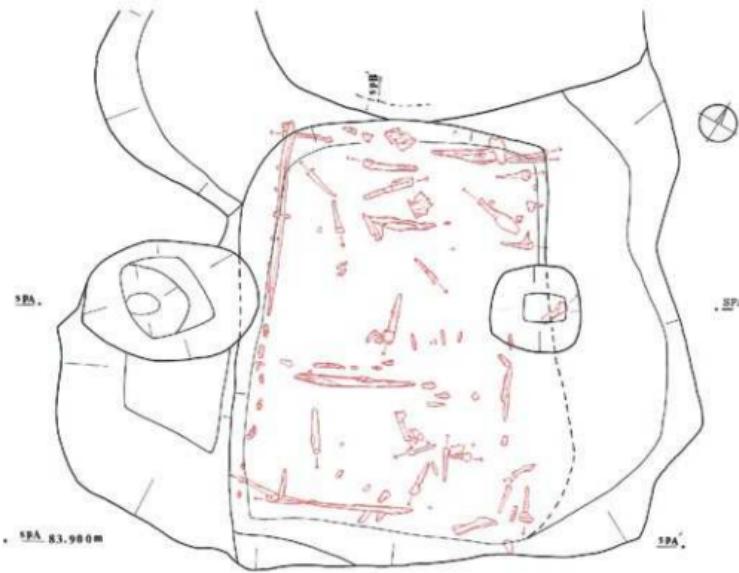
出土遺物

和釘、銅製品、陶磁器、骨が出土した。

和釘（第13図1~第18図29）

いずれも棺材の附着しているものであり特に南西側、南側では木質の残存状況が良く横板の一部が残在していた。折釘、切釘、さっぱ釘の3種類が使用されていた。

折釘（第13図1~19、第14図20~31、第15図32~42、第16図43）



1. IOYR時に古い實施シート
IOYR時に古い實施シートヨリアラウ
基盤地15%
砂・砂質
2. IOYR時に古い實施シート
基盤地10%やや粗
3. IOYR時に古い實施シート
基盤地10%
2よりやや細る。

4. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中10%
基盤地: 廃少35%
3よりやや粗
5. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中10%
6. 基盤地: 大粒径 2cm
7. IOYR時に古い實施シート
やや粗

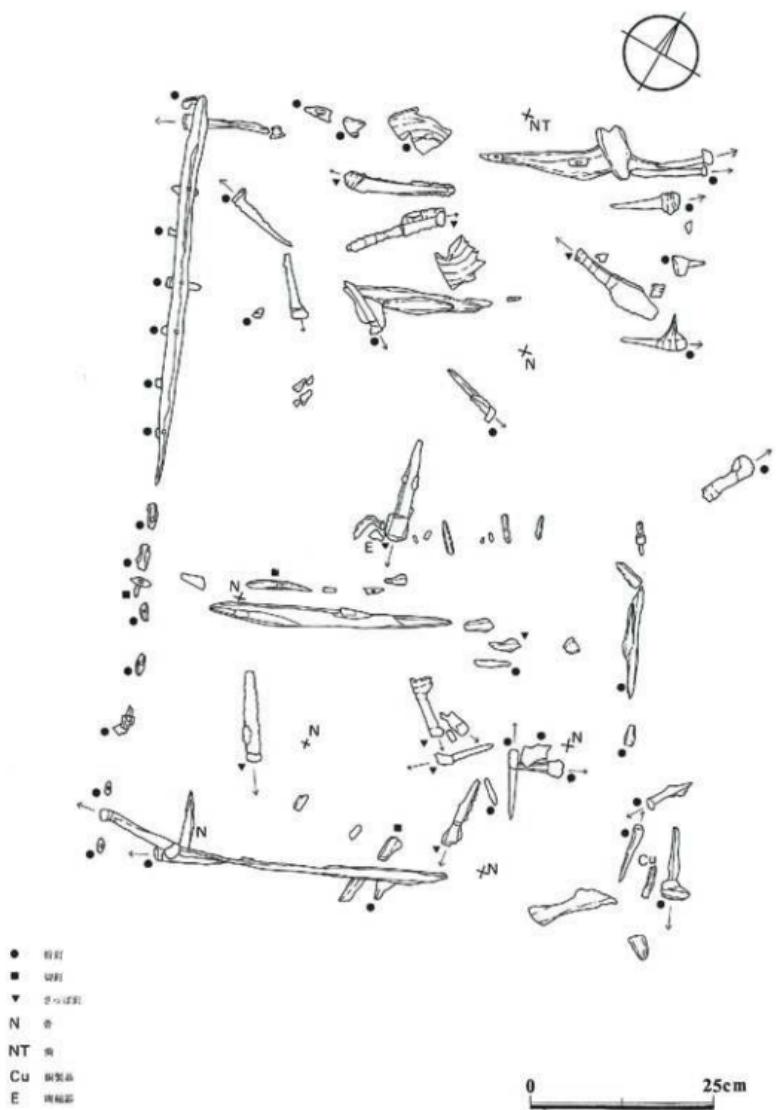
8. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 廃少35%
やや粗
9. 3より若干粗
10. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中10%やや粗
3に比し粗が大きい。

11. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中10%
やや粗
12. 積地層
基盤地: 中
13. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中10%やや粗
3に比し粗が大きい。
35%
14. 基盤地層
基盤地: 中
15. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中10%
やや粗
16. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中
17. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中
18. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中
19. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中
20. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中
21. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中
22. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中
23. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中
24. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中
25. IOYR時に古い實施シート
基盤地: 中

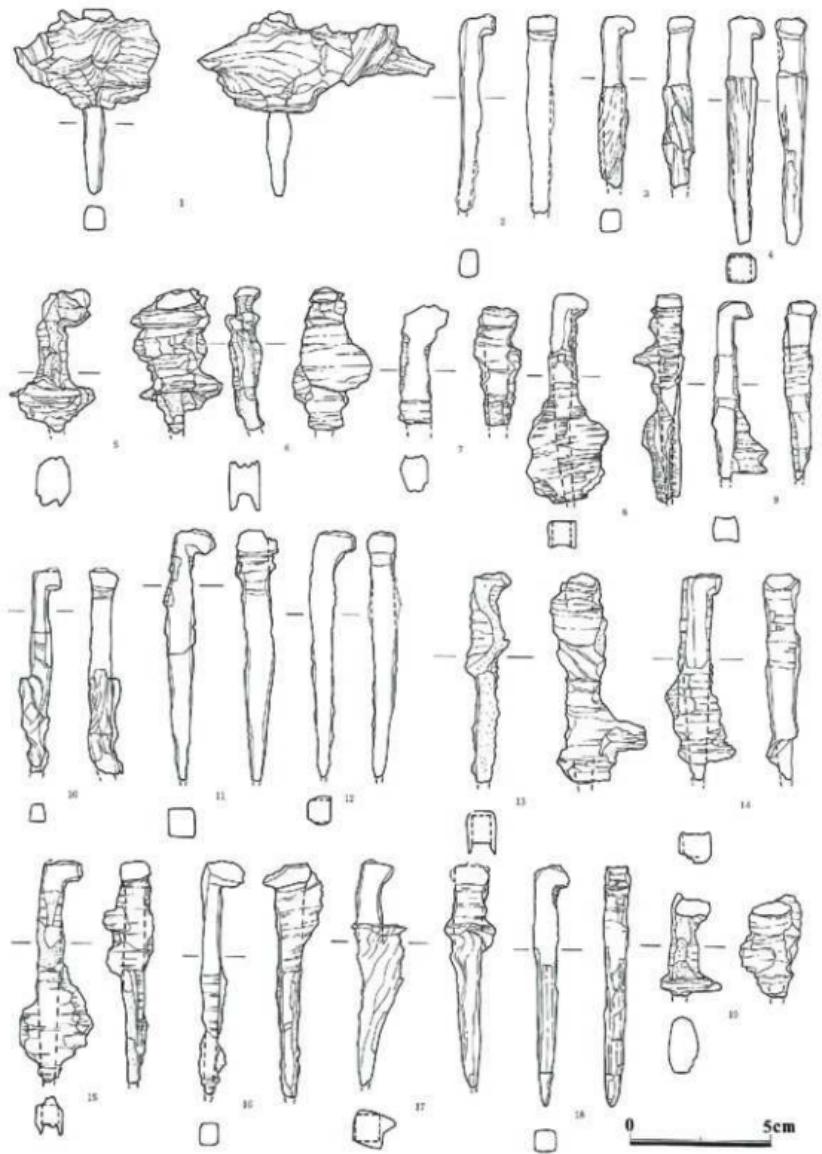
SPA 83.980m



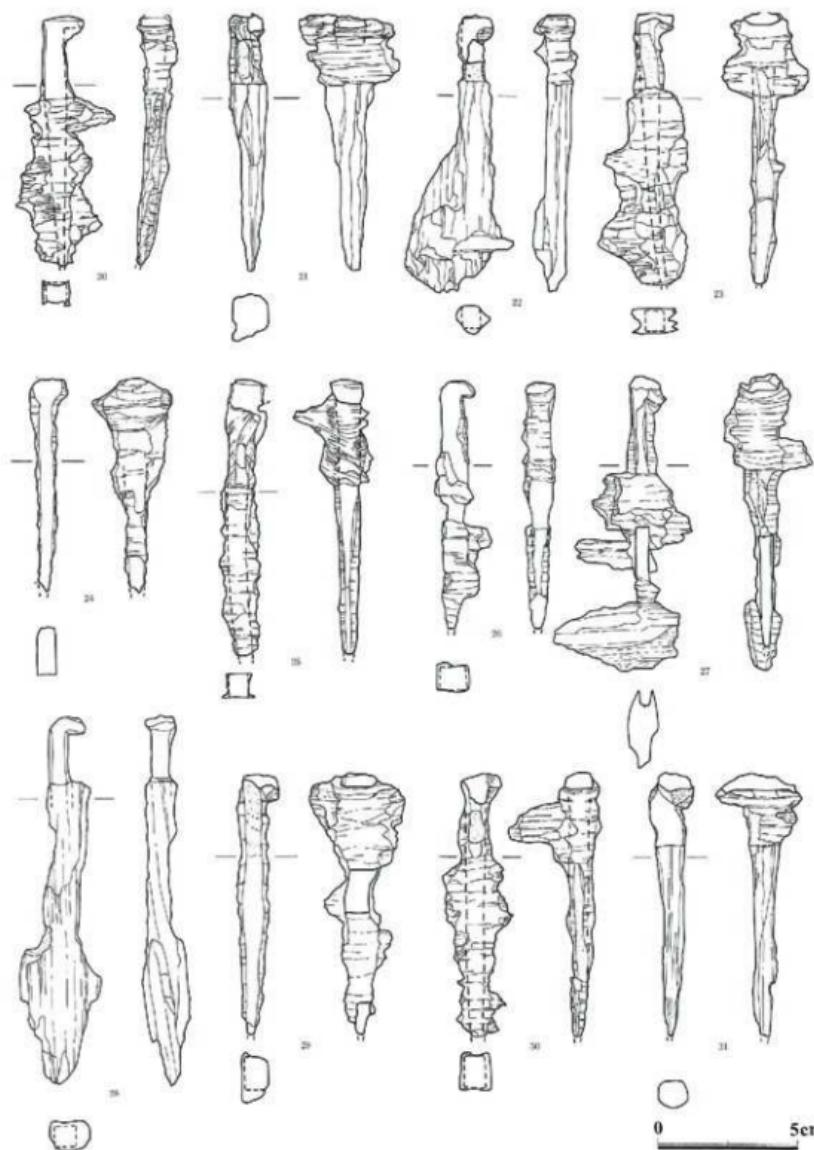
第11図 土塙墓（平面図、セクション図）



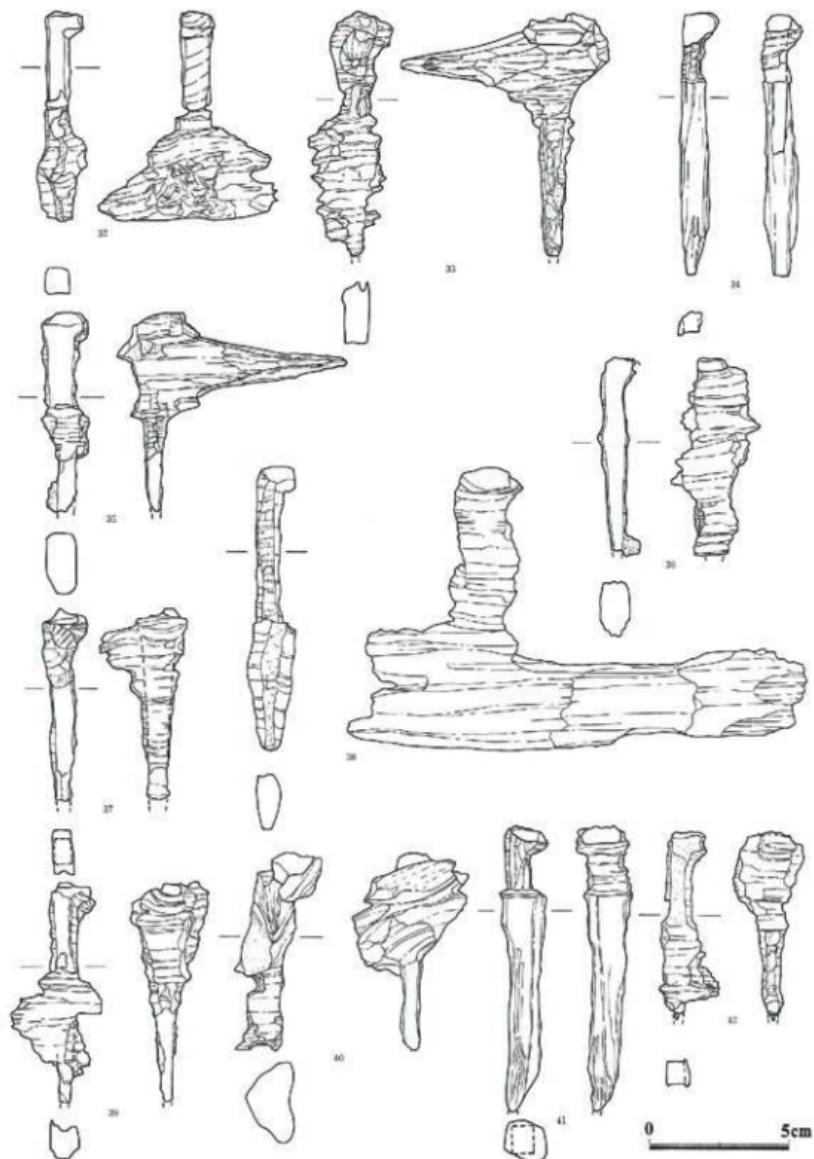
第12図 土塙墓遺物分布状況（釘・その他）



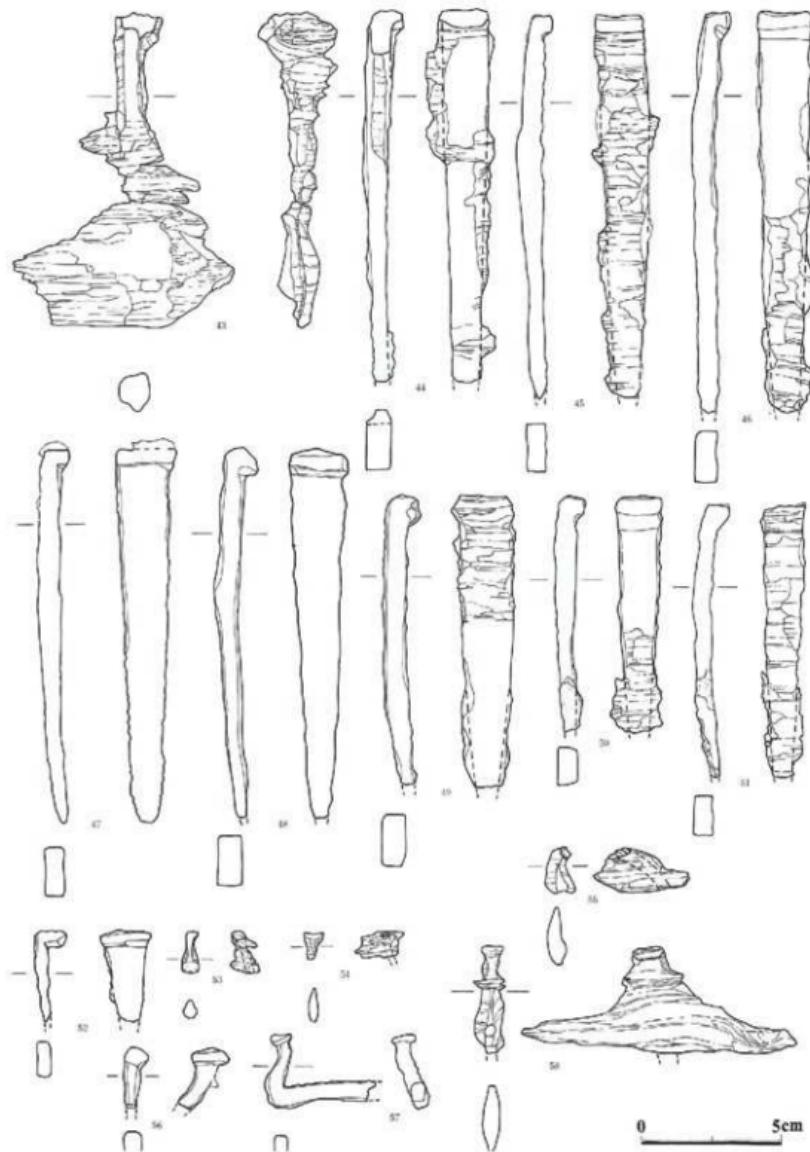
第13図 土塙墓出土遺物（釘）



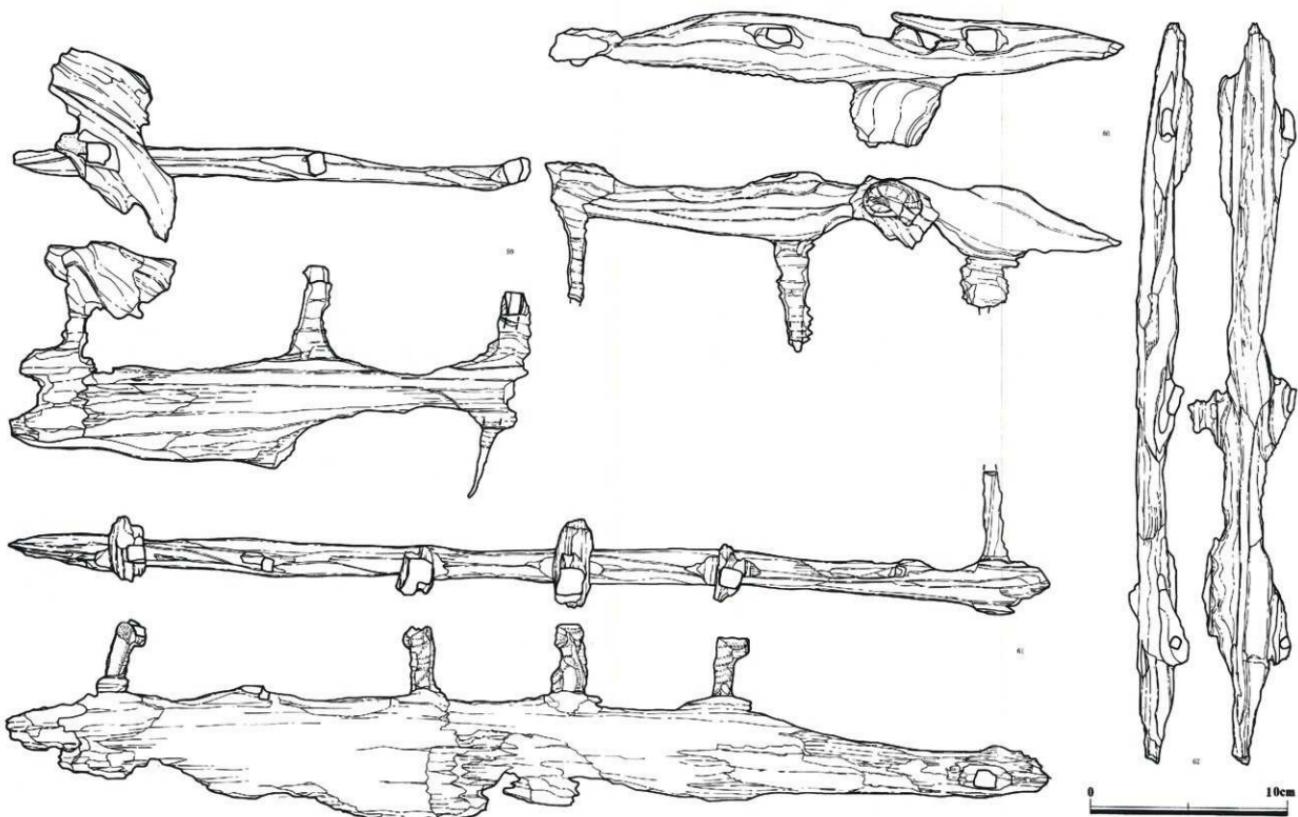
第14図 土塙墓出土遺物（釘）



第15図 土塙墓出土遺物（釘）



第16図 土塙墓出土遺物（釘）



第17圖 土坡墓出土遺物（釘）

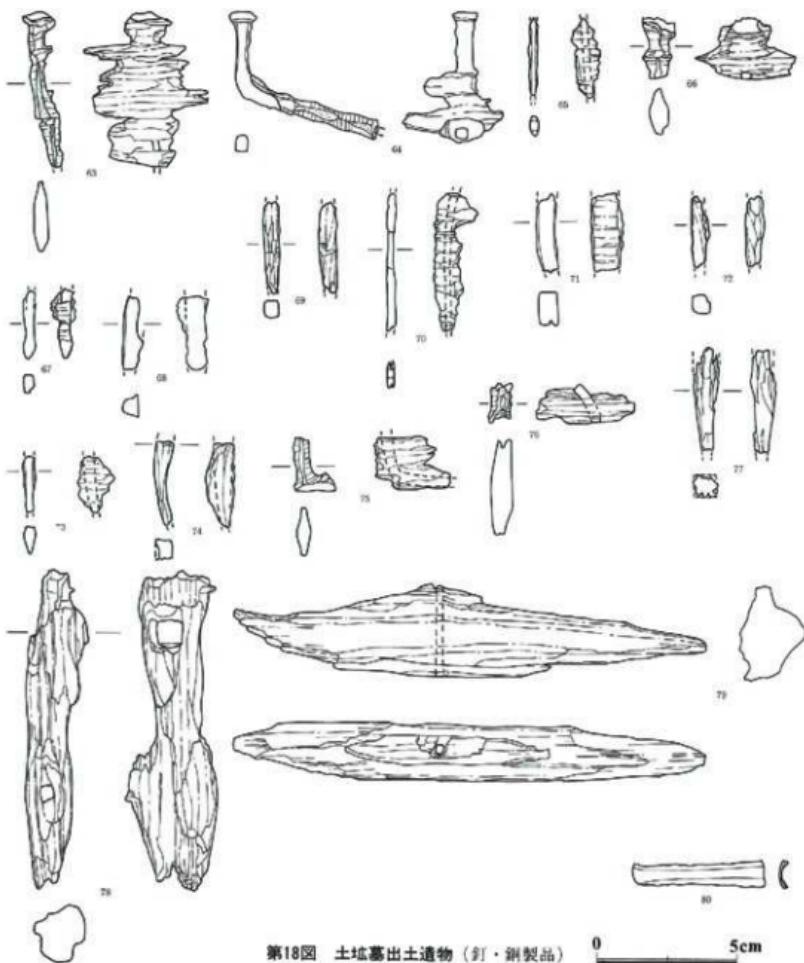
切釘の基部及び上部を折り曲げる事により頭部を作出するものであり、基部と同じ太さで頭の曲がった釘である。尚長さは脚部が欠損、基部は木質が附着しておりいずれも基部中央幅推定寸法、頭部寸法等を検討して推定長を出した。2寸5分（第13図1、6）3寸（第13図2～19、第14図20～31）、3寸5分（第15図37、38、41、第16図43）その他に寸法が3寸～3寸5分と考えられる第17図

59～62の棺材附着の折釘も含め計56本検出された。

さっぱ釘（第16図44～52）

基部の偏平な平釘の一種で頭部の曲がったものである。折釘よりも頭の折れが短く小さい。3寸5分（第16図50～52）、5寸（第16図44～49）の2種計9本が検出された。3寸5分では基部の幅が4分、5寸では6分程である。

切釘（第16図53～57、第18図64）



第18図 土塚墓出土遺物（釘・銅製品）

頭部つくり出しのない釘である。1寸（第16図53～55）、1寸5分（第16図56）、2寸5分（第16図57）八、3寸（第18図64）の4種計12本が検出された。尙第16図52は平折釘かさっぱ釘か不明である。その他は小破片の為種類は不明。

銅製品（第18図80）は用途・名称等は不明。その他美濃の碗か皿と思われるものが出土しているが小破片のため詳細は不明。さらに覆土及び最下部整地層のサンプリングをしフローテーションを行なった結果、覆土は総量53,425gに対し骨片1.4g、炭化物2.4g、鉄片6.8g、種子40g、釘細片13.5gが検出された。整地層は総量51,650gに対し木炭33g、種子20.9g、鉄片3.2g、木片1g検出された。

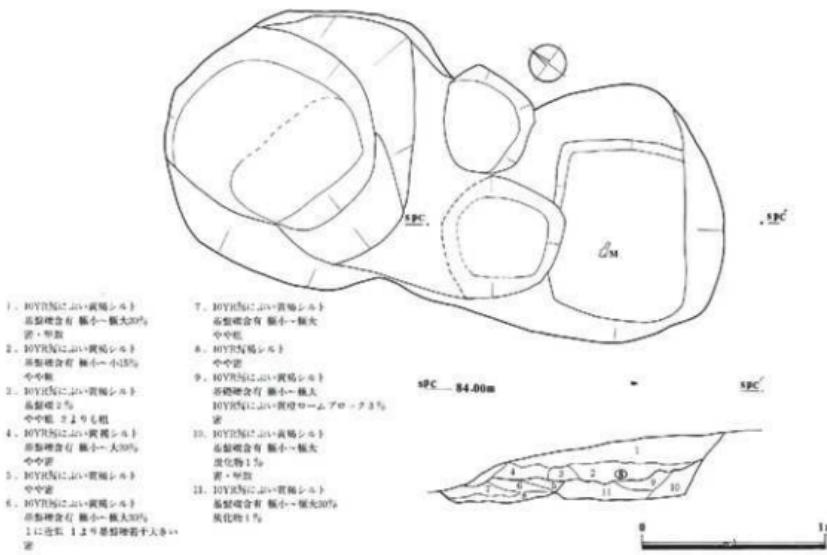
遺物の分布について（第12図）

全体に長方形の分布状況を呈しており、これが木棺の大きさとも考えられる。木棺は約100cm×80cm程である。和釘の分布状況をみると折釘は木棺の南西側長軸方向及び北西側、南東側短軸方向のそれぞれ外周部に分布する。特に南西側の52cm程の長さを有する木棺材（第17図61）では打ちつけられている折釘がすべて頭部が下になっている。つ

まり下から上へ打ちつけられている。尚その間隔は7cm程である。南西側の残りの折釘、北西側の折釘も同様に下から上へ打ちつけられている。また東側に若干分布する折釘は頭部が木棺の外側に向いており、棺内側へ向けて打ちつけられている。切釘、さっぱ釘は木棺の内部に散乱しているが、主に北西側と南東側にやや集中する傾向がある。骨は木棺内部に散乱している。歯は北西端、銅製品は南東端、陶磁器はほぼ中央部に位置する。

小結

調査の結果墓塗は110cm×90cmの隅丸方形を呈しN30°Wの方向に長軸をとる。深さはセクションによると33cm程であるが構造確認等のため削平されており、掘りこみ当時は50～60cm程の深さがあったと考えられる。木棺は上述のとおり100cm×80cm程で墓塗底底部の上に置かれたと考えられる。木棺材の厚さは残存の木棺材等より1.5cm程である。また釘の分布より折釘は木棺の底部外周、及び横部分の外周に打ちこまれたと考えられる。さっぱ釘、切釘は棺の上部外周に打ち込まれていたものが長い年月の間に木棺が土圧によりつぶされ、木片と



第19図 土 塚

ともに内部に散乱したと考えられる。これらより釘は種類により使う部位を変えていたと考えられる。また歯は北西隅にある事より頭位は北→北西方位と考えられる。

土塙（第19図）

16 I 9区にある。空塙Aと空塙Bの中間の平坦部に位置する。土葬墓より1.5m程北西にある。規模は長軸135cm×短軸推定110cm程度である。土塙中央部より和釘の出土が見られる事、下端に方形の浅い掘りこみを有し、セクション観察では底部がフラットになっている事等より墓と考えられるセクション観察によると西側に隣接するピットに切られている。覆土（図5～8）にはすべて炭化物が入り9にロームブロックが入る。尚下端の方形の掘りこみが塞塙と考えられ、その規模は100cm×70cm程度である。

（齊藤）

3. 空塙東平坦面の遺構と遺物

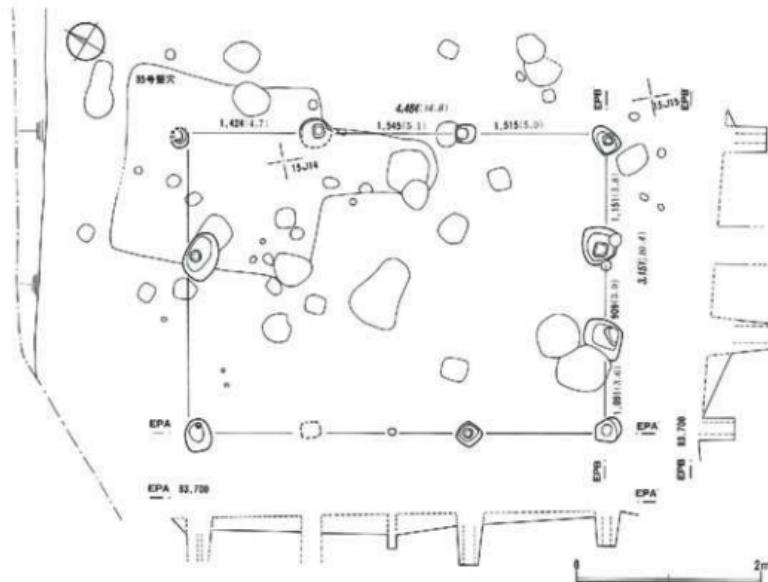
（1）位置概要（第2図、付図）

第二平坦面と5mの段差を持つ第一平坦面は、幾分東へその長軸を寄せて広がっている。面積は約3,750m²である。中央を遊歩道が通り左右（南北）に各2～3段の小平坦面がつくられている。この第一平坦面右（南）の最も西よりの小平坦面の二条の空塙の東側に遺構の形成が見られた。

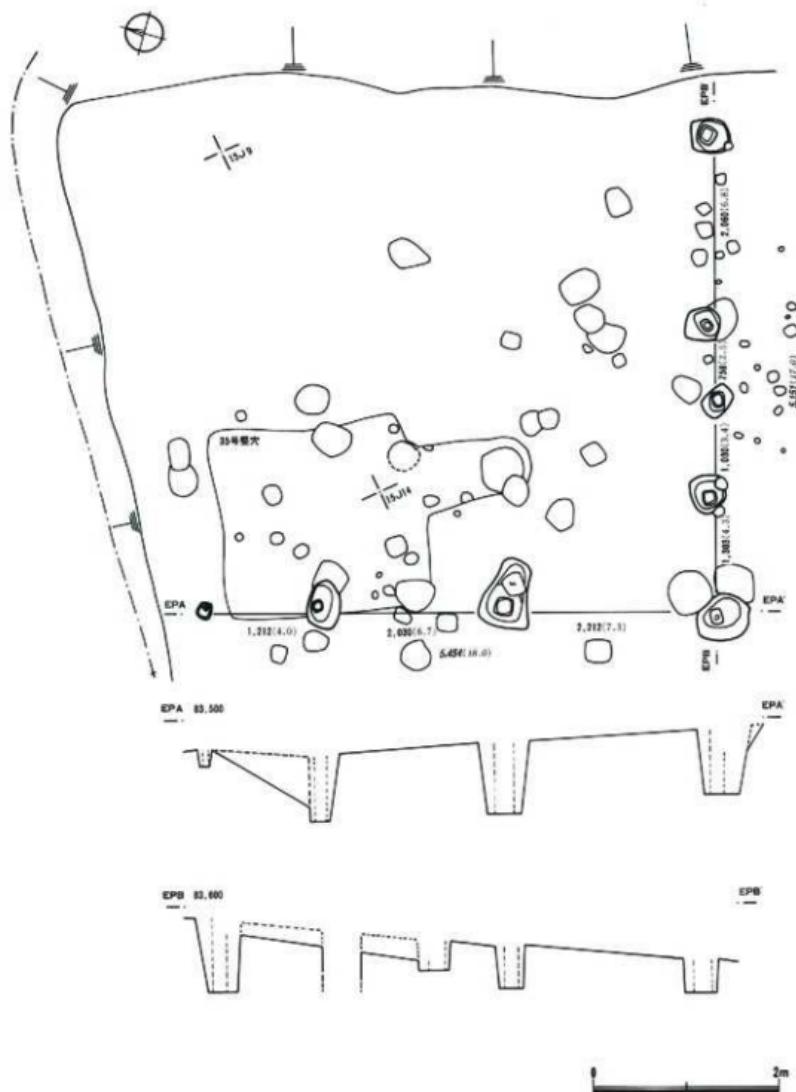
空塙Bの東およそ2～3mのところに旧地表と思われる漆黒の面がある。この上に空塙の掘り上げ土を盛し平坦面をつくる。遺構はこの盛土整地面につくられる。

（2）層序（第6図、表4、5）

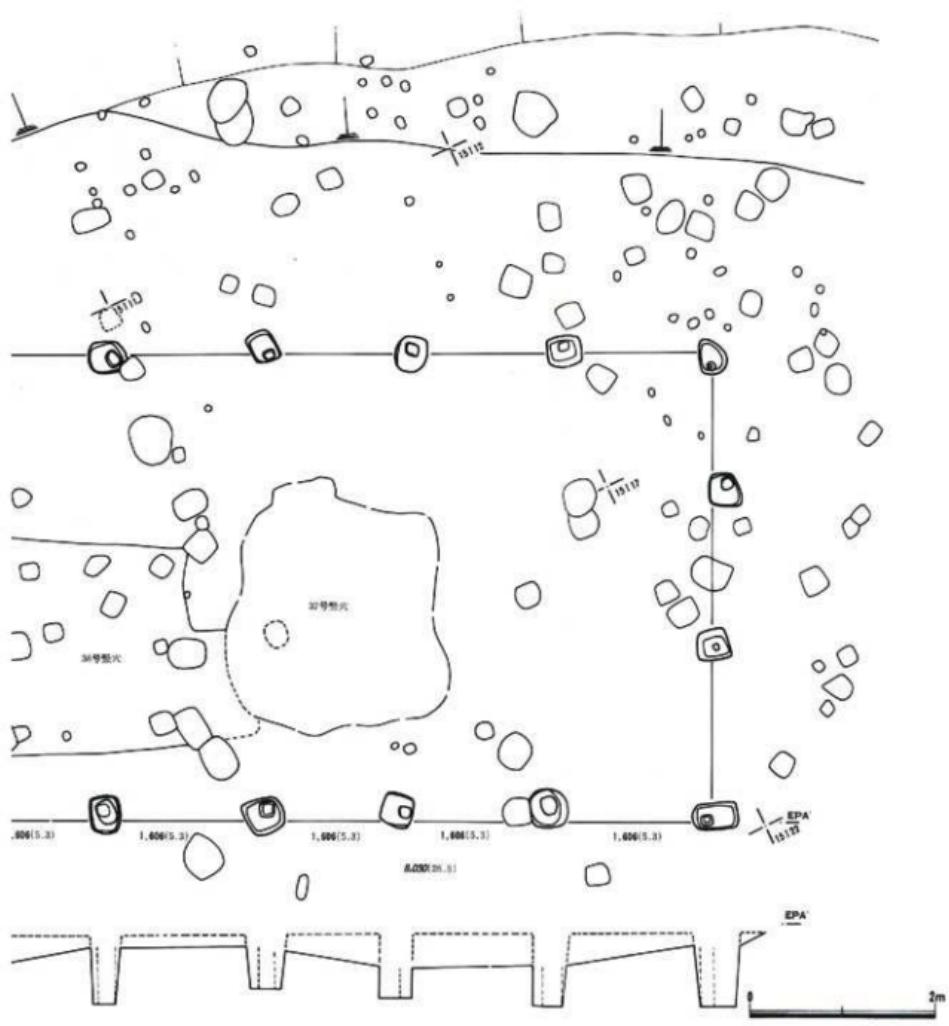
盛土整形直前の旧地表面はIVa層として肥えている（本概報図）。このIVa層は空塙Bの東2m程からゆるやかに傾斜して、小平坦面の段直下、例



第20図 第1号建物跡想定図



第21図 第2号建物跡想定図



第22図 第3号建物跡想定図

えば15J10区中央のIII層下位に連なっている。又第二平坦面III層下のIV層に連なる物である。従って、空塙跡東2mから第二平坦面肩までの約24mの間は人為的に削られ、さらに空塙が掘られたものと推される（付図地形エレベーション網点部）。

この掘り上げ土の整地層がこの小平坦面をつくりそこに遺構が形成されている。この整地層がIII層でありその上位にII層、I層が堆積する（付図地形断面斜線部）。

（3）検出遺構

検出・想定された遺構は掘立柱建物跡と竪穴遺構である。遺構と遺物の伴伴関係、焼土（後述）との相互関係等について充分検討することができなかつたため、柱穴列等から想定されるところを以下に概述することとしたい。

a. 掘立柱建物跡

第1号建物跡（第20図）：調査区南西端で検出した。35号竪穴と重複し、新しい。南及び東の柱列から 3×3 間の建物跡を想定したが、西及び北の柱穴対応は明瞭でない。南北約4.5、東西3.15m程である。柱間は約南北1.4~1.5m、東西90~1.15mを計る。面積14.13m²。

第2号建物跡（第21図）：東と南に柱列が見いだされた。1号より新しい。北、西側の柱穴を検出できず、柱間も不明である。

1号建物跡は3~7号とした建物跡と軸線が揃わず、むしろ2号の柱列が同一方向になる。東、北部の調査が不充分な為検出できなかったと推されるが、この一画にも建物があったと推される。

第3号建物跡（第22図）：小平坦面中央北寄りに位置する。3間×5間の平坦地に沿った南北の建物。南北約8m、東西4.8m程で面積38.7m²弱である。柱間1.605、1.606（5尺3寸）の等間となる。36、37号竪穴が中に入るが新旧関係は不明である。37号竪穴が未完掘に終り、その覆土或いは床面に柱穴が認められるようであり、調査結果によつては間取りや、新旧関係が判るかと推される。

第4号建物跡（第23図）：小平坦面中央に位置する。3間×3間で平坦面に直行する東西棟となつてゐる。東西5m、南北4m程、面積19.7m²余である。柱間は東西1.7、1.7、1.6m、南北1.24~1.4mである。2×3間の南北棟とも推される。西柱列中央右の柱穴の重複関係だけ他と異なつてゐる。

第5号建物跡

（第24図）：小平坦面中央（南）

に位置する。 3×3 間の平坦面に併行する南北棟である。南北5.7m、東西4m、面積22.7m²余である。柱間寸法は約127~137cm、170~200cmで定まらない。これも東西いずれかの1間を庇とする 2×3 間の建物とも推される。

第6号建物跡（第25図）：小平坦面南端に位置する。1間×2間の小さな建物である。2.2×3.2mで約7m²の面積である。東西の柱間は北柱列では1.6m等間となるが、南側とは対応しない。周辺に焼土があるが南北の大きめの焼土遺構や後述の出土遺物などから小規模な鐵冶関連遺構かと推される。

又南の古台へりに東西に検出された小柱穴列はこの小平坦面を限る柵（塀）状のものと推される。

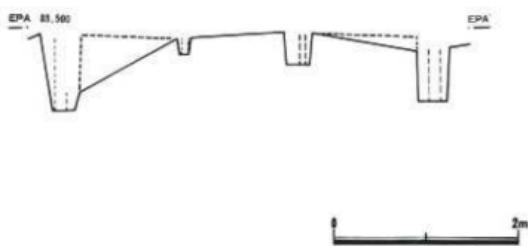
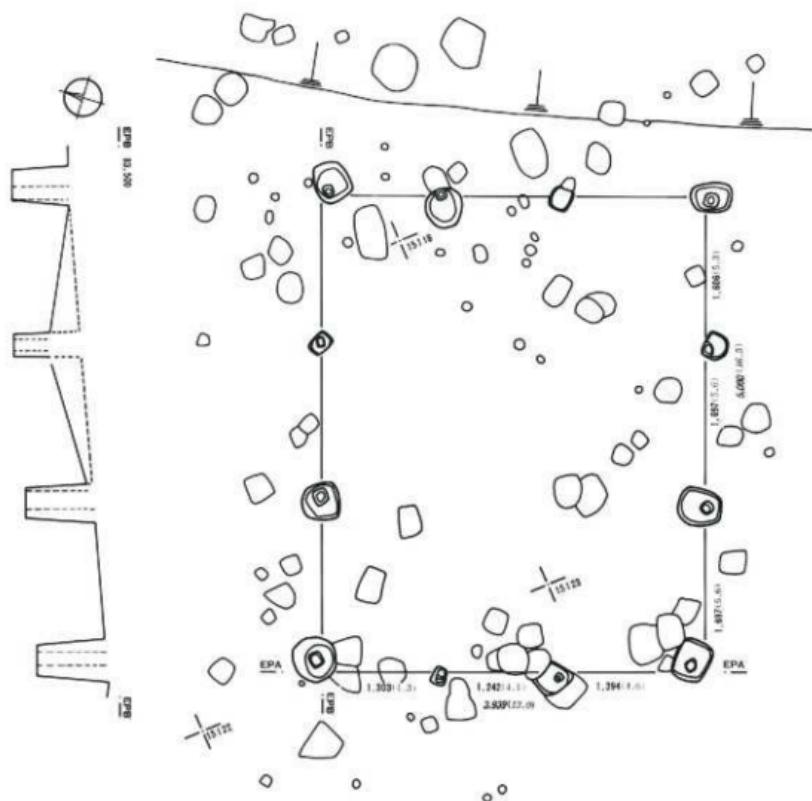
第7号建物跡（第25図）：小平坦面南端は鉤の手に西に曲がる。西南隅から南の段下を東に緩い坂が下っている。第一平坦面の最も広い区画に至るとともに南西に下り宮ノ沢を経て侍屋敷に至る道との分岐点に続いている。小平坦面の南を通つて東へ至る道路跡であろう。その造成は小平坦面同様、空塙掘り上げ土の整地によつて（土層堆積図省略）。

第7号建物跡としたのはこの坂のおりがけで検出した柱穴から木戸等として想定したものである。その位置としてはより西側の傾斜する坂（道）の出発点がより適しているかと推される。巾2m弱である。

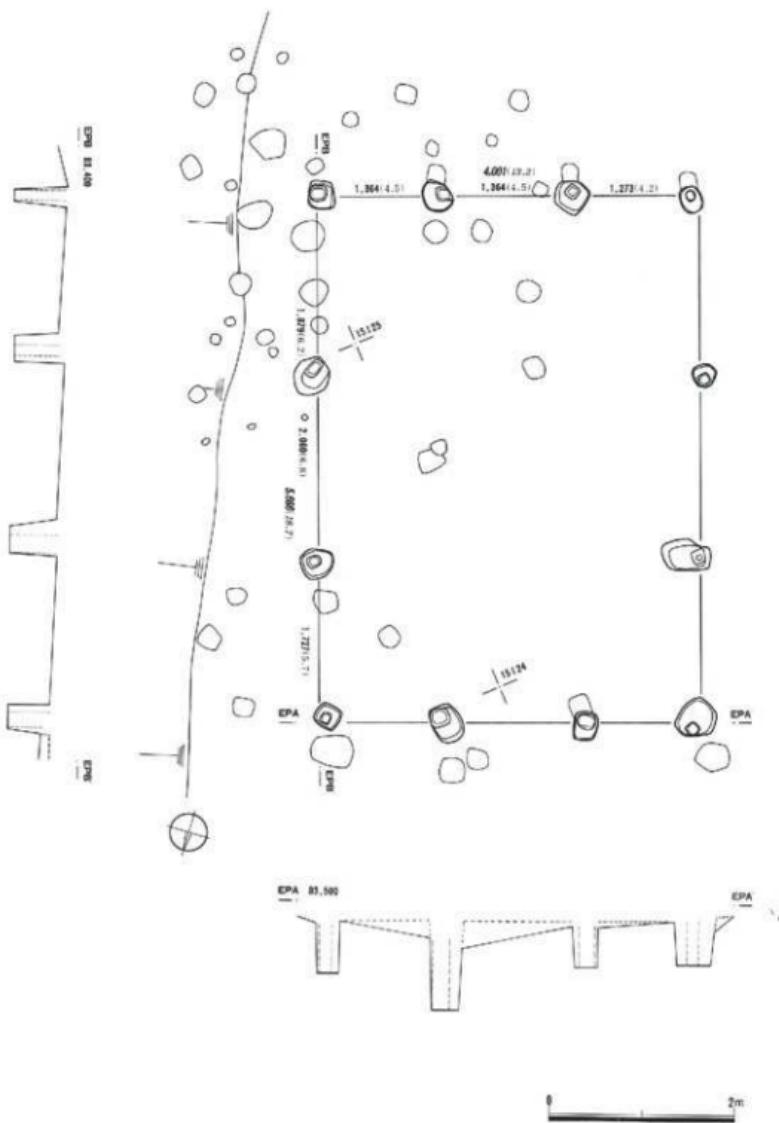
b. 竪穴遺構

小平坦面の北半で3基の竪穴が検出された。内36号竪穴は、62年度調査のトレンチ東端で一部検出されていたものである。又、37号竪穴は焼失家屋であったが実測図の作成途中のまま調査を中断、完掘にいたつてない。又個々の竪穴覆土出土の遺物についても充分な検討ができず、共伴関係は明確でない。

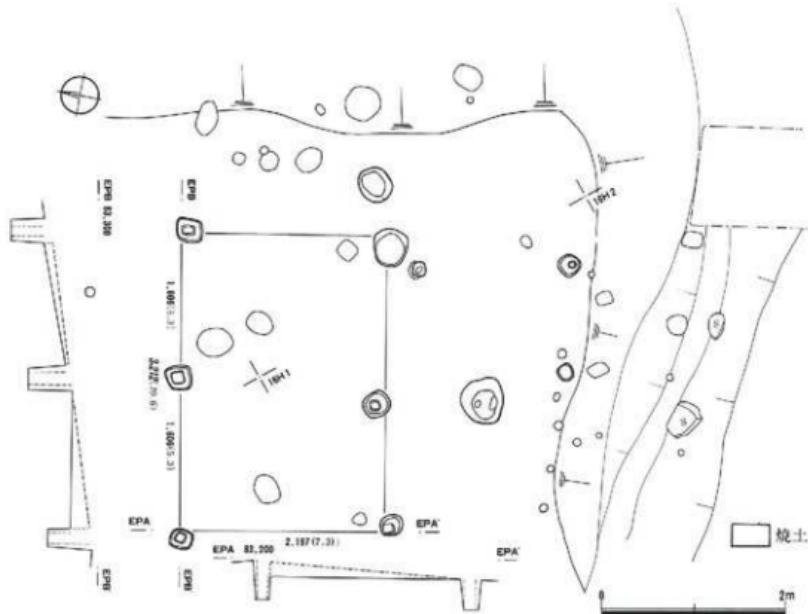
35号竪穴遺構（第26図）：小平坦面北端で検出された。一辺が2m程の方形で南側東半に1m弱の緩やかな傾斜を持つ張り出しがつく。北側の壁高76cm。III層整地層を掘り込み面とする。覆土の堆積は、壁際に一次堆積が若干見られるが、基盤磚、粒を含むIII'A層が厚く1号建物跡の柱穴が覆土を掘り込んでいる事などから人為的に埋め戻されていると解される。尚、底面直上に黒色の灰泥じりの層が薄く堆積していた。



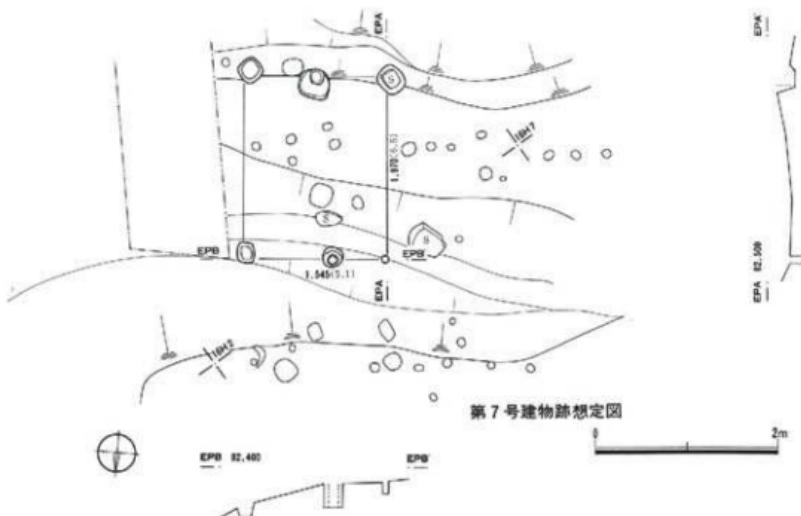
第23図 第4号建物跡想定図



第24図 第5号建物跡想定図



第6号建物跡想定図



第7号建物跡想定図

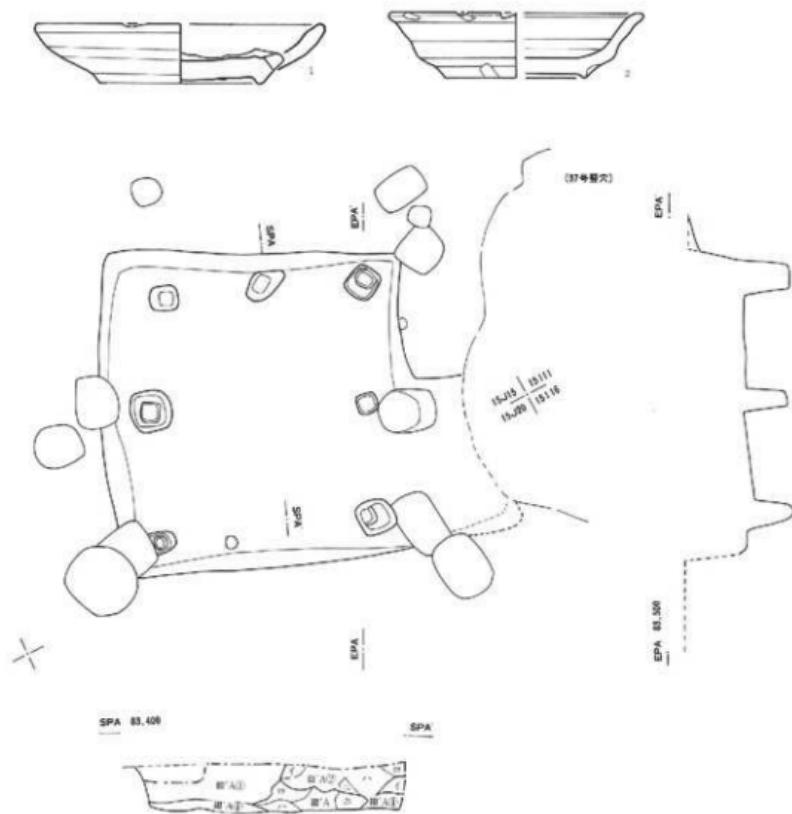
第25図 第6・第7号建物跡想定図

表6 第35号豎穴覆土土層観察表

番 号		色 渡	組 成	備 考	
采集層序	小区分	JIS soil classification	土 色 名		
I	x	7.5Y R/5	褐	5cm大差混入 5%	現地土 かたい
	b	10Y R/5	暗褐	炭化物混入 1%	
	c	7.5Y R/5	褐	ノ	
II	x	10Y R/5	暗褐	炭化物混入 1%	ソフト * 土よりやや切る(軟い)
	b	7.5Y R/5	暗褐	ノ	
	c	10Y R/5	褐	基盤埋植土 シルト	
III	a	7.5Y R/5	褐	0.5~5m大差混入有鉄質	イより固
	b	10Y R/5	褐	炭化物含有 シルト	
	c	2.5Y R/5	赤褐	ヨリ大差混入有鉄質	
	d	7.5Y R/5	暗褐	炭化物含有 粒状物	
	e	10Y R/5	にじく黄褐	ヨリ大差混入ヨーローブロック混入	
	f	10Y R/5	暗褐	炭化物幾何学含有 シルト	
	g	10Y R/5	褐	炭化物混入 シルト	
	h	10Y R/5	褐	基盤埋植土	
	i	7.5Y R/5	にじく黄褐	高塑性粒、炭化物混入	
III-A	j	7.5Y R/5	暗褐	焼土粒混入20%	強火焼土(以下同) ソフト * 常 常
	k	10Y R/5	にじく黄褐	丸山原名高塑性混入	
	l	10Y R/5	ノ	炭化物混入シルト	
	m	7.5Y R/5	褐	ヨーローブロック基盤埋植土	
	n	10Y R/5	にじく黄褐	ヨリ大差混入炭化物混量	
	o	10Y R/5	褐	炭化物基盤斜材有	
	p	10Y R/5	にじく黄褐	高塑性 炭化物ヨーローブロック混入	
	q	10Y R/5	ノ	ヨリ1m大差基盤標、炭化物混入	
	r	10Y R/5	ノ	基盤ヨーローブロック 炭化物混入	
	s	7.5Y R/5	ノ	1~3m大差基盤標、炭化物含有	
III-B	t	10Y R/5	ノ	2m大差炭化物含有	硬 ソフト * より固い ソフト * ソフト ソフト
	u	10Y R/5	ノ	ヨーローブロック 炭化物混入、目上層	
	v	7.5Y R/5	ノ	5m以下硬、炭化物混入 シルト	
	w	10Y R/5	褐	シルト	
	x	10Y R/5	暗褐	ノ	
III-C	y	7.5Y R/5	暗褐	基盤炭化物含有	柱穴地主 かたくしまる(堅密)
	z	7.5Y R/5	褐	ノ	
	u	7.5Y R/5	暗褐	ノ	



第26図 第35号豎穴平面図



第27図 第36号竪穴平面図・出土遺物

表7 36号竪穴覆土層観察表

層 序	色 名	色 調		性 式	備 考
		JIS notation	土 色 名		
II-A	①	10Y R 5/6	褐	3-12ド茶褐色、同程度	程 か い 青 緑 色
	イ	10Y R 5/6	*	無酸化鉄化合物含有	ト イ より や や く れ い
	ロ	7.5Y R 5/6	紅茶 褐	無酸化鉄化合物含有、シルト	れ い
	ハ	7.5Y R 5/6	褐	無酸化鉄化合物含有、腐殖性みどりシルト	
	ニ	7.5Y R 5/6-N	褐	無酸化鉄化合物含有50%	れ い
	イ	7.5Y R 5/6	褐	3-12ド茶褐色、交換性カオミ、粘土、シルト	ソ フト
	ロ	7.5Y R 5/6-N	*	火山灰質入層、泥炭、ペースト状	ソ フト
	ハ	7.5Y R 5/6	褐	無酸化鉄、火山灰含有	
	ニ	7.5Y R 5/6-N	*	基盤埋蔵、火山灰質化合物含有、シルト	
	ト	7.5Y R 5/6	*	5-10cm茶褐色火山灰含有	
II-B	イ	7.5Y R 5/6	*	2-12ド茶褐色、粘土含有	
	ロ	7.5Y R 5/6-N	*	基盤埋蔵、粘土含有、粘、泥性、シルト	

底面での柱穴、眉溝等の検出はできなかった。張り出し部側方の小柱穴は本遺構に伴うかと推する。又遺構の周囲で柱穴が検出されたが堅穴との関係は明らかでない。底面はローム層であるが、それ程堅められてはいない。

覆土中から出土した遺物はない。底面直上の炭化物混入層中から漆器皮膜、鋳造鉄片、魚骨が採集された（P.L. 20）。

36号堅穴遺構（第27図）：小平坦面北半で検出された。2.3×2.1m程の方形で南西部に張り出しがつくと推される。堅高は62年度調査層序から50～65cm程である。掘り込み面はⅢ層整地層である。覆土は西半にやや軟かみの粒子の細い層が堆積し、東半は礫混じりの堅い層となる（III'A①）。後者は再堆積の埋め土と思われる。底面に炭化物等を含む薄い層が堆積する。

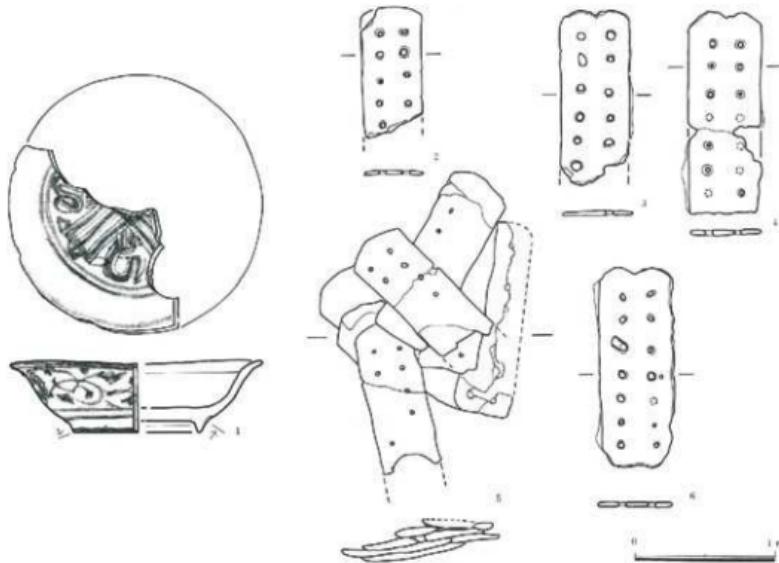
柱穴が7個検出されている。南張出部で37号堅穴と重複している。37号が未完掘であるが、37号の方が新しいかと推される。又3号建物跡との新旧関係も明らかでないが一応本堅穴が古いかと推している。底面は西半は基盤ローム層であるが東半はⅢ層盛土整地層であり、整えられた形跡はな

い。

覆土等から陶器等が出土した（P.L. 18, 20）。II、12は堅穴西半の底面直上から出土した瀬戸・美濃灰釉碗でIIには剣先蓮弁が描かれる。同一個体と推される。14（27図2）は東半の底面より下位及び遺構南のはば同一レベルより出土した瀬戸・美濃のやや小ぶりの端反りする丈高の皿である。8、9、13は堅穴覆土上半部からの出土であり、9は37号堅穴上部の他、周辺調査区のI、II層中からも出土する。又底面直上層より粒状灰、骨他を抽出した。

14は本堅穴の掘り込まれる以前のⅢ層整地層中の遺物であり、II、12は、堅穴の使用時期或いは廃棄直後の近い時期にあたり、その他は埋没、整地後の遺物かと推される。IIは大窯一期であり、14もほぼ同時期と思われる。13の内はがしの丸皿は大窯の二期以降の所産であろう。従って本堅穴は大窯一期の遺物が使用されていた時期頃との推測が可能と思われる。

37号堅穴（附図、P.L. 11）：小平坦面北半中央寄りで検出された。未完掘の為形状等は不詳。35、36号等と同様の方形を呈する。北東に張り出



第28図 第37号堅穴出土遺物

しがある。焼失埋没しており諸部材が残存する。又その上から柱穴が穿たれており、又下位にも柱穴の検出される可能性は高い。

部分的な観察であるが心材を面取りした主柱痕が8個、張出し部にも一部一回り細い柱痕が炭化して残る。主柱痕の外側に板材が横長に立って残りその外側に束状に木本科植物がある。結構はまだ明らかでない。内部の炭化材の下位、豊穴底面に近接して南北に細い材がわたされている。

計測、取り上げの途中でありやや不確実であるが、鉢木亘先生のご教示によれば、柱外側の横板は歴であり木本科植物は屋根又は壁（の補助）材であり南北に根太をわたした床張りの建物の可能性が高いとの事である。

炭化材の直上等で遺物が検出された（第28図、PL. 18）。20点余りの小札、釘、鉄滓、粒状滓、陶磁器及び獸骨である。陶磁器は青磁接花皿、染付押磨皿、内消気味の丸皿で外面に折枝を内面口縁に四方捺文を描くもの、瀬戸・美濃端反り皿である。小札は大小その他各種ある。他に握り拳大の碗形滓、内部の空洞化した溶解物等がある。

本小平坦面の遺物については後述するところであるがその位置関係等の分析は十分でなく、豊穴の性格等を探るにはまだ無理があるが各豊穴各々で（歴）魚骨が採集され、35、37号から鍛造刺片、36、37号から粒状滓等が抽出されるなど共通・関連性が窺われるところとなっている。（松崎）

註）この資料についての成分分析などが国立歴史民俗博物館で現在すすめられている。

c 焼土（第29図～第31図）

16基確認された。調査はいずれも半裁しセクション図作成後覆土をサンプリングしフローテーションを行なった。（表8）。

焼土1（第29図SPA～SPB'）：15J 9区にある。約37cm×30cm程の不整円形をなす。残存状態が極めて悪い。覆土中には魚骨、炭化物等が微量含まれる。

焼土2（第29図SPB～SPB'）：15J 9区にある。約25cm×21cmの不整円形をなす。残存状態が極めて悪い。覆土中には魚骨、炭化物等が微量含まれる。

焼土3（第29図SPC～SPC'）：15J 9区にある。約60cm×21cmの不整形をなす。残存状態が極めて悪い。覆土中には魚骨、木炭、種子等が微

量含まれる。

焼土4（第30図SPD～SPD'）：15J 9区にある。約160cm×94cmの不整形をなす。覆土中には魚骨、獸骨、木炭、種子が多量に含まれる。その他鐵製品の細片、漆器皮膜等も微量に含まれる。堆積状況より焼成面が明確でない事等より流れこみによるものと考えられる。

焼土5（第29図SPE～SPE'）：15J 9区にある。約20cm×16cm程の不整円形をなす。残存状態が悪く下部より残っていない。覆土中には魚骨、木炭が微量含まれる。

焼土6（第29図SPF～SPF'）：15J 9区にある。約41cm×26cmの不整形をなす。残存状態が極めて悪い。覆土中には木炭、獸骨、種子が微量に含まれる。

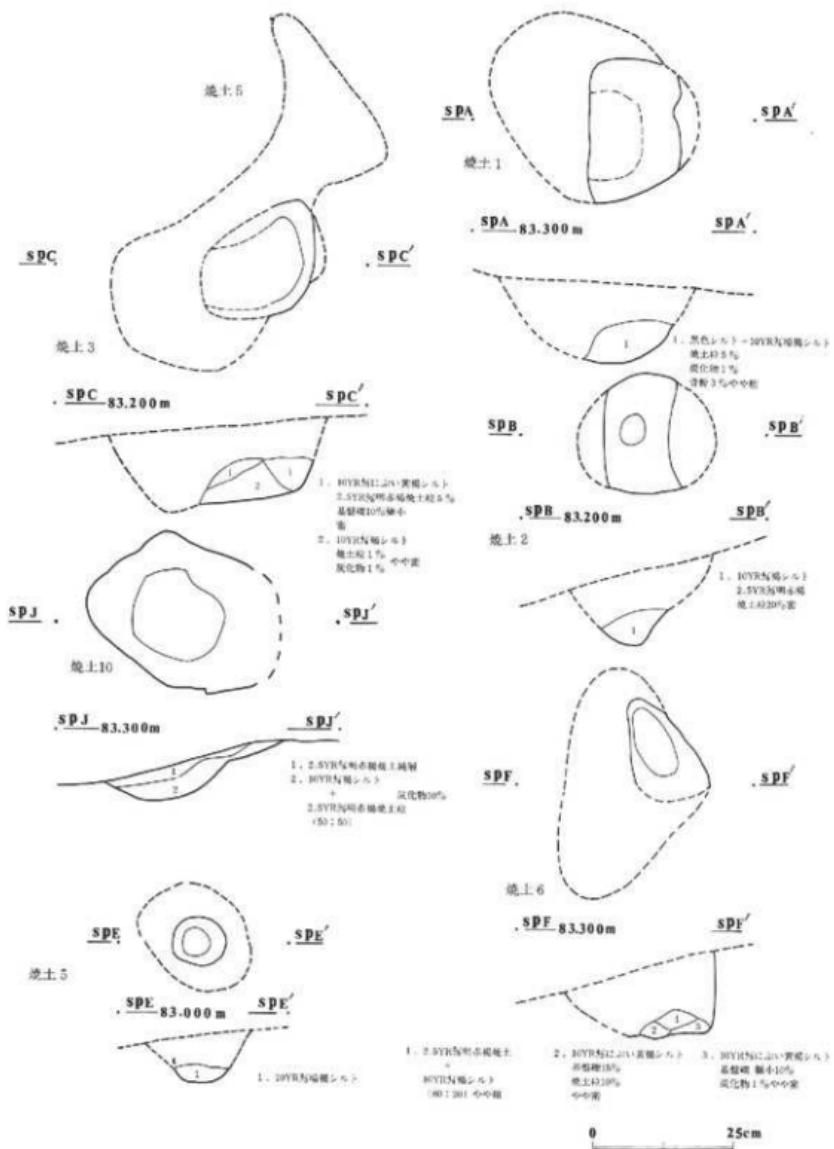
焼土7（第31図SPG～SPG'）：15J 9区にある。約200cm×56cmの不整形をなす。覆土中には獸骨、魚骨、木炭等が多量に含まれる。その他鐵製刺片微量、海獣骨製骨角器、フレーク、土器片等が含まれる。堆積状況より流れこみと考えられる。

焼土8（第31図SPH～SPH'）：15J 14区にある。約40cm×33cmの不整円形をなす。覆土中には獸骨、魚骨、木炭が含まれる。堆積状況は図上1に焼成面と考えられる焼土純層があるが周囲の2、3、5には焼土粒、炭化物等が全く含まれない。流れこみによるものか、地床炉か不明である。尚当焼土内の礫は加熱されていない。

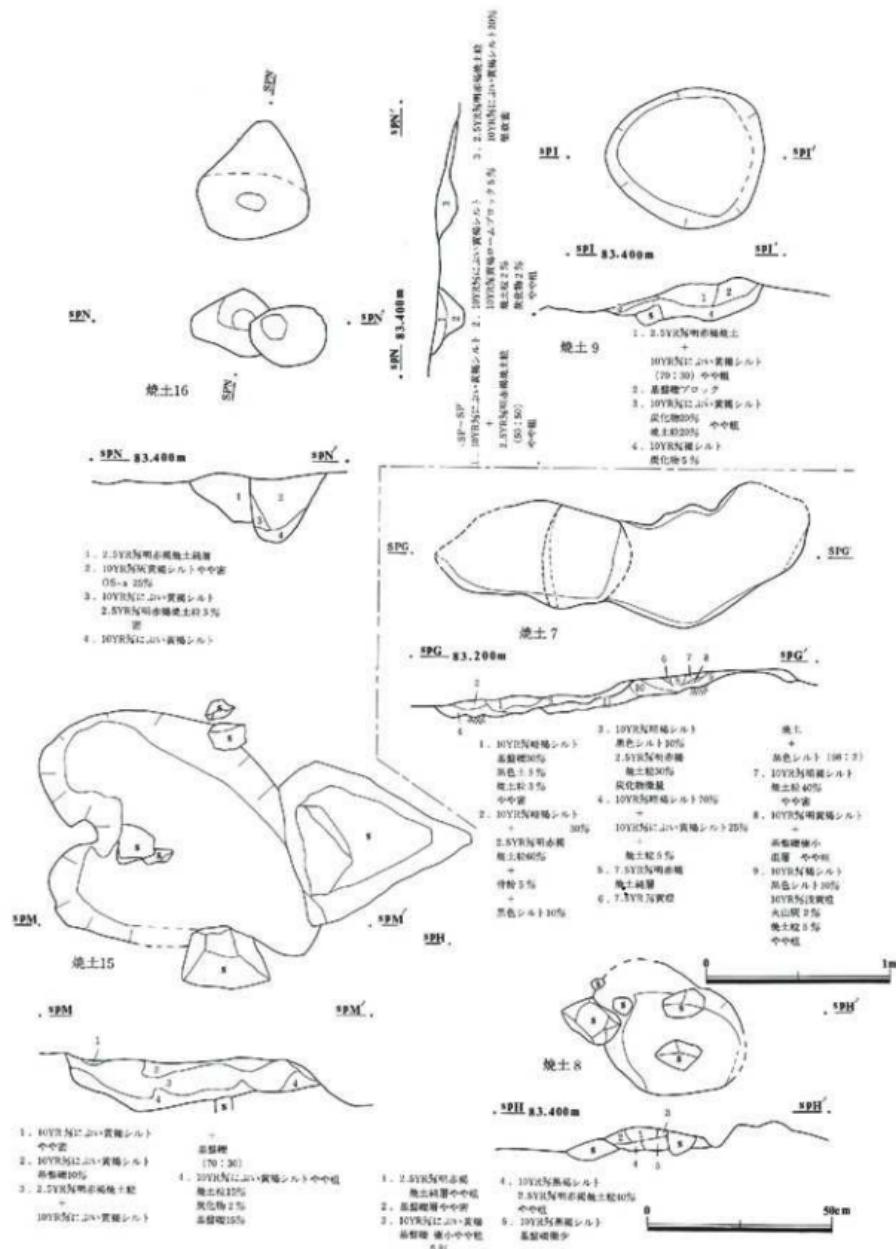
焼土9（第31図SPI～SPI'）：15J 4区にある。約43cm×38cmの不整円形をなす。覆土中には獸骨、炭化物が含まれる。堆積状況より焼成面は1と考えられる。従って当焼土は地床炉と考えられる。

焼土10（第29図SPJ～SPJ'）：15J 15区にある。約34cm×25cmの不整円形をなす。覆土中には獸骨、炭化物が含まれる。堆積状況より焼成面は1と考えられる。従って当焼土は地床炉と考えられる。

焼土11（第30図SPK～SPK'、SPL～L'）：15J 11区にある。約61cm×59cmの不整円形をなす。覆土中には獸骨、魚骨、炭化物、木炭、鉄片、鐵製刺片等が含まれる。堆積状況より焼土純層の1、3、5が焼成面である事より当焼土は地床炉と考えられる。



第29図 焼土①



第31図 燃 土 ③

焼土12 (第30図 S P K ~ S P K') : 15 I 11区にある。約22cm×17cmの不整円形を呈する。覆土中には魚骨、木炭、炭化物、鉄片等が含まれる。堆積状況より8が焼土純層であり焼成面と考えられる。従って当焼土は地床炉と考えられる。

焼土13 (第30図 S P K ~ K') : 15 I 16区にある。約20cm×24cmの不整円形をなす。焼土12と隣接して入る。覆土中には魚骨、木炭、鉄製釘が含まれる。覆土は焼土純層のみであり焼成面が極めてしっかりとしている。従って当焼土は地床炉と考えられる。

焼土14 (第30図 S P L ~ S P L') : 15 I 16区にある。約25cm×17cmの不整円形をなす。覆土中には魚骨、木炭、炭化物、種子が含まれる。覆土はシルト土壤と焼土粒の混合土であるが焼土粒が90%と多く焼成面と考えられる。従って当焼土は地床炉と考えられる。

焼土15 (第31図 S P M ~ S P M') : 15 I 17区にある。約87cm×60cmの不整形をなす。覆土中には獸骨、魚骨、木炭、種子、鉄片、鉄細片が含まれる。

セクションが中央部を横断していないので土層堆積状況は明瞭ではないが、図でみる限りでは焼成面は判然となく、流れ込みによる堆積と考えられる。尚当焼土周囲の壁は加熱されていない。

焼土16 (第31図 S P N ~ S P N') : 15 I 24区にある。柱穴との重複関係となっており当焼土が古い。覆土中には魚骨、木炭片が含まれる。覆土は焼土純層のみである。従って当焼土は地床炉と考えられる。

傾向 地域的には15 J 9、14区と15 I 11、16区の2つのブロックに集中する。覆土堆積状況では15 J 9、14区の焼土は流れ込み、不明のいずれかに対し15 I 11、16区は地床炉が多い。覆土中含有的、含有率は15 I 11、16区地床炉では獸骨、魚骨、木炭が多く種子は微量、鍛造鉄片、鉄滓は皆無である。また流れ込みの焼土には骨角器、鉄、釘等が含まれていた。これらより地床炉の用途は建物に付属する煮炊用、暖房用としての用途が考えられる。
(齊藤)

表8 焼土成分表

焼土NO	グリット	サンプル 乾量(g)	成							分(g)
			炭化物	木炭	種子	骨	貝	鉄	鍛造 鉄片	
1	15 J 9	4455	1.0		0.9	1.3				
2	15 J 9	2340	1.8			1.1				
3	15 J 9	3169		1.0	0.9	1.1				
4	15 J 9	200635	84.0	59.2	257.0	1.0	16.5		1.9	釘、漆器皮膜1.0、織文土器片112.3、フレーク4.5
5	15 J 9	793.7		1.9		1.0				
6	15 J 9	1875	0.1	3.0	1.8					
7	15 J 9	22230	12.5	13.4		10.1			1.1	骨角器2.1、織文土器片19.9、フレーク1.25
8	15 J 14	2360		5.0		2.0				
9	15 J 14	3540	4.8	11.2	4.6					
10	15 J 15	1820	1.3			1.4				
11	15 I 11	13960	1.7	7.6		9.8	1.9			鍛造鉄片1.2、フレーク3.4
12	15 I 11	3625	1.2	1.1		2.5	1.0			
13	15 I 16	4690		4.0		3.0	1.9			釘1.9、織文土器片45.2、フレーク0.9
14	15 I 11	9525	3.1	4.7	0.9	9.8				
15	15 I 17	23960		5.7	1.8	3.7	0.9			鉄1.0
16	15 I 24	2320		1.2		1.4				

(4) 出土遺物 (第32図～34図)

空塙東側小平坦面から陶器、鉄、銅製品、石製品等が出土した。

a 陶器 (P.L. 17, 19-29, 21, 25, 26, 14-17)

青磁、白磁、染付、瀬戸・美濃、志野、唐津、越前、珠洲等が出土している。堅穴覆土も合せ234点が出土しているうち170点程は北半に集中している。碗、皿類は北半に2.5-3.8倍集中するのに対し、擂鉢は南半に3倍集中し、南半における擂鉢の構成比が高くなっている(表9)。

青磁：縁抜き運弁碗、稜花皿が出土する。4、12は内面に押印のある碗である。他に底部周辺が丸く磨り減り円盤状になったものがある(32図12)。当遺跡では3例目程度である。

白磁：皿と小杯がある。19はやや青味がかった釉が厚めにかけられている。(3)。

染付：蓮子碗、口縁内外に圓線の廻る碗、褐磨皿、甚簡底の皿などがある。6の獅子皿や28の端反り皿は当遺跡では新しい段階のものである。

瀬戸・美濃：碗と皿が出土する。46は側先運弁の碗、47は内はがしの丸皿である。49は口縁内外に黒く煤が付着し、口端が再加熱で白色化している。灯明皿としての仕様であろう。

54-58は鉄軸の碗である。当地区から僅か5片しか出土していないのは極めて特徴である。

59は志野、60-62は唐津である。61は鉄絵が描かれる。志野・唐津とともに皿である。

他に越前、珠洲形の擂鉢、甕等が出土する。

b 金屬製品 (P.L. 18, 19)

鉄製品：この小平坦面で3,243gが出土した。又、鐵滓が3,014.2gが出土している。大まかな傾向をみると1号及び2号建物跡(35号堅穴)周辺にそれぞれ316.8, 98.7g、37号堅穴周辺に1,398.2, 562.6g、6号建物跡周辺に572.2gの量が集中して出土している。尚鐵の製品別等の量比較は未算計である。

P.L. 18-15-21は鉄鍋類の破片である。15は口縁下4.5cm程のところに段が着くもので口唇は内側に三角形に肥厚する。17は耳耳の部分、20は口縁部破片である。内側に肥厚する。18、19、21、22は底部破片。19は大きく外開きする大型のものと推される。21は5cm程の脚が着く。16は高さ8cm程の浅い容器のようである。22, 23は刀子、24も同

類であろう。27は縁の茎かと推する。28は釣針である。軸の3分の1くらいまで、さきをまげ、軸とはほぼ平行させる。軸は上3分の2は偏平で上3分の1程は内側へまげられる。かえしの部分は欠失して不明。あぐはない。34は鉤、垂直な軸に広くふところを作り斜めにまげ。先端は欠失してふまい。軸部断面は偏平につくられる。38も鉤かと推する。但し34とは軸部の形状が逆向きに偏平につくられ、更に34のような明瞭な四角形を示さないなどの違いがあり、別機能を有するものであろう。30はクサビ状のもの、31、32、35は釣、29は火箸である。

銅製品：武具他が出土している(P.L. 19)。28は甲冑、格査板か胸板の一部かと推するものである。33、29は鎧金具、34は止め金具、37、38は緑金具である。40は薄い銅版を折り曲げたもので一端に穴があり、二つに折りまげ2枚と一緒に綴じた様である。44は唐手円形のもので、微隆起輪を1条廻らし内外を区分する。内側には花弁状のもの(藤?)が浮き出されている。仏具類の盤等の一部かとも推される。43は鉢形の容器である。地に鉄を用い銅で包んでいるようである。

C その他

49は陶鍤である。P.L. 18-74-76は羽口である。74は土製、75、76は石製である。いずれも第6号建物跡周辺から出土している。75、76の先端は火熱を受けた部分が斜めに変色し、76ではその反対側に抉りがつくられ、使用の状態が伺われる。37-43は鉄滓である。

尚6号建物跡南の焼土27からは鉄滓49g、鐵造刷26.3g、径1-4m程の粒状の鐵分2.4g等が抽出された。

その他の出土遺物に銅錢がある。15J 9で11点、4号建物跡周辺に48点が集中していた。

又P.L. 20-2は焼土7出土の骨角器である。鯨又は海獸骨を用いた中柄と思われ、火熱を受けている。

陶器の示す年代は、白磁挿り入り高台の丸皿、瀬戸・美濃運弁文碗、珠洲系甕等15世紀後半以降染付獅子皿(P.L. 17-42)瀬戸・美濃うちはがし丸皿、志野唐津等16世紀末葉までの勝山館跡の存続期間全般にわたっている。器種の構成は碗皿に擂鉢、少量の甕類からなり、日常生活用具類に限られるようである。中でも鉄軸の所謂天目茶碗

が殆ど見られないのは際だった特色とすることができる。香炉、茶器等も見られない。

他方、鉄・銅製品の出土が多く見られ、銅製品では飾金具等が多く、鉄製品では37号竪穴を中心とした出土量が多い。

又27号焼土や6号建物跡周辺、37号竪穴等々で羽口、鐵津、鐵造剣片等が頗著に見られた。

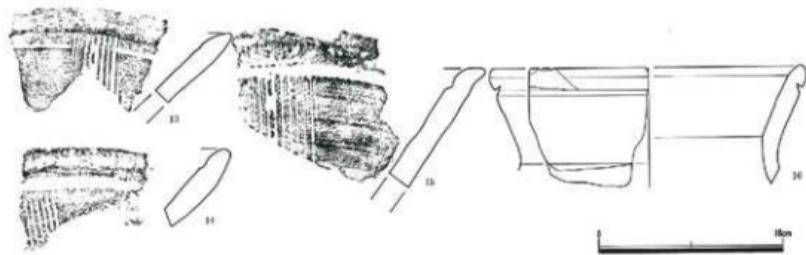
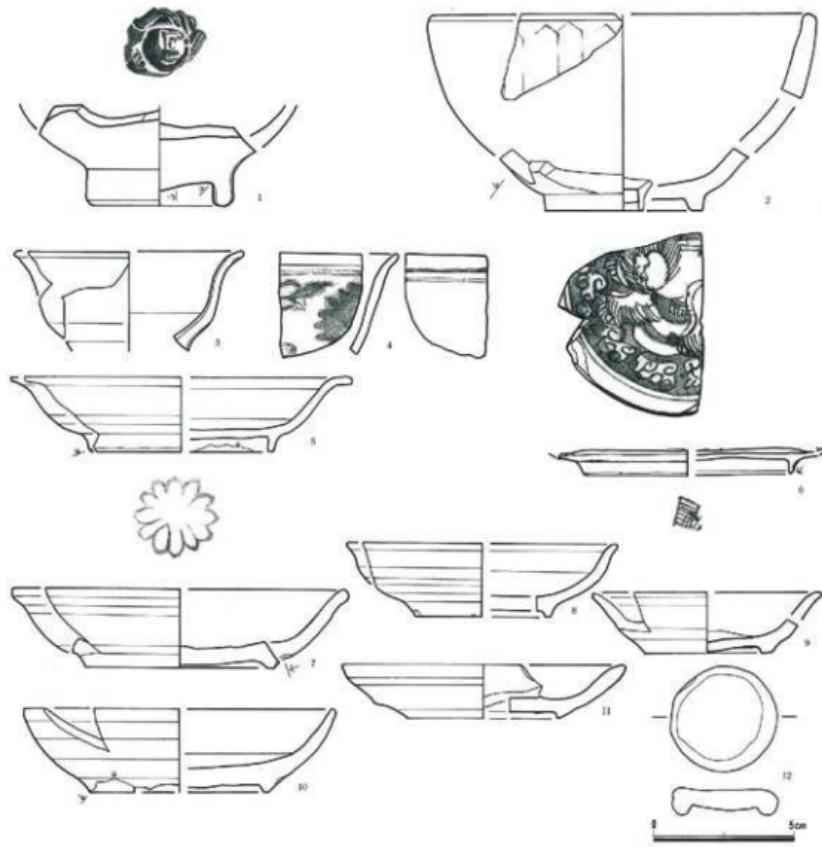
既述のとおりこれら各種遺物について出土地点

と層位、接合関係、更には各遺構との関連等について充分な検討を行うことができなかつた。この為、なお個々の遺物については勿論、各遺構更にはこの空壕東部の小平坦面の性格等については全く見えられていない状況にある。更に検討を加える所存であることを記しておきたい。

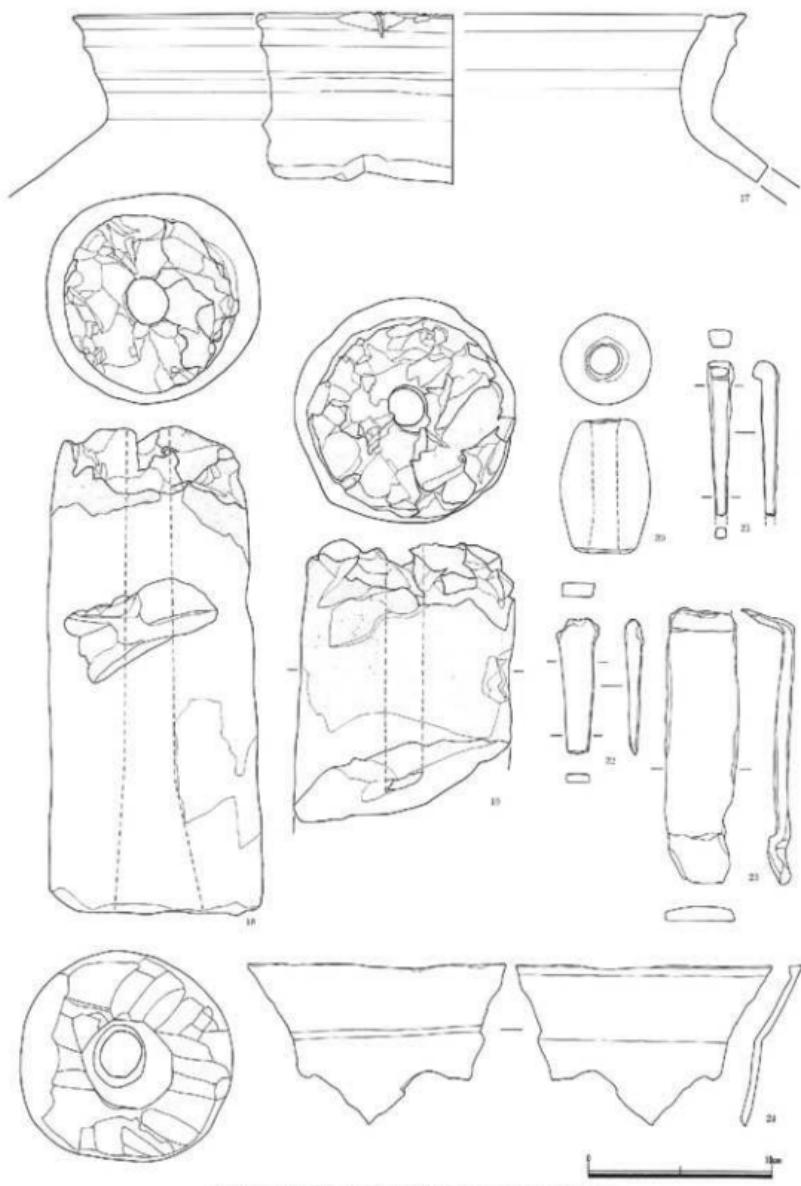
尚出土陶磁器の一覧を付した。(松崎)

表9 空壕跡東平坦面陶磁器集計表

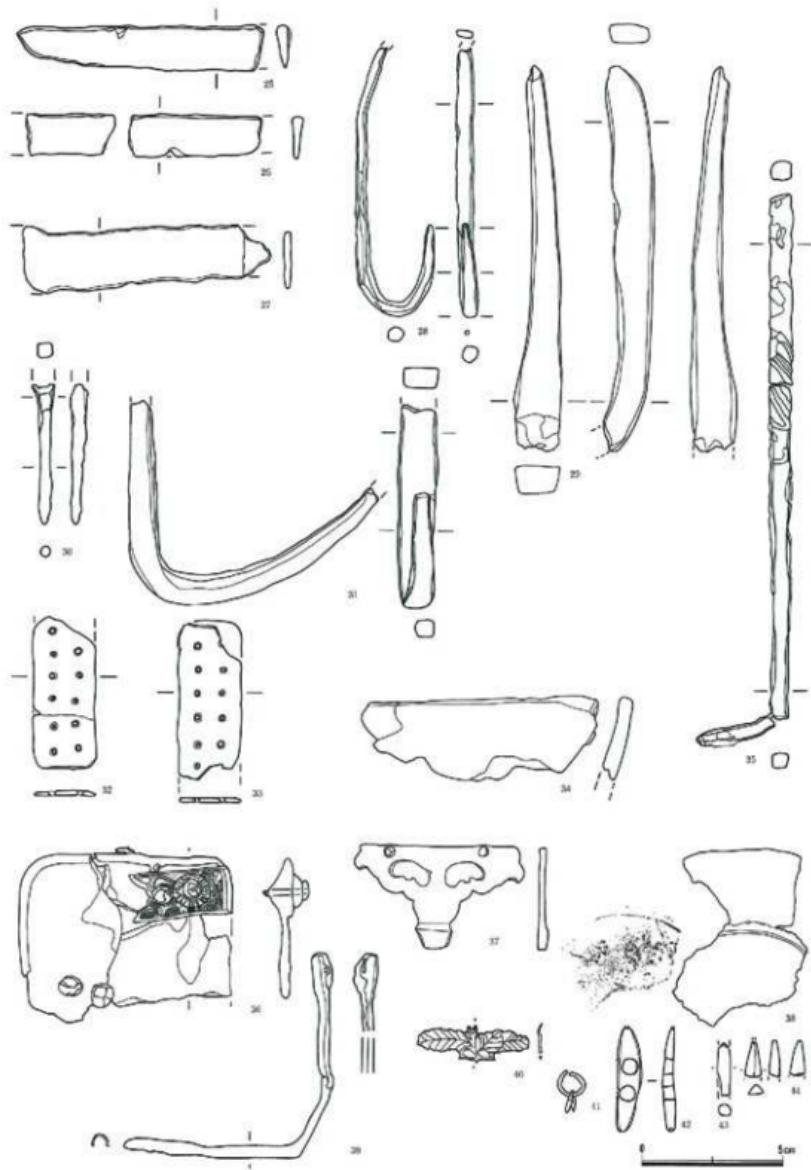
調査区分	遺構名	柵					田										市					合計
		青磁	白磁	塗付	赤絵	網紋	小計	志野・美濃	志野	唐津	小計	高井・折	越前	高井	瀬戸	美濃	唐津	信楽	小計			
		灰	白	黑	白	灰	計	灰地	灰地	白	計	高井	越前	白	瀬戸	美濃	唐津	信楽	小計			
	柵	1	2			3	2			2	5								5			
	塗付	3	12	16			31	29			1	20	51						51			
	環																					
	鏡																					
	香炉																					
	築跡																					
	墳・窓跡																					
	瓦物																					
	円錐	1																		1		
	計	5	12	18			35	21			1	22	57	15					15	72		
	陶	12		16	2		30	3	4			7	37						37			
	瓦	8	20	13	1		42	53		1	2	56	98						98			
	环			1				1												1		
	鏡																					
	香炉																					
	築跡																		9	1		
	墳・窓跡																		3	1		
	瓦物																		4	4		
	その他																					
	計	20	21	29	3		75	56	4	1	2	63	136	12	2				14	150		
	陶	2		2			4	3				3	7							7		
	环																					
	鏡																					
	香炉																					
	築跡																					
	墳・窓跡																					
	瓦物																					
	その他																					
	計	2	2			4	3					3	7							7		
	陶	1				1	1					1	2							2		
	田	1				1	2					2	3							3		
	环																					
	鏡																					
	香炉																					
	築跡																					
	墳・窓跡																					
	瓦物																					
	その他																					
	計	2	2			4	3					3	7							8		
	陶	13		19	2		34	6	4			10	44							44		
	田	13	32	32	1		78	77		3	3	81	150							150		
	环	1				1							1							1		
	鏡																					
	香炉																					
	築跡																					
	墳・窓跡																					
	瓦物																					
	その他																					
	計	1	33	51	3		114	83	4	3	3	91	206	27	2					29	234	



第32図 空塙跡東平坦面出土遺物



第33図 空塚跡・東平坦面出土遺物 (17は空塚覆土)



第34図 空塙跡東平坦面出土遺物

4. 15 L M区(北側トレンチ)試掘調査 (第35図)

(1) 位置概要

御代参道路北側段の下の平坦部で御代参道路南側と同様に空塹A、空塹Bの存在を確認する事を目的とした。尚トレンチの規模は幅3.5m×長さ14mである。

(2) 層序

空塹A

15 L 10区～15 L 15区にかけて確認された。規模幅8.6m、深さ1.4m程である。覆土はセクション及び表10によると I 層は10 Y R% 黄褐～10 Y R% にぶい黄褐シルトをベースにし基盤礫が含まれる。5層に細分された。さらに20cmの厚さのII層の下にIII'A層が堆積する。III'A層は32層に細分され10 Y R% 黄褐～10 Y R% 黄褐シルトをベースに炭化物、基盤礫、ロームブロックが含まれ、やや粗とや密の層がある。53より62までは、やや密である。63以下はしまりが一定していない。御代参道路東側空塹Aに比し、浅く、幅が若干広い。

空塹B

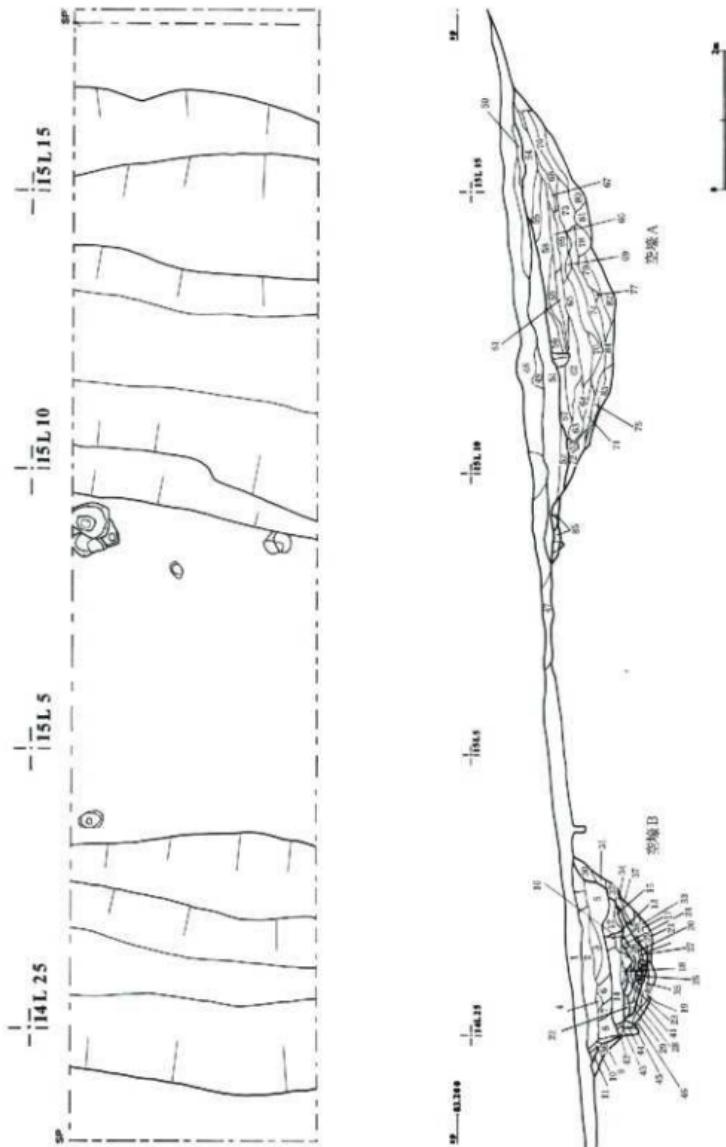
14 L 20区～14 L 25区にかけて確認された。規模は幅3.2m、深さ1m程である。覆土はセクション及び表10によると 10 Y R% にぶい黄褐～10 Y R% 黄褐シルトのI層の下に10 Y R% にぶい黄褐～10 Y R% 明黄褐シルトをベースに炭化物、ロームブロック、基盤礫が含まれる I A層、さらにその下に10 Y R% 黄褐～10 Y R% にぶい黄褐シルトをベースにロームブロック、炭化物が含まれる I B層が

堆積する。I A層、I B層とも10層に細分される。いずれも明治以後の整地層と考えられる。II層は大きく II A層と II B層に分けられる。II A層は10 Y R% にぶい黄褐～10 Y R% 黄褐シルトをベースに O S - a 等が含有される4層に細分された。II B層は10 Y R% にぶい黄褐～10 Y R% にぶい黄褐シルトでやや粘性をもち、やや粗である。以下はIII'B層で10 Y R% 明黄褐～10 Y R% 黄褐シルトで基盤礫との混層であり炭化物等が含まれやや密である。空塹Aと同様御代参道路東側空塹Bに比し浅く、幅が若干広い。尚平面図上空塹Aと空塹B間の平坦部に位置するピットの性格は不明である。次年度の当地区の調査に期するところである。

(3) 出土遺物 (P L. 19-53-69)

青磁、白磁、染付、美濃の碗、皿、盤、越前系のかめ、壺、鉢等が出土している。いずれも小破片であり計39点程である。青磁では盤、稜花皿が出土している。盤は外面口縁部をくの字状に外反させ、端部を上方に引き上げ、内部には幅広の蓮弁文をもつものである。釉調は14 G 7.5 の3 S グレイムの黄である。白磁は端反り口縁の皿等がみられる。染付は碗、皿が出土している。碗では、外面口縁部に2条の團羅が入り梅文の描かれるもの、体部に芭蕉葉文の描かれるもの、皿では葵筋底のものがみられる。美濃では端反り口縁の皿が出土している。また前述の青磁の盤は15世紀末頃のものと推される。これらの示す年代は15世紀末～16世紀中葉である。

(齊藤)



第35図 北側トレンチ平面図、セクション図

表10 15L区トレント空塗A空塗B土層観察表

目次 番号	層 序	B 調		土性	地 成	備 考	
		小区分	細 別				
1	1		10YR N-N	にじい・黄褐色強い	シルト	草相多い	
2	1	A	1	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	草相多く%
3	1	A	2	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	基盤強大5%化物地6%ロームブロック1%
4	1	A	3	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	ロームブロック5%
5	1	A	4	10YR N-N	にじい・黄褐色	シルト	炭化物地基盤強大5%やや粘性あり
6	1	A	5	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	基盤強中・人形足跡
7	1	A	6	10YR N-N	にじい・黄褐色、黄褐色	シルト	ロームブロック10%基盤強大5%
8	1	A	7	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	ロームブロック5%
9	1	A	8	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	草相多量あり
10	1	A	9	10YR N	黄褐色	シルト	基盤強度地4%粘性あり
11	1	A	10	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	ロームブロック3%やや粘性
12	1	B	1	10YR N	黒褐色	シルト	ロームブロック3%やや粘性
13	1	B	2	10YR N-N	にじい・黄褐色	シルト	基盤強度中・大10%ロームブロック3%
14	1	B	3	10YR N	黒褐色	シルト	ロームブロック5%やや粘性
15	1	B	4	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	ロームブロック2.5%粘着土化物10%
16	1	B	5	10YR N	黒褐色	シルト	基盤強度中
17	1	B	6	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	化物地4%軟弱あり
18	1	B	7	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	炭化物地ロームブロック5%
19	1	B	8	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	炭化物地ロームブロック15%
20	1	B	9	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	ロームブロック5%
21	1	B	10	10YR N-N	にじい・黄褐色、黄褐色	シルト	ロームブロック5%、炭化物5%
22	1	B	1	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	基盤強度中・大30%S-S-38%
23	1	B	2	10YR N	黄褐色	粘土質	半硬
24	1	B	3	10YR N	にじい・黄褐色	粘土質	半硬
25	1	B	4	10YR N-N	にじい・黄褐色、黄褐色	粘土質	S-S-2%ロームブロック10%
26	1	B	5	10YR N	にじい・黄褐色	粘土質	S-S-1%
27	1	B	6	10YR N-N	にじい・黄褐色、黒褐色	粘土質	半硬
28	1	B	7	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	S-S-10%
29	1	B	8	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	S-S-10-15%
30	1	B	9	10YR N	黒褐色	シルト	半硬
31	1	B	10	10YR N-N	黒褐色、暗褐色	シルト	半硬
32	1	B	11	10YR N	黒褐色	シルト	半硬
33	1	B	12	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	半硬
34	1	B	13	10YR N	黄褐色	シルト	半硬
35	1	B	14	10YR N-N	にじい・黄褐色、黄褐色	シルト	半硬
36	1	B	15	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	半硬強度中・中15%ロームブロック1%
37	1	B	16	7.5YR N	にじい・黄褐色	シルト	半硬強度中・中15%、S-S-2%
38	1	B	17	10YR N-N	にじい・黄褐色、黄褐色	シルト	半硬強度大5%
39	1	B	18	10YR N	黄褐色	シルト	半硬強度大5%
40	1	B	19	10YR N	にじい・黄褐色	粘土質	半硬
41	1	B	20	10YR N	にじい・黄褐色	粘土質	半硬強度大5%、炭化物5%
42	1		10YR N	にじい・黄褐色	シルト	P1.1度土	
43	1		10YR N	黒褐色	シルト	P1.1度土	
44	1		10YR N	にじい・黄褐色	シルト	半硬	
45	1		10YR N-N	にじい・黄褐色	シルト	半硬	
46	1		10YR N	にじい・黄褐色	シルト	半硬	
47	1		10YR N-N	黒褐色	シルト	半硬強度5%	
48	1		2	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	半硬強度小5%
49	1		3	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	半硬強度5%
50	1		4	10YR N-N	黒褐色、にじい・黄褐色	シルト	半硬強度小5%
51	1		5	10YR N	黒褐色	シルト	半硬強度小5%
52	1		6	10YR N	黒褐色	シルト	半硬
53	1	A	1	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	半硬
54	1	A	2	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	半硬強度小5%
55	1	A	3	10YR N-N	にじい・黄褐色	シルト	半硬強度小-中5%
56	1	A	4	10YR N	暗褐色	シルト	半硬強度小5%
57	1	A	5	10YR N-N	にじい・黄褐色	シルト	ロームブロック、基盤強度
58	1	A	6	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	半硬強度小-中5%
59	1	A	7	10YR N-N	にじい・黄褐色、黄褐色	シルト	半硬強度小-中5%
60	1	A	8	10YR N-N	にじい・黄褐色、黄褐色	シルト	半硬強度小5%
61	1	A	9	10YR N	黄褐色	シルト	半硬強度小-中5%
62	1	A	10	10YR N	にじい・黄褐色	シルト	化物5%半硬強度5%

表10 15L区トレンチ空塙A空塙B土層観察表(2)

番号	層序	色	西	土性	構成	備考	
6.2	B'	A	II	10YR 8/6	にじい黄褐色	シルト 炭化物1%、カルボン酸2%	空塙A覆土
6.4	B'	A	12	10YR 8/6	にじい黄褐色	シルト	空塙A覆土
6.5	B'	A	13	10YR 8/6	明黄褐色	シルト 基盤帶10%炭化物1%、シルト混層少々	空塙A覆土
6.6	B'	A	14	10YR 8/6-N	にじい黄褐色	シルト 基盤帶1%炭化物1%	やや細 空塙A覆土
6.7	B'	A	15	10YR 8/6	黄褐色	シルト 基盤帶1%炭化物1%	やや細 空塙A覆土
6.8	B'	A	16	10YR 8/6	黄褐色	シルト 基盤帶薄少々	空塙A覆土
6.9	B'	A	17	10YR 8/6	褐色	シルト 炭化物2%、基盤帶10%	空塙A覆土
7.0	B'	A	18	10YR 8/6-N	褐色	シルト 炭化物2%、基盤帶10%	やや密 空塙A覆土
7.1	B'	A	19	10YR 8/6	黄褐色	シルト	やや粗 空塙A覆土
7.2	B'	A	20				空塙A覆土
7.3	B'	A	21	10YR 8/6	黄褐色	シルト 基盤帶10%	やや粗 空塙A覆土
7.4	B'	A	22	10YR 8/6	にじい黄褐色	シルト ロームアリーナ2%炭化物2%基盤帶中-太3%	やや粗 空塙A覆土
7.5	B'	A	23	10YR 8/6	黄褐色	シルト 基盤帶30-35%	やや密 空塙A覆土
7.6	B'	A	24	10YR 8/6	黄褐色	シルト 基盤帶20%	空 空塙A覆土
7.7	B'	A	25	10YR 8/6	褐色	シルト 基盤帶20%	空塙A覆土
7.8	B'	A	26	10YR 8/6	褐色	シルト 基盤帶20%	空塙A覆土
7.9	B'	A	27	10YR 8/6	灰褐色	シルト 基盤帶20%、炭化物5%	空 空塙A覆土
8.0	B'	A	28	10YR 8/6	灰褐色	シルト 基盤帶20%	空 空塙A覆土
8.1	B'	A	29	10YR 8/6	黄褐色	シルト 基盤帶20%、炭化物2%	空 空塙A覆土
8.2	B'	A	30				空塙A覆土
8.3	B'	A	31	10YR 8/6-N	灰褐色、褐色	シルト 基盤帶5-10%	やや密 空塙A覆土
8.4	B'	A	32	10YR 8/6	褐色	シルト 基盤帶5-10%、薄30%	やや密 空塙A覆土
8.5	B'	A		10YR 8/6	黄褐色	シルト	やや密 空塙A覆土

III 小 括

第二平坦面の端部に数条の欄列が検出されたが時間差を示すもので本来一条で構成されると推される。巾20、深さ50cm前後の溝を掘りそこに径10cm前後の丸柱が埋設される。柱間は4~17cmとややバラつくが比較的密に立てられる。柱の径に大小あるが配置上の規則性は見い出しえない。62年度調査区(16J25)で欄列の内側に近接して柱穴が検出され、欄と一体の施設を推測した。欄手の欄列の外側にも小柱穴列が検出されており(本概報V)、斜面肩に柱穴だけが確認されたものも、崩落による上部の流失なのか検討が必要である。こうした前後の付帯施設、遺構の追求が不充分なままだ当地区の調査を終結したことは大きな課題を残すこととなった。

端部の欄列は南西宮ノ沢斜面上に屬する。第二平坦面の斜面肩を巡って第三平坦面、欄手の欄列に連続すると思われる。第三平坦面の欄列(第8~10号地割面一本概報V)の柱間は広く離れており、場所により異なるようである。

又、深さ50cm前後の溝底に立てられた欄の地上部の高さはどれぐらいであろうか、「築城記」^{注1}には堀の高さ5尺2寸、欄は6尺余、山城は低くとある。又、欄は1間の内に5本ほど柱を立て人が通らなくするとあるが、検出された柱穴は堀に

近い様子を示している。

第一平坦面の調査では目的とした二条の塙の新旧を直接明らかにする手懸りは得られなかった。

空塙Aを跨ぐ4対の柱穴はかなり大きな構造物を推測させるが、その実体は明らかでない。

塙と塙の間の土坡群のうち1基は明らかに墓塙であり他の土塙も類似の形状をしており、同種造構かもしだれない。

空塙AとBの覆土の堆積は随分と違っている。III'Aの厚い層中に人为的再堆積はみられず、上段からの崩落、流入と考えられる。逆にIII'Bの堆積は極めて薄く、OS-a(1741年)と把えている火山灰を含むII層堆積後、短期間に埋没している。

塙の東の平坦面は、第二平坦面の端部から空塙Bの東2m程のところに緩やかに統一斜面を削り、塙を掘り上げた土を整地して造成したものであろう。從って平坦面上の遺構と少なくとも空塙Aとは同時に存在したと思われる。

空塙BがAに先行して設けられた可能性もあるが、B西に近接する小柱穴列等はBに付帯したものと解され、他方その掘り込み面を更に高く求めることもむづかしい。又、東平坦面の遺構の軸線は殆どがBに平行していることもBと平坦面上の遺構の同時性を伺わせる。他方Bに跨がり、B

によって欠失した遺構の検出されていないことはその逆の可能性を少くしている。

蛇足乍ら A に跨る大形の柱穴、土壇等は少くとも A 以前に遡るものではない。

盛り土整形以前の遺構は旧地表面に残されている可能性があるが、その面までの掘り下げは殆んど行ていらない。15J 5 区にトレンチを設け、巾 1 m 程旧地表面まで掘り下げたが、柱穴その他の遺構は認められなかった。

現在得られた資料をもとに遺構の形成時期を推測したところであるが、空塙跡北半、中央部の調査時に更に留意し検討したと思う。

本年度調査区出土の陶磁器は 1,300 点弱(但し 15 L 区トレンチのものは除く)であるが、そのうち 1,000 点弱は、櫛列周辺、及び空塙覆土の遺物である。空塙覆土の遺物は基本的に第二平坦面からの流れ込みと推され、塙東平坦面からの出土陶磁器は 234 点余となる。

櫛列周辺の遺物には勝山館跡で出土した殆どの遺物が認められている。茶臼、茶釜?、鏡等は、出土例の少いものであり留意される。他方陶錘、羽口、鉄津等もあり、種々の様相が推される。

塙東の小平坦面からは 230 点余の陶磁器が出土した。碗の 4 倍程の皿と、碗皿の 8 分の 1 程の擂鉢類類で構成される。香炉、袋物等がなく、碗、皿中に占める鉄軸類が 2% 弱と櫛列周辺の 5% 弱に比べかなり少い。一方碗皿中の舶載品の比は 55% 余で僅かではあるが少なくなる。これらの組み合せは碗皿を中心とする日常食器類のようである。

これに対し鉄製品、鉄津が 3 kg 余出土し、各々の 2 分の 1 前後から一定の範囲に集中して分布する。又、武具等の銅製品も多く見られる。

この小平坦面で検出された遺構は掲立柱の建物跡と竪穴遺構である。

1 ~ 7 号の掲立柱建物のうち、柱穴にまとまりを見たのは 1、3 ~ 6 号であり、3 ~ 6 号の柱筋はほぼ同一方向となる。又 3 基の竪穴もこれらと同一の軸を持つ。掲立柱建物は 3 × 3 間の長方形を基本とするものが多い。第 3 号建物跡としたものは柱間も等間と最も整った状態を示している。

3 ~ 6 号の軸線を同じくする建物跡を同時期と仮定した時、3 間 × 3 間の建物が 3 棟同時にあり、1 棟だけ長軸を 90° 異にするとは何を意味するのであろうか。3 × 3 間という建物自体、その構

造をどう考えるべきなのか。わからないことばかりである。又、竪穴の果す機能がこの平坦面に不可欠のものであるとすれば、35 号竪穴を更に同一時期のものと想定し得るところである。只、鉄津等の出土は細部は未検討であるが第 6 号建物跡に共通する感じがあり、或は竪穴の機能がこれに移されているとも推されるところである。この時 2 号とした柱列が建物として併存したかもしれない。竪穴遺構が 3 基検出され、少なくとも二時期にわたると推されるのに対し掲立柱の建物に明瞭な建て替えの跡を検出し得なかつたことは、こうした推測を消極的のことになっている。

こうした建物跡の推移、組み合せ等を検討するためには、個々の遺構に対する、共伴遺物の決定その他の分析作業が必要なことはいうまでもない。従って上述の内容は現時点にあっては單なる思いつきの範囲を出ないものである。

出土遺物から見る本小平坦面は侍屋敷跡よりは陶磁器の量が豊かであり、第二、第三平坦面に比べて単純な組成を示し、銀造刹片等を検出する点は侍屋敷跡とも共通するが、鉄製品等の量は第二、第三平坦面に近く、諸種の銅製品出土は、ところによっては、第二、第三平坦面を凌ぐことになると推される。

掲立柱の建物跡が検出されず、竪穴遺構が存在することは、第二、第三平坦面に通ずる、館主体部に共通の特徴とすることができるようである。

しかし、これと伴うと思われる掲立柱の建物跡は共通した、比較的単純な構成を示しているが、その構造は今少し明らかでないようである。

尚、官ノ沢側へ切り落とされた空塙 A が二手に分れ、一は西へ第二平坦面南端斜面下に沿うようであることは全く予想外の事であった。殊に後者の先行きは空塙 B との関係や、本平坦面南端を一段低く東へ下る道路跡が南から西へと回り、侍屋敷へ到る道として連なっているものと推されるところから、この道との関係等について更に検討すべき問題点を提示するところとなった。

これらの課題を踏まえ 15L 区トレンチで確認した北半の空塙等の遺構の調査を次年度に実施する所存である。

(松崎)

註) 本書は鈴木亘先生のご高配により実見することができた。記して感謝申し上げたい。

表11 陶磁器集計表

調査 区分 等級	東					西					合計						
	青磁	白磁	染付	手绘	折繪	小計	瀬戸	美濃	志野	吉津	小野	哥窯・針織	施前	施后	青津	青物	合計
病	20	3	17	2		42	20	17			37	79					79
風	13	45	72			131	95	1		1	97	228					228
河																	
利																	
神																	
井																	
田																	
辺																	
計	33	49	89	2		173	116	19		1	136	309	73	7	1		399
病	13	5	56	1		85	12	21			33	118					118
風	10	137	88	3		238	155	1		1	157	395					395
河		4	1			5						5					5
利						2						2					2
神																	
井																	
田																	
辺																	
計	25	146	155	4		330	167	22		1	190	520	81	1	1		693
病	13		19	2		34	6	4			10	44					44
風	13	32	32	1		78	77		1	3	81	159					159
河			1			3						1					1
利																	
神																	
井																	
田																	
辺																	
計	27	33	51	3		114	83	4	1	3	91	205	27	2			234
病	1		7			8	2				2	10					19
風	1	9	4			14	21				21	35					35
河																	
利																	
神																	
井																	
田																	
辺																	
計	2	9	11			22	23				23	45	3				48
病									1		1	1					1
風												4					4
河																	
利																	
神																	
井																	
田																	
辺																	
計	2	2				4	1			1	5	2					7
病	48	8	109	5		170	40	43			83	253					253
風	36	226	198	4		464	348	2	1	5	356	820					820
河		5	1			6						6					6
利																	
神																	
井																	
田																	
辺																	
計	87	239	308	9		643	389	46	1	5	441	1084	186	10	2		1982

IV 保存処理

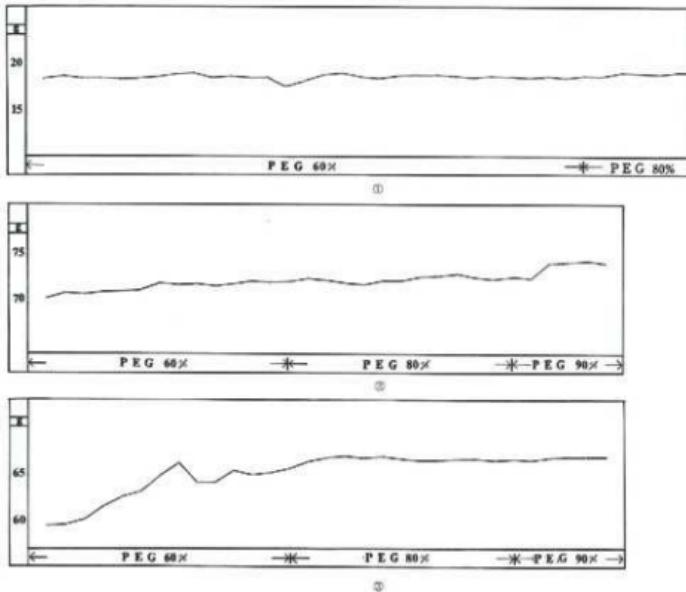
1. 木製品

今年度は箸、折敷等の生活用具等1,015点、昭和58年度用水施設跡より出土の木柵を処理対象として実施した。生活用具等は昨年度まで常温状態でPEG40%含浸中のものである。今年度は尚未と同様60%、80%、90%の順に標準液温65°Cの状態にてPEG含浸を行った。第36図2・3は恒温水槽内の木製品重量変化グラフである。尚重量測定は恒温水槽内の任意に抽出した木製品である。尚2は含水率の高い木製品、3は含水率が低くやせらかにした木製品である。2では59gから67gへとその増加率は約1.13倍である。尚80%以降重量に殆んど変化は見られない。3では70gから74gへとその増加率は1.06倍となる。木柵は一昨年度まで常温状態で20%、40%含浸をそれぞれ1年、昨年度標準液温65°Cの恒温状態にて1年間の60%

含浸を経てきている。今年度は60%含浸に引き続き80%含浸を行った。尚木柵が4.9mのため水槽が約6mと大きく、PEG溶液内の水分蒸発が激しいため2~3週間に一度水のつぎ足しを行なった。尚重量測定用木製品は木柵の小破片にて行なった。第36図1によると18.4gから20gへとその増加率は約1.09倍であった。尚木製品重量測定、PEG濃度測定は1週間毎である。生活用具等PEG処理を完了した遺物は昨年同様エタノールをかけ軽いブラッシングをし表面に余分に付着しているPEGを除去した。

2. 鉄製品

今年度は600点の処理を行なった。從来通り錯除去、メタノールによる脱水、バラロイドN A D-10のナフサ溶液20%、30%による減圧含浸を行なった。(齊藤)



第36図 木製品重量変化グラフ

V 「勝山館跡出土炭化種子の識別」

松谷 晓子

資料は、ビニール袋に入れられた炭化種子で、塊をなすものと、遊離した種子の二通りである。

1. 方法

一点ずつシャーレに移し、実体顕微鏡で外形を観察し、分類した。一部の種子はさらに走査型電子顕微鏡で微細構造を観察した。

2. 実体顕微鏡での観察結果

塊をなしているものに大きな粒と小さな粒があり、大きな方は、イネ科に特徴的な乳頭突起が認められるものがあり、イネと考えられる。小さな方は、イネ科の雜穀と考えられる。イネ科雜穀には、ヒエ、アワ、キビなどがある。この小さな雜穀の識別は、炭化粒の表面に外頸が残っている場合に可能である。実体顕微鏡下で横方向の隆起が認められる場合にはアワの仲間、表面が光沢があり、横方向の隆起が認められない場合にはキビかヒエの仲間という見当がつけられる。しかし、走査型電子顕微鏡で表皮細胞を観察し、その形態の相違を併用した方がより明確になる。塊をなしていない、イネかイネ科雜穀か不明のものもあった。塊をなさない種子ではイネ、イネ科雜穀の他に、外形から小豆、ソバ、なども識別された。小さな円形の種子が多いのは、アブラナ科の種子かと思われる。もっと大きなものにクルミの殻（内果皮）の半欠けがあり、小さな破片になったものもあった。キハダと記された種子は、キハダの果実で中に種子が入っていた。他にヤマブドウの種子が認められた。また、スギナ類の塊状の胚藏根や炭化材の破片も混在していた。前者は炭化していないので現在のものと混入と思われる。

3. 走査型電子顕微鏡によるイネ科雜穀の識別

日本で古くから栽培された主なイネ科雜穀は、ヒエ、アワ、キビの三種であるが、粒が1-2ミリと小さいため外形からの識別だけではなく、表皮細胞の形態による差異を利用する方法が有効である（松谷 1988）。勝山館跡から出土したイネ科雜穀は比較的多く、塊をなすものもあれば、遊離した粒もあるが、頗る残存しているものについて観察をしたところ、表皮細胞の形態はキビの細胞に似ており、ヒエやアワと思われる構造は見いだ

すことが出来なかった。全部について実施する時間はなかったので断定はできないが、実体顕微鏡での観察結果を総合すると、キビが主体と思われる。

アブラナ科の種子については、笠原安夫氏によって縄文時代からの報告例（笠原 1985など）がふえており注目されるが、今回出土した炭化種子は保存状態もあまりよくなくて、種類までは判明できなかったが、1ミリくらいの小形種子と3ミリくらいの種子と大きさに二種類あり、前者をアブラナ科A、後者をアブラナ科Bとした。

4.まとめ

識別された植物は、栽培植物と野生利用植物に二分される。

野生食用植物では、クルミとヤマブドウがあり、これらは食用に利用された残さであろう。ほかに種名も用途も不明のものがある。

栽培植物は、粗付イネが多い。塊をなしているものが多い。キビと考えられる雜穀も頗る残存しており、未使用であろう。イネとキビは同じ資料に混在している場合があった。ソバはあまり多くないが、アズキと同定された資料は6点あり量も比較的まとまっている。アブラナ科と思われる種子も多く、大きさに二種類あるが、保存状態はあまりよくない。大麦や小麦が全く見いだされなかたのは、意外であった。これまでに観察したことのある真壁城（松谷1983a）、葛西城（1983b）、岐阜城（松谷印刷中）などでは、大麦が多く認められたとの対照的である。

上記の炭化種子の出土した地点は様々で、貝塚（遺物廃棄場所）周辺、館内主要部の建物跡内、正面空堀の外側（第一平坦面-63年度調査区）、伝侍屋敷跡・倉庫と推定される建物群などにわけられるとのことであるが、遺構ごとに若干の違いが認められ、館主体部では、イネ、キビ、ソバ、小豆の主要食用作物とクルミ、キハダが見いだされたのに対し、伝侍屋敷跡では、アブラナ科とヤマブドウしか見いだされず、正面空堀外（第一平坦面）には、アブラナ科、イネ、キビ、ヤマブドウ、マメ類など種々様々な種子が見いだされた。

倉庫跡に相当する資料は見いだされないので言及できない。

文献

笠原安夫 1985 阿曾田遺跡出土炭化種子の同定。岐阜市中津川市阿曾田遺跡発掘調査報告書、中津川市教育委員会。

松谷暁子 1983 a 真壁城跡出土の炭化物について。真壁城跡一中世真壁の生活を探るー、真壁町教育委員会。

松谷暁子 1983 b 岩西城址出土大麦の走査電子顕微鏡による観察。岩西城、岩西城跡調査会。

松谷暁子 1988 電子顕微鏡でみる縄文時代の植物。畑作文化の誕生ー縄文農耕論へのアプローチ、日本放送出版協会。

松谷暁子(印刷中) 千葉県出土穀物の同定。岐阜市教育委員会。

VII 環境整備工事

昭和63年度の整備工事は正面第一平坦面と第二平坦面の5m余の段差を有する斜面とそれに続く空塹跡の法面保護の為の芝張りと昭和62年8月、史跡の範囲に追加指定された夷王山墳墓群の説明板設置を行った。

〈芝張り〉

構造確認調査によって検出した造構面に10cmの盛土を行い、その上に芝張りを実施することとした。第一平坦面と第二平坦面との間の段及び空塹跡の側壁は急傾斜面となっており、盛り土をおさえる土留め工を行うこととした。工事は巾15cm、厚さ3cm、長さ1.8mの松板を50cm間隔で、径1cm、長さ30cmの鉄筋を15cm打込んで固定させ、土を入れる方法によった。

〈夷王山墳墓群説明板〉

説明板はバーナー仕上げをした黒ミカゲ石にヘアライン仕上げのステンレス名板を取り付けた。名板には夷王山を取り巻くVI地区の墳墓群の分布図と説明文をエッチング処理により印刷した。

夷王山墳墓群

勝山館の背後から夷王山の麓のあたりに、六地区に分れて600基余りの墓がある。大きさは2×1.8m、高さ40cm程の円形で、大きなものは7m程のものもある。

火葬した骨を箱に納めて埋めたり、遺体をそのまま長方形の箱に納め土葬にし、土や石を高く積んで墓を作っている。宋銭や明鏡の納められることが多いが、大きな墓には漆塗りの盃、硯、玉なども納められていた。このように埋葬の仕方に違いはあるが、いずれも仏教を信仰していた人達の墓と思われる。

これらの墳墓群には、勝山館を築き道南和人社会を確立した武田信広とその一族、更には勝山館を中心に中世の上ノ国を支えた多くの人達が眠っていると思われる。



第37図 説明板詳細図

VII まとめ

勝山館跡の主体部は大きな三段の平坦面からなっている。一段目と二段目の段差は5m余と最も大きい。第一の平坦面（第一平坦面）南東半には昭和30年代の後半に杉などが植樹され、旧状が判らなくなっていた。これらを除去し景観を復す為の仮整備を行ったところ、館の正面が立体的に姿を現わし、端らしい門みまで見つかった。

62年度にトレーナーを設定し遺構の確認を行ったところ、二条の空塹跡が検出され、第二平坦面の端部に柵列の設けられることが判明した。

63年度はこの柵列と空塹跡、更にその北東の小平坦部の遺構を明らかにする確認調査を行った。

柵列跡は溝の中に丸太を密に立て並べたもので数次の造り替えが行われていることが判った。柵の直近に補強その他の関連施設も予測されていたが、充分調査できなかった。

第一平坦面と第二平坦面の5m余の段差は人工的に斜面を切り取ってつくられたものであり、その下に3m弱、空塹Aが掘り下げられていたことが判った。このAの更に外側に2m弱の深さのBがつくられている。又切り取られ、掘り上げられた土を前面に盛土・整地して第一平坦面が作られていると推測できた。

5m余の段差をもって造り出された第二平坦面と直下の空塹Aは、そこから生じた堆土で整地された前面の第一平坦面と併行すると推測することができる。

一方、第一平坦面の最も塹に近い小平坦部で検出された建物跡の軸線と空塹Bの軸線がほぼ平行していることは、この両者の同時性を推測させる。空塹Bの軸線に併せて小平坦部をBの外側に造成するのは余り効率的ではない。Bが古い場合も新しい場合も、小平坦部内の建物跡がB側に広がっている様子は見られない。最大巾4m弱のBの真中からAの間に建物が建てられた可能性は少なく、5m余の段、空塹A・B、前面の小平坦部はほぼ同時に存在していたと推される。

これらの遺構が同時に形成されるには、縦密な計画と組織的な土木工事が実施できる体制が備わっていなければならぬであろう。

これらの遺構の形成された時期についての確証

はないが、遺構面からの遺物の示す年代は15世紀末～16世紀末と館の存続した初期から廃絶期と推される間を示している。又、小平坦部の竪穴遺構は重複に近いものもあり、建て替えが行われていると思われるが、掘立柱建物跡には明確な建て替えの跡は確認できなかった。

空塹Aの北東前面には約100m²の空間がある。そこに空塹Bを設けた結果前方の平坦部は60m程に縮小される。しかし一方、AとBの間は3～4mと狭く館を攻撃する寄手の勢力はBの外側に殆どが止められることになりBを越えてくる攻撃を薄いものにする効果があるかと推される。

各遺構の性格については遺物整理等の途中であり明確にすることはできない。

塹と塹の間に土塙墓が設けられていたが、館の後方に600基余からなる墳墓群があり、一定地域が墓域として画されているかと推されていたところであり、この発見は新たな問題点となった。

空塹Aを跨ぐ4対一組の大形の柱穴の性格は、中央部での塹を渡る施設等の調査と併せ検討することとしたい。

塹の北東小平坦部で掘立柱と竪穴の建物跡が検出された。掘立柱の建物跡は平面形が3間×3間という特徴を示しているが、建物としての構造は良くわからない。竪穴のうち1基は焼失家屋で炭化材が良好に残存している。鈴木亘先生によれば、床張りの建物であろうとのことであり、壁や柱なども明らかに出来そうである。

この小平坦部から羽口や鉄滓が出土した。從来羽口の完形品乃至、大型破片や椀形滓などはその殆んどが館後方の貝塚及びその周辺から出土しており、館の内部からはあまり出土していない。他の出土遺物、竪穴遺構との共伴関係等の整理が進めばこの小区画の場を考える有力な資料となることができるであろう。

竪穴遺構があり、柱穴の建物がないことは伝侍屋敷跡よりは館主体部に近いが、掘立柱建物跡は独特のものでもあります。

碗、皿、擂鉢を中心とする陶器の質と量は、伝侍屋敷跡よりは豊かであるが、第二、第三平坦面の館主体部に比べると見劣りがするが鐵治関連遺

物を多く含むという概その特徴を指摘することができるであろう。

勝山館跡の焼土層等から炭化種子を採集し、紹介してきた。

東京大学総合資料館の松谷曉子先生にこれらの資料の顕微鏡等による鑑定をお願いし、玉稿を頂戴することができました。松谷先生には大変お忙しい中無理にお願い申し上げましたがご快諾を賜わり、心から御礼申し上げます。

コメ、ソバ、キビ、マメ等の食料が明らかになった。從米アワ?として紹介してきたものはキビの誤りであった。又、伝侍屋敷跡でコメを食料としなかったとは出来ないが、第一平坦面、第二平坦面、伝侍屋敷跡の各々で検出された種子類が違った内容を示し、上述の、遺構や他の遺物との比較と奇妙に符合しているのは大変興味のある結果である。

環境整備工事は文化庁記念物課の御指導で、掘り上げ後の空塙、段斜面の保護の為張芝工事を行った。これにより、法面の崩落が防がれこととなつた。又、62年8月追加指定となった夷王山墳墓群の説明板を設置した。

勝山館跡の歴史的な位置付けを明確にすべく朝尾直弘、網野善彦、石井進、桜森進、仲野浩の諸先生を上ノ国町文化財保護審議会特別委員・勝山館跡調査研究専門員としてお迎えし、現地調査と御指導を頂戴することができた。

從来、筆者等は充分な資料の分析も経ず、様々に憶説を述べ勝山館跡を喧伝してきたが、今後學問的に検討を行い性格を究明する道が開かれた事は誠に有難い事である。

昭和54年この事業が着手され今年で10年を経過した。当初10年計画で開始したことからすると最終年度になっている筈であった。

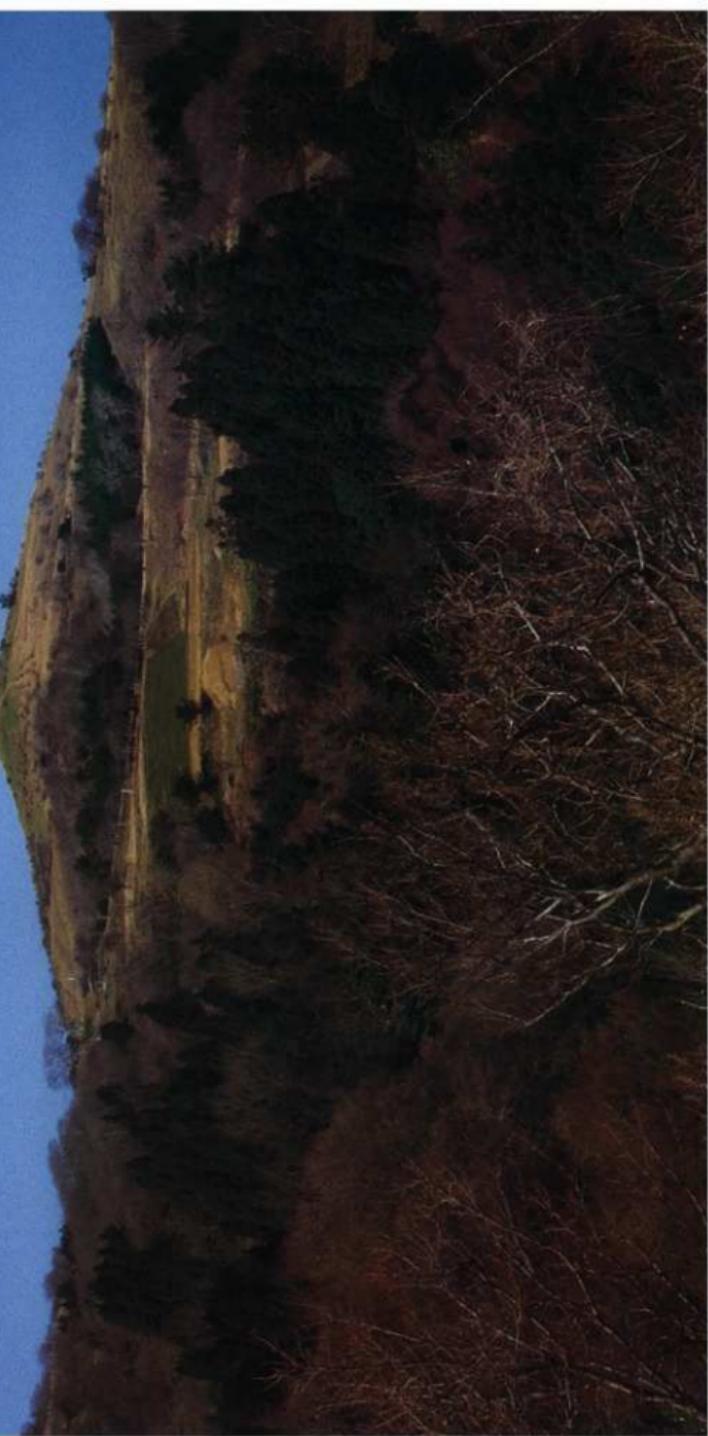
1473年の館神八幡宮の創祀から1514年福山（松前）遷都の40年程、それも和人社会の基礎固めの頃の小規模なものとの予想は全くのはずれ、膨大な遺物量とその内容は、館の性格を根本から考え直させるものであった。又その期間も16世紀末葉にまで亘る長いものとなり、地区毎に種々の遺構が形成されている様子が窺われてきた。

この10年間に出土した遺物は20,000点を超え、遺構も多数検出されている。これらの資料を一日も早く整理、解明する事が目下の急務である。徒らにあて推量を繰り返す愚を脱し、確實な資料を提示出来るよう努力をする所存である。

一層のご叱正とご教導をお願い申し上げたい。

(松崎)

図 版





調査区全景（柵列跡・空塙跡・建物跡一南から）



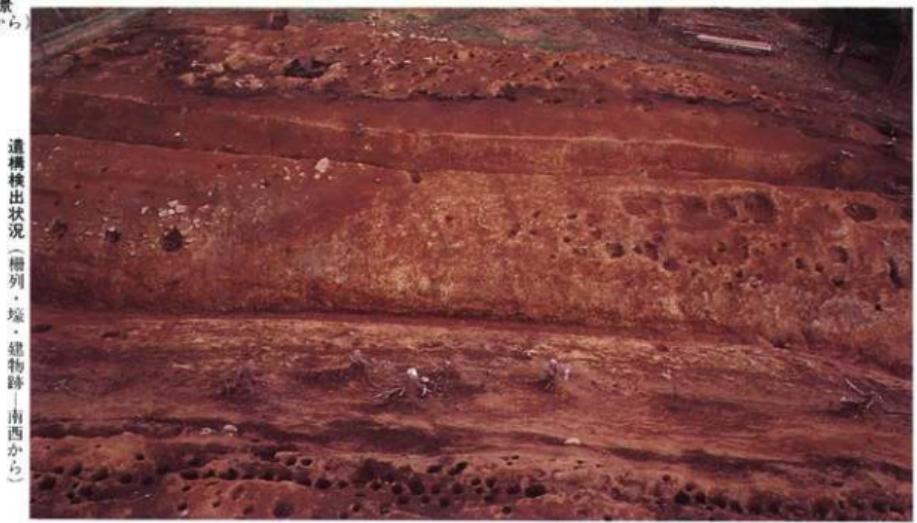
造構整備状況（空塙跡芝張）



査区全景
(北西から)

P.L. 3

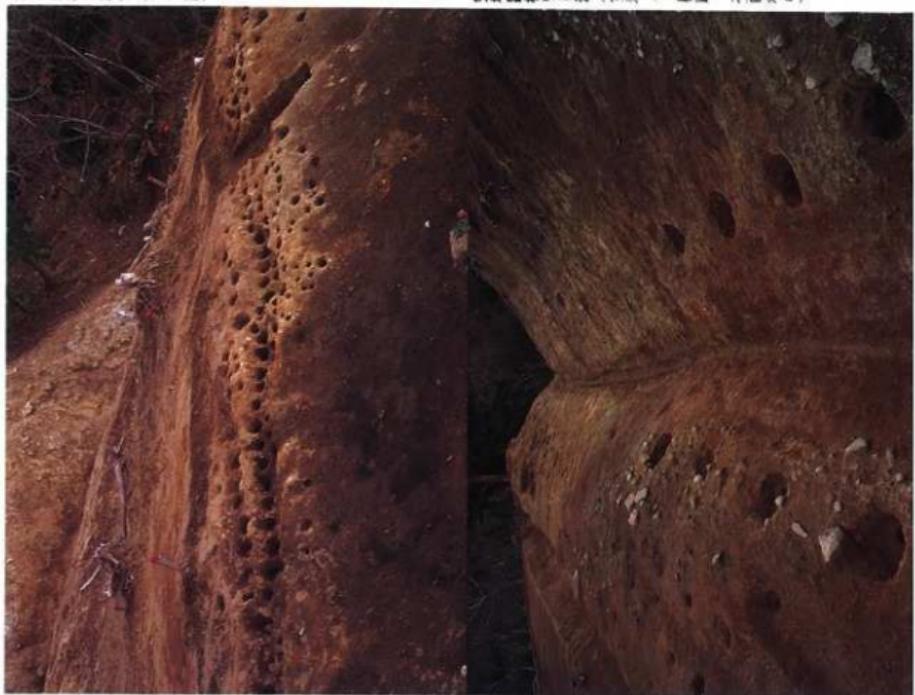
調査状況



遺構検出状況
(樹列・塙・建物跡—南西から)



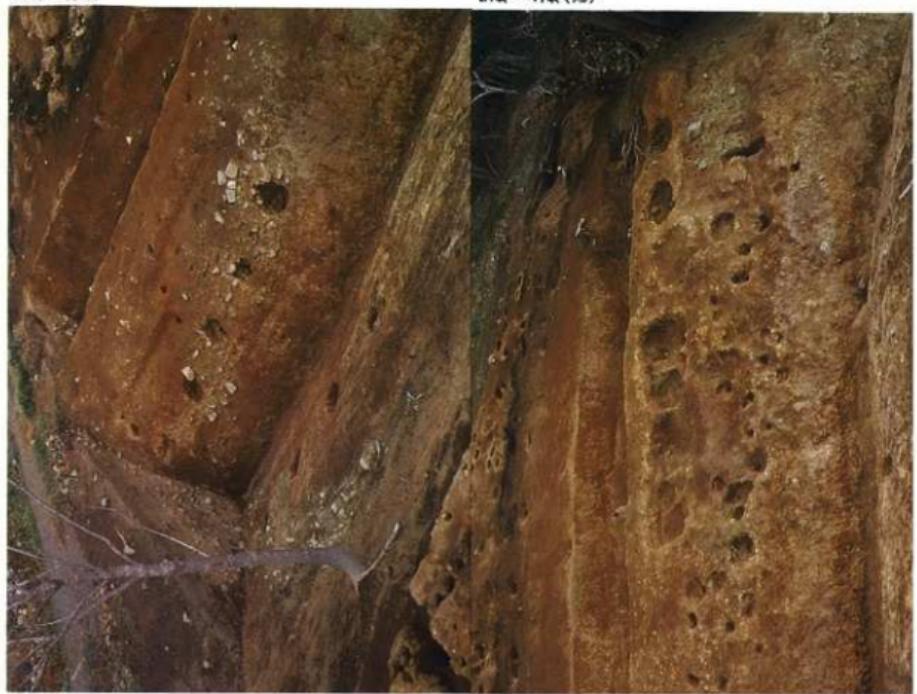
遺構検出状況
(建物・塙跡—北東から)



空隙詰株出状況（空隙B・北西から）

空隙詰株出状況（北西から）





土壤 鉛

壁穴 鉛



標列跡西端



空塘跡 A



空塘跡 B



空塘跡 C



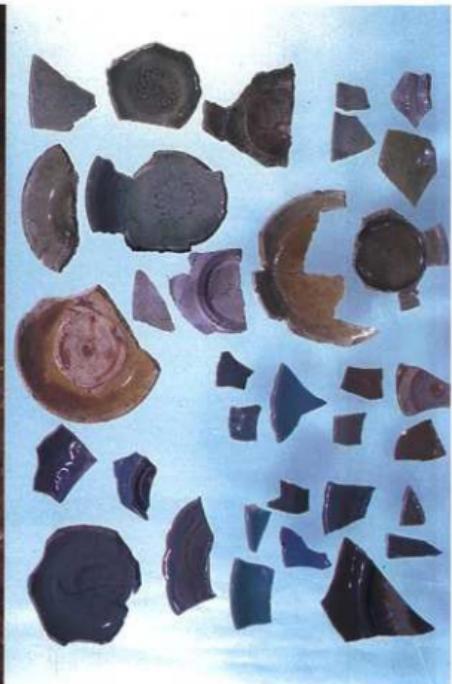
銅鏡出土狀況（燒東平粗面）

出土陶磁器（青磁・米德）

P.L. 7
發遣仕庄



出土陶磁器（朱付面）



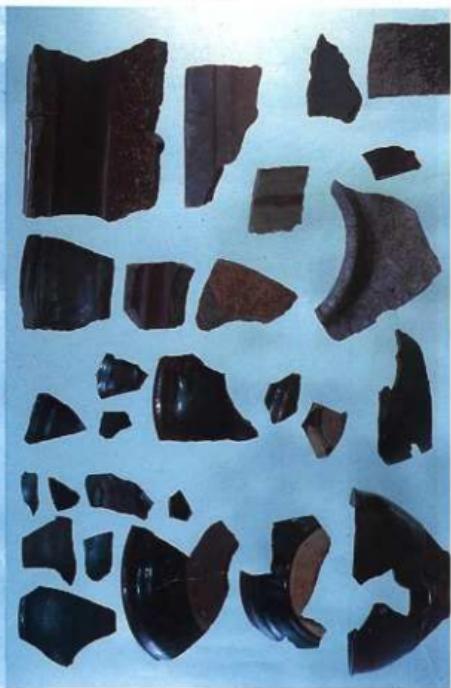
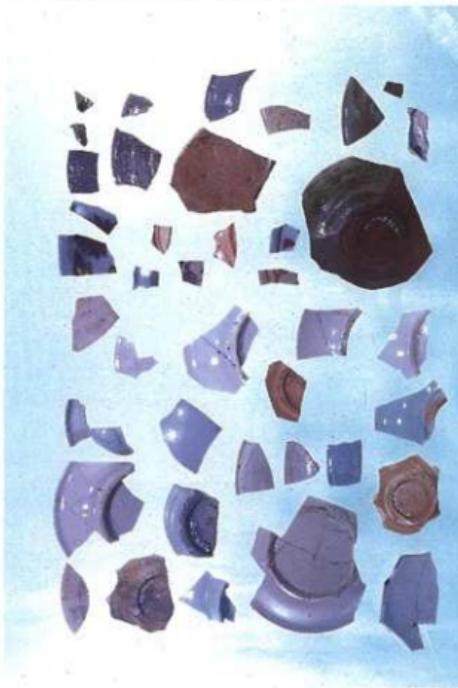
出土陶磁器（朱付面）



出土陶器残片（白底·赤绘·磨光·芯部）

出土陶器残片（米黄底绘·施面）

P L. 8
出土遺物



出土金属器品（小件·残·其他）

出土木器品（干漆·漆地）





倒壊・空堀跡全景（南西から）



倒壊・堆・建物跡（西北から）





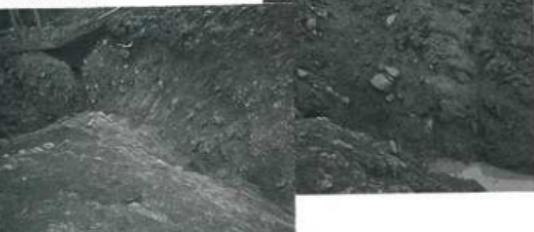
空塹跡・土塙 (南東から)

空塹跡南東端

空塹柱跡



空塹跡南東端



土塙墓



土塙墓



建物跡全景（南西から）



建物跡全景（北東から）



35号竪穴



37号竪穴炭化材（出入口部）



37号竪穴炭化材（柱・根太？）



37号竪穴遺物出土状況（獸骨）



37号竪穴遺物出土状況





空塹跡張芝法面保護（北西から）



空塹跡張芝法面保護（南から）

空塹跡張芝法面保護（南東から）↑



空塹跡張芝法面保護（南東端）



夷王山墳墓群説明板



夷王山墳墓群説明板設置状況



鉄・銅出土状況



銅鏡出土状況



美濃皿出土状況

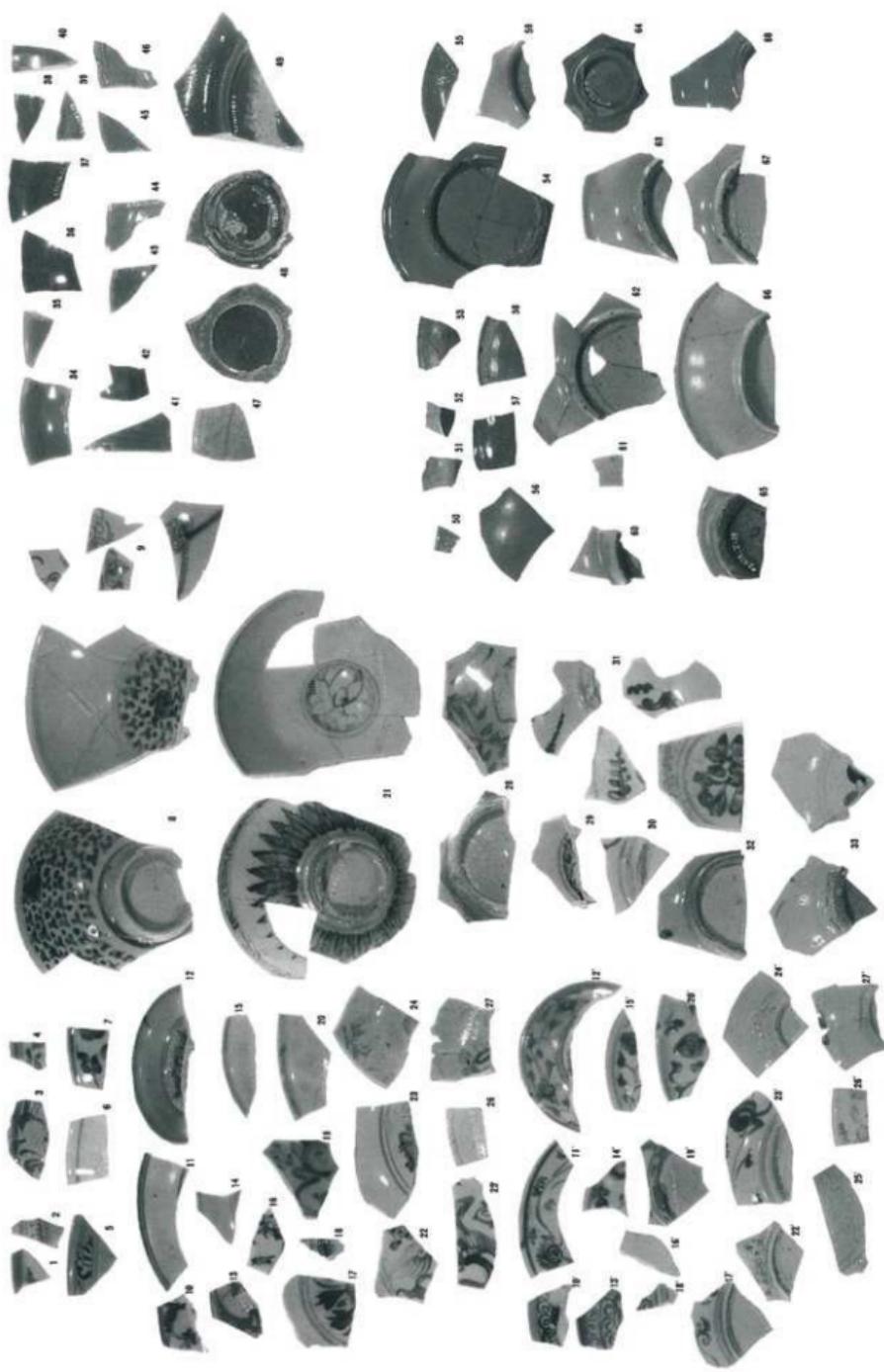


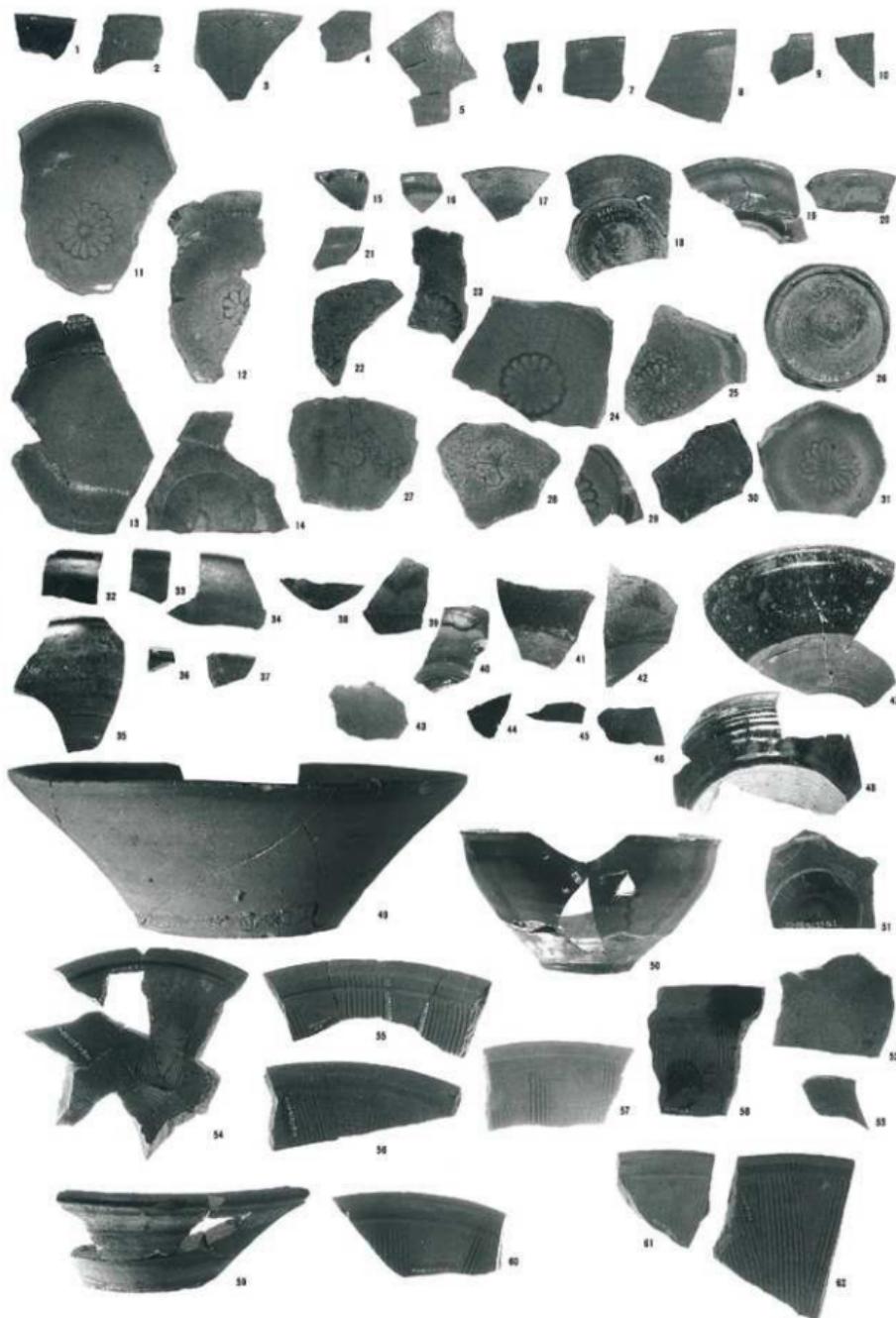
木製品出土状況（下駄・折敷）



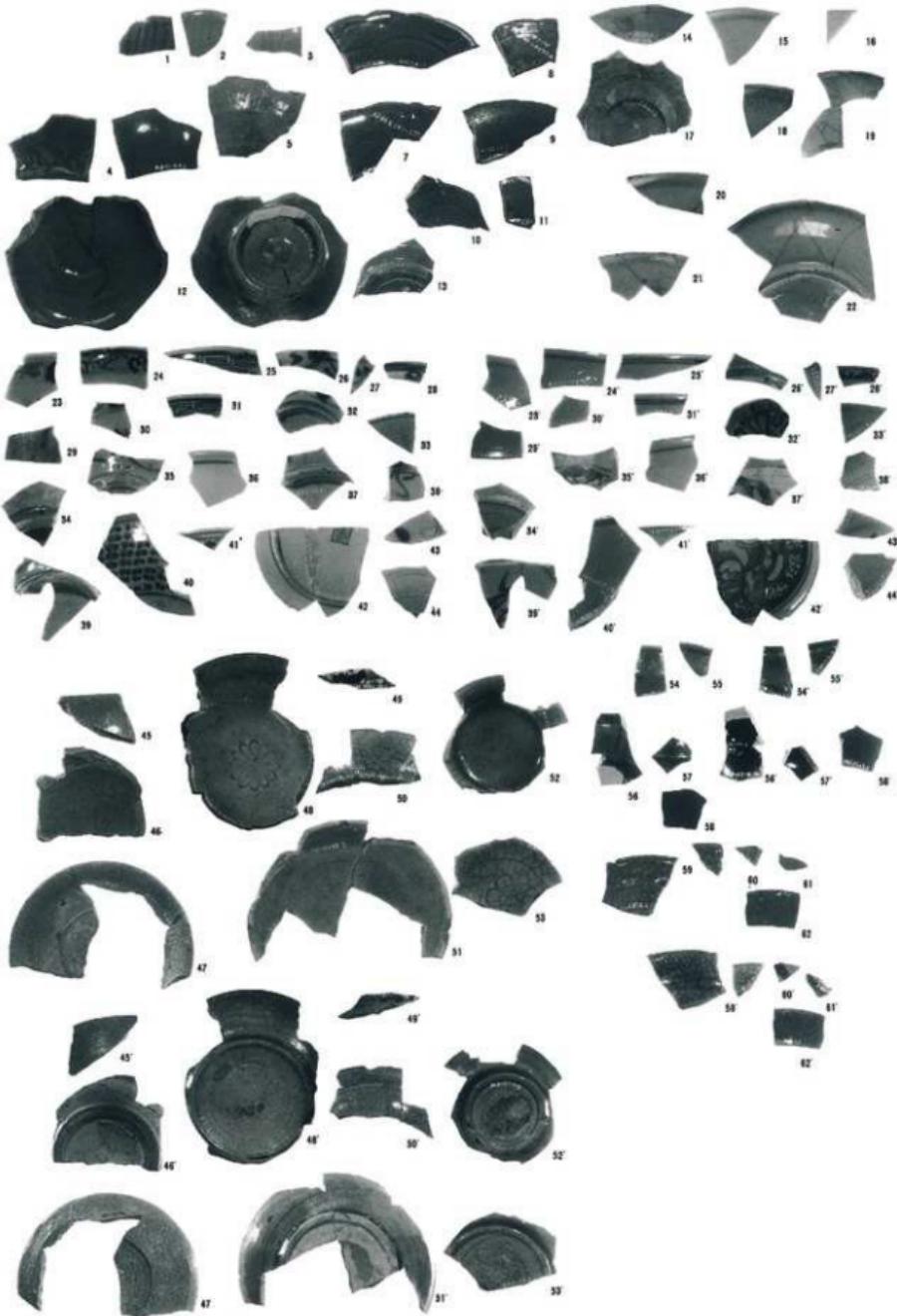
石製羽口出土状況













1 - 5

31
32
35

45
46
樹列跡周辺、

19
21
25

i
28
33

34
37

1
44

49
空塗跡東平坦面、

53 - 59

15 L区トレンチ出土(他は空塗覆土)



埴土 4 出土クギ他



(空塗瓦)



埴土出土

粒状瓦(36号竖穴)



うるし皮膜(35号竖穴地土上)



鐵造剣片(35号竖穴)

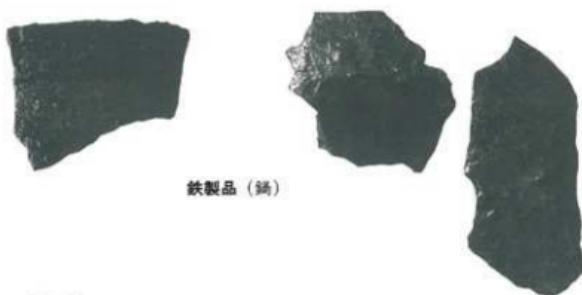


鍛造劍片(37号竖穴)



鰐魚骨 37号竖穴

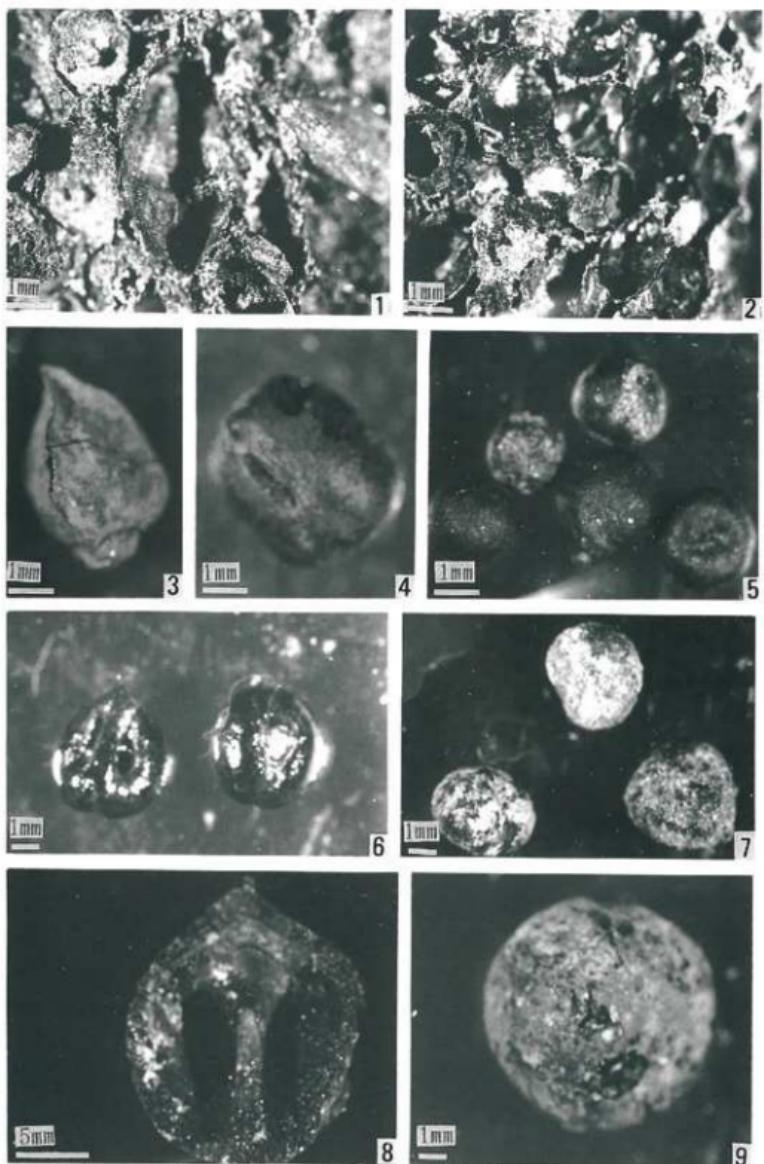




鉄製品（鈴）



木製品（簪・折扇・曲物底・ヘラ等）



1 イネ粒塊
2 キビ塊
3 ソバ
4 小豆
5 アブラナ科？種子1

6 ヤマブドウ
7 アブラナ科？種子2
8 クルミ肉果皮
9 キハダ果実



10



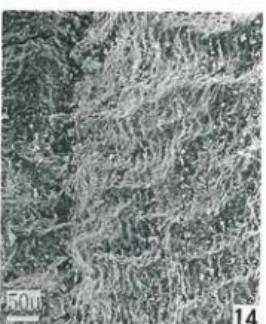
11



12



13



14



15



16



17



18

10 稲のついていないイネ粒

15 ソバ粒

11 稲が残存しているイネ粒

16 写真15の表面拡大写真

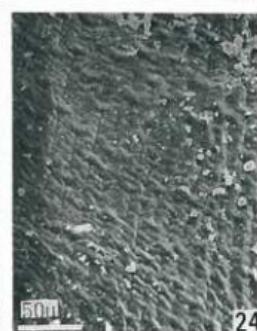
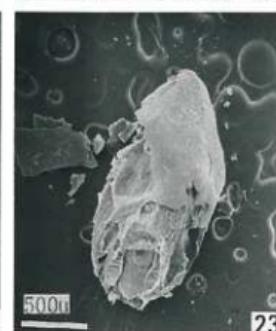
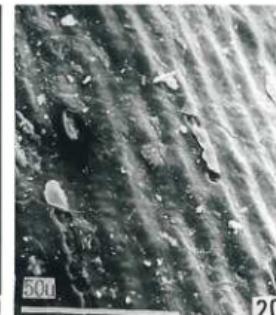
12 写真11の稲の拡大写真

17 小豆粒

13 ソバ粒

18 写真17のへそ部拡大

14 写真13の表面の拡大写真



19 キビ粒

24 写真23中央部拡大

20 写真19右寄り中央部拡大

25 アブラナ科A

21 キビ粒

26 写真25表面部拡大

22 写真21の中央部拡大

27 アブラナ科B

23 キビ粒

28 写真27表面部拡大

史跡 上ノ国勝山館跡 X

—昭和63年度発掘調査環境整備事業概報—

発 行 上ノ国町教育委員会
北海道桧山郡上ノ国町大留100

印 刷 平成元年3月25日

発 行 平成元年3月31日

印刷所 長門出版社印刷部
